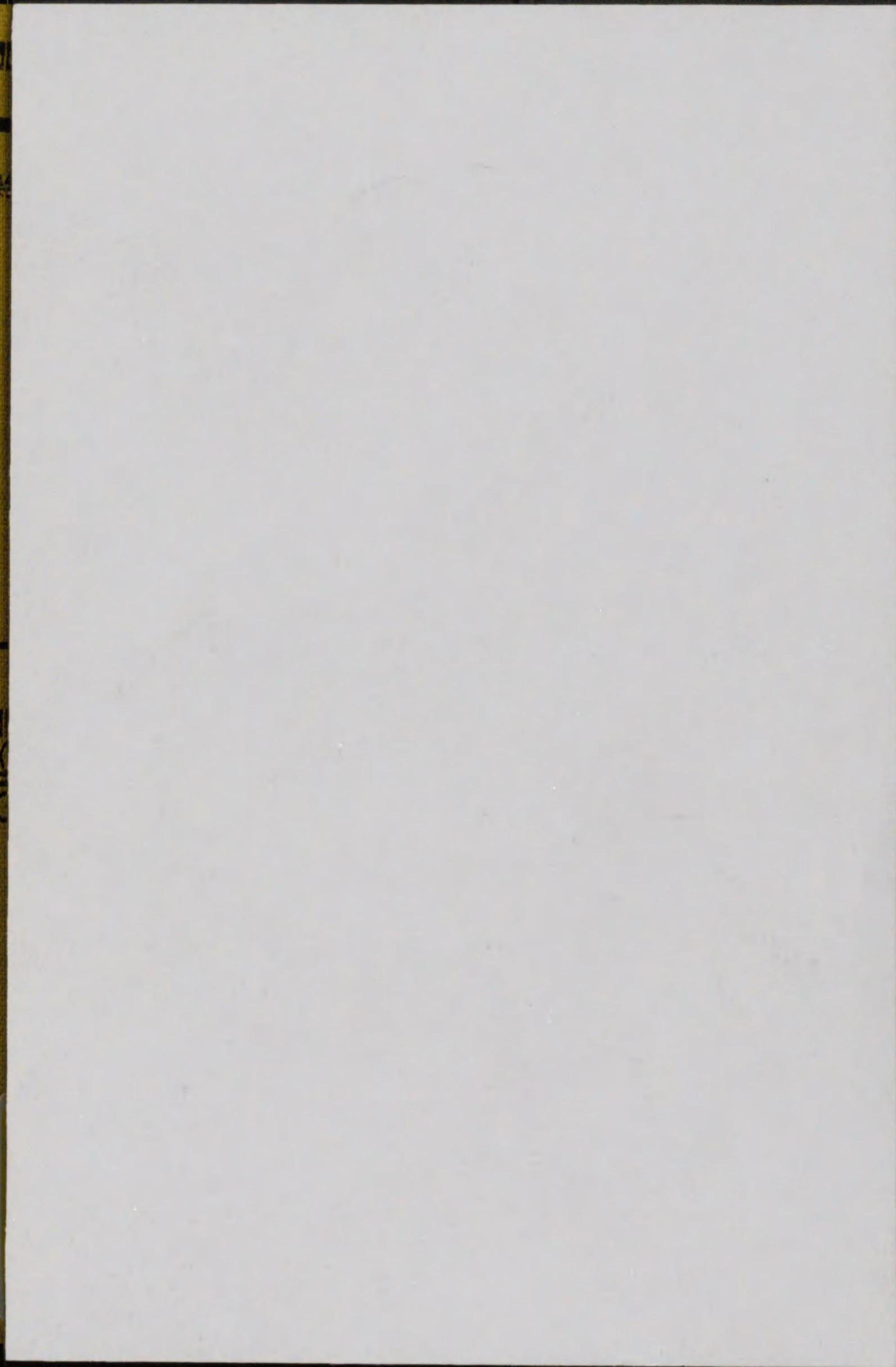
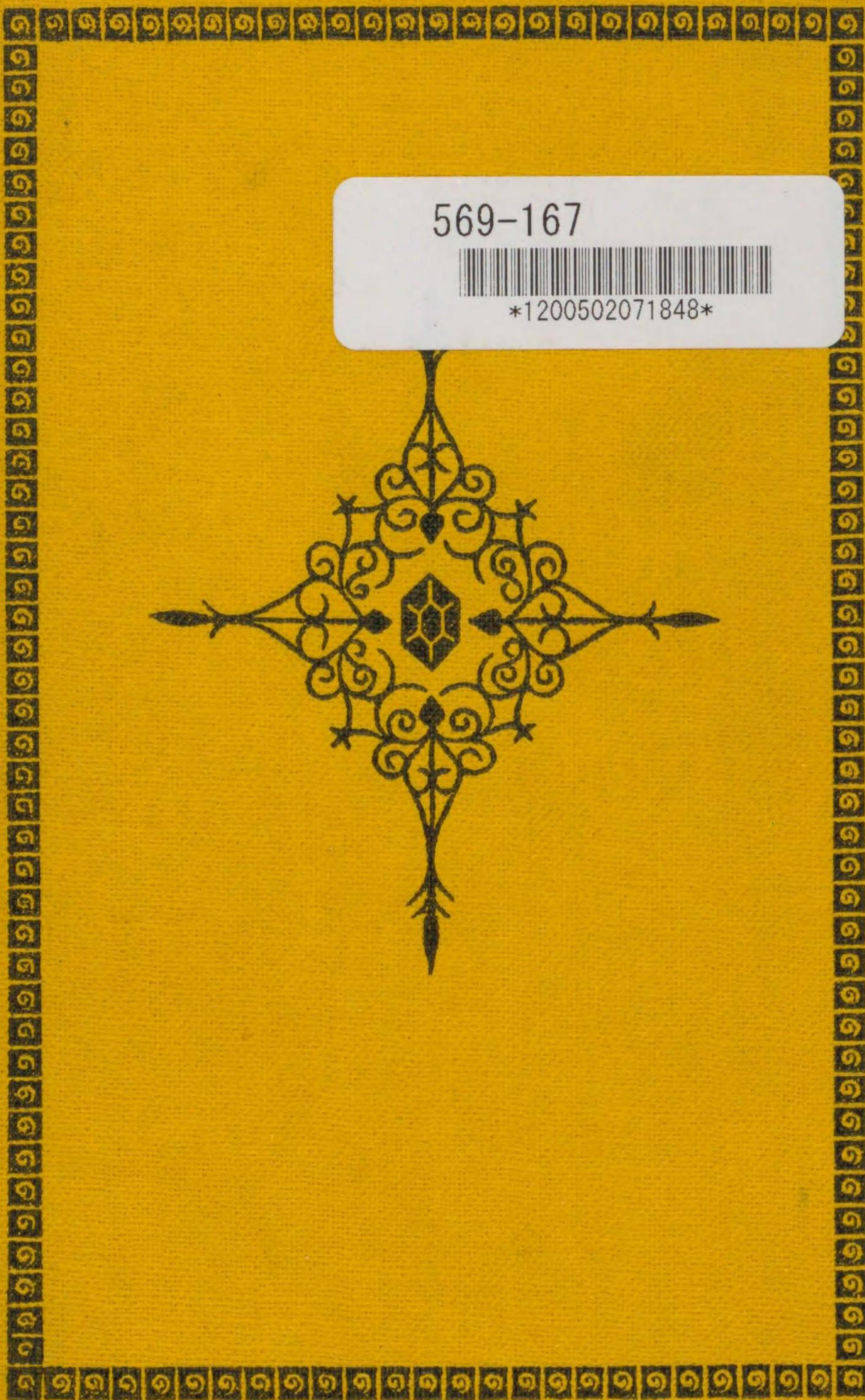
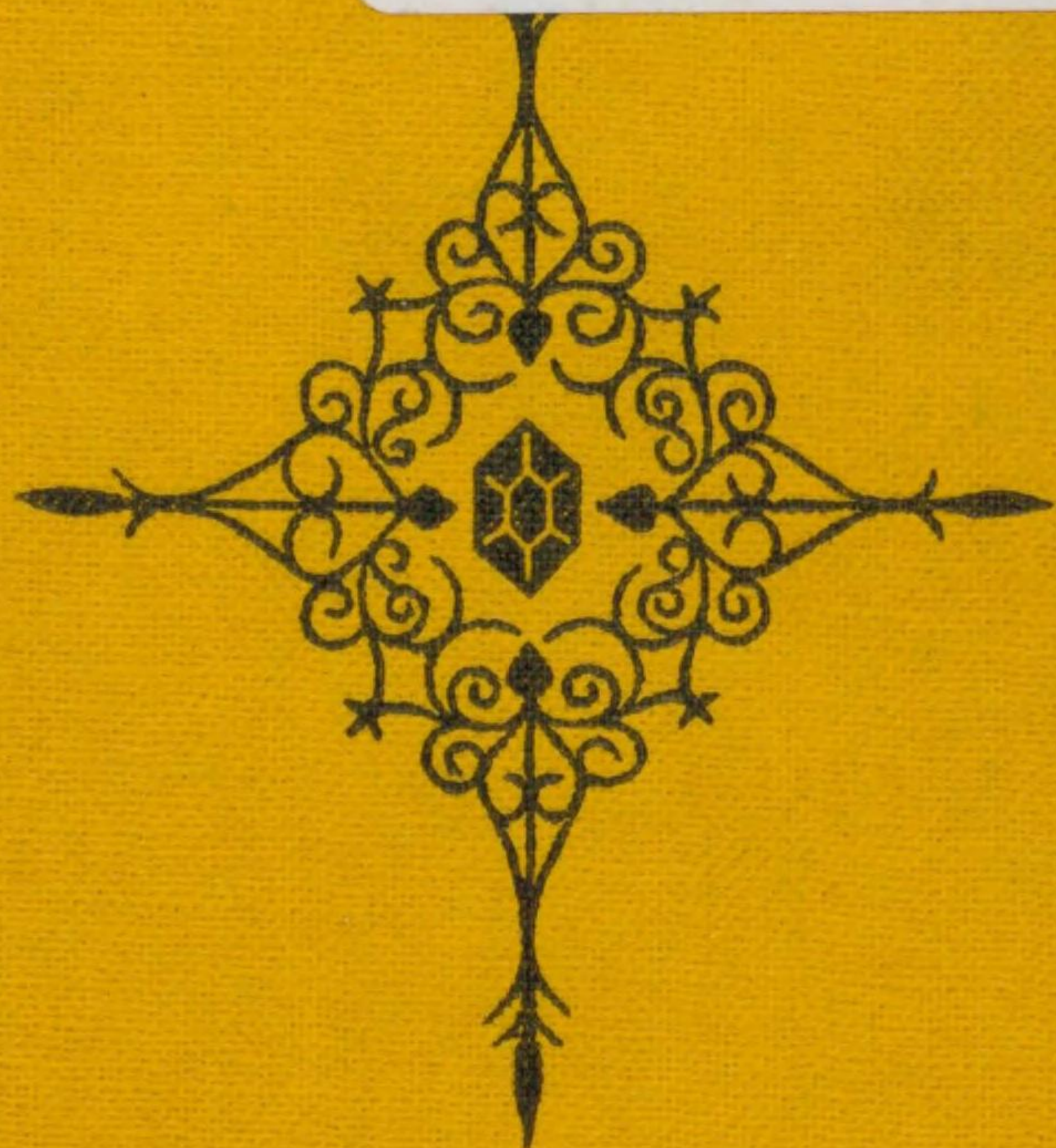


569-167



1200502071848





日探偵小説全集

4

甲賀三郎集

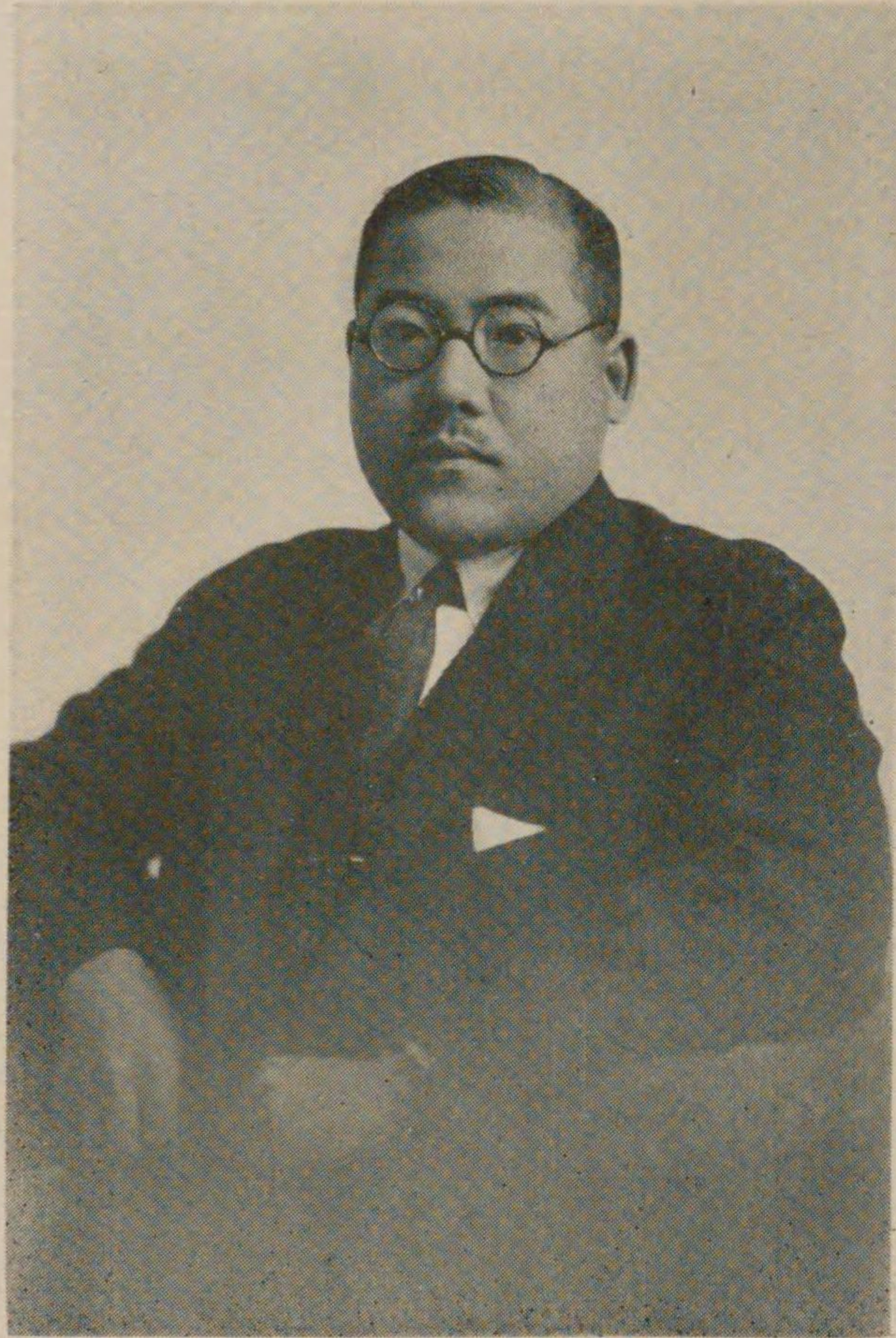


改造社

日探偵小説全集

日探偵小説全集

日探偵小説全集



者 著

569

167



I 種
W



1200502071848

目次

次目

從弟の死……………三

拾つた和銅開珍……………五五

氣早の惣太……………八九

惣太の經驗……………九〇

惣太の幸運……………一〇

惣太の喧嘩……………一三一

惣太の受難……………一四八

惣太の意外……………一六九

女を捜せをん な さが……………一九一

原稿料の袋げん かう れう ふくろ……………二五五

夜光珠を繞る女性やくわうじゆ めいじゆ ぢよせい……………三〇三

戀を拾つた話こひ ひろ はなし……………三八九

黒衣を纏ふ人こくい まと ひと……………四〇九

從 弟 の 死

——村松博士の手記——

存分に湯に浸つて、上手な按摩に揉み抜かれた後のやうに、快い疲れを全身に覚えながら、私はとん／＼と階段を上つた。湯から上つてから部屋まで百幾つかの階段は全く辛いもので、原温泉のうちでも殊にこの鹽の湯が好きで、と云ふのは谷底から湧いて出る湯を河原の洞窟に引いて、そのまゝ湯槽にしたのが氣に入つたのだが、この階段には閉口する。人間も五十の坂を五つも越すと、意氣地のなくなるものだと思へながら、漸く部屋の前に辿りついて、障子をガラリと開けた。その拍子に部屋の中程に坐つてゐたはる子が振り向いた。此頃沈み勝ちな娘ではあるが、いつにも増した蒼い顔をしてゐたので、又何事か起つたなと思つた。

「どうしたんだい。」と聞くと、

「お父さん、電報よ。」はる子は頼信紙を持つた手を顫はしてゐた。

娘の差出した電報には「ミツユキ ユクエ マダシレヌ シキウカヘレタノム モト」とあつた。

「たうとう来たね。」私は嘲るやうに云つた。

「え。」はる子は面を伏せた。

「別に心配する事はないぢやないか。」

さう云つて私はどつかと坐つた。

「でも——」

「心配しなくても好い。」私は娘の續けて云はうとするのを抑へつけて、叱るやうに云つた。

光行と云ふのは姓を矢本と云つて私の従弟である。電報の差出人のもとと云ふのは矢本の母で、私には伯母に當る。兩三日前その伯母から手紙で、光行が私達父娘が鹽原へと東京を發つたその晩から、どこかへ出た限り消息がないが、もしやそつちへ行つてはるまいか、と云ふ意味の事を云つて来た。だが、光行は來てゐなかつたので、その旨返辭を出して置いたのだが、未だ行方が知れぬと見える。私達がこゝへ來てからも一週間餘りになるから、その間行方が知れぬとすると、伯母も心配する筈だ。

「どうなさいますか。」はる子はうるんだ眼で私の顔をまじ／＼と見た。

「さうだね。歸らざばなるまいかね。」私は甚だ氣が乗らなかつた。

光行には兄弟はなかつたし、伯母は夙うに夫に死に別れてゐたし、私を除いては鳥渡相談相手

がないのだつた。

「では支度をしませう。」娘は立上らうとした。

「お前は残つてゐたら好いだらう。」私は娘の白い項をぼんやり見ながら云つた。

「えつ、私だけ？」

「淋しいか。」

「え。」

「でも東京へ歸るよりは好いだらう。」

「」
娘を連れて避暑に來たと云ふ事は、研究に没頭してゐた私としては數年來かつて無い事だつた。豫定ではもつと逗留する筈だつたし、それに本來、靜養して娘の氣晴しをするのが目的だつたのだ。はる子はやつと二十を越した許りの處女の胸には包み切れない惱みを抱いてゐたので打沈んでゐたのだつたが、だん／＼氣も落着いて來て、幾分快活になつて來た所だし、實は少しも歸りたくないのだ。殊にはる子はどうしても置いときたいのだつた。

「向うの座敷のをばさんね、娘さんを連れた。好さうな方ぢやないか。ね、あの方によく願ひして置くから、我慢してお出で、お父さんは用さへすめばすぐ迎ひに來るから。」

娘は微に點頭いた。

私は吳々も娘の事を、向座敷の中年の婦人に頼んで、支度がすむと、午後の汽車に間に合ふやうに自動車と呼んで貰つた。最愛の娘、しかも異常な精神的打撃を受けてゐる娘に一時たりとも別れる事は何と辛い事であつたらう。

崖に圍まれた宿屋の玄關から自動車に乗り込むと、娘のうら淋しさうな顔がいぢらしく私の眼に寫つた。運轉手は私の胸のうちなどお關ひなしに、エンヂンをスタートさせると、すぐに車をつゞら折の山路に驀進させた。

*
聯絡が旨く行つたので、夕方上野驛につく事が出來た。汽車の中の時間は相當あつたのだが、光行の事や、娘の事や、これから遭遇するであらう所の困難や、いろ／＼の惱ましい事が、交る交る頭腦を占領したので、殆ど夢中で過して終つた。上野の驛を出ると久し振りで見る都の通りは一入の雑沓であつた。私はすぐに車に乗つて自宅に向つた。

自宅へ歸りつくと、意外にも玄關で、木村清が私を待ち受けてゐた。彼は三十そこ／＼の脊のスタリとした氣持のいゝ青年だが、私立探偵といふ妙な仕事をしてゐる男で、これまで私の専門の化學上の鑑定的事で度々會つた事がある。頭腦はしつかりしてゐるし、中々機敏だし、犯罪捜

索にかけては勝れた腕があるの、相当認められてゐる男なのだ。

「お歸りなさい。驛へお出迎ひをしようと思つたのですが、時間が分らなかつたものですから。」
彼の話振りは相變らず、キビ／＼してゐる。「實は矢本の御隠居さんから御當主の行方の搜索を依頼されましたので、鳥渡お目にかゝりたかつたのです。」

「あゝ、さうですか、それは御苦勞です。まあ、御上りなさい。」

私は澁々彼を應接室へ通した。

「御心配でございませう。先生の鹽原へお發ちになつた日から行方が分らないのださうですが、何か御心當りはございませぬのでせうか。」

「さつぱりありません。」

「さうでございませうか。では少しお伺ひしたい事がございますが——」

それから木村は光行の平素の性癖や交友の事や、出入りする場所などについて、委しく聞き出した。私は知る限り答へた。彼はニコ／＼しながら問答を繰り返してゐたが、その鋭い眼は何者も探らずには置かないと云ふ風に光つてゐた。

「いや、どうもいろ／＼有難うございました。所でお忙しい所を御迷惑でせうが、一つ分析が願へませんでせうか。」彼は急に話を變へて、黒い重さうな金屬の破片をポケットから取り出した。

「鋼鐵のやうだが、私はそれを手に取りながら「炭素でも定量するのかね。」

「いゝえ、燐を願ひたいのです。」

「燐？」私は聞き咎めた。「鋼鐵には普通燐は含んで居らんがね。」

「それで實は特別に燐が見て頂きたいのです。」

「やつてあげても好いが、私は考へながら答へた。「私は元來御承知の如く有機化學の方で無機の方は得意でないから——」

「私もそれは承知いたしてゐますが、これは是非先生にお願ひしたいのです。」彼はいつも眞面目になる時にするやうに、きつと肩を結んで私を見上げた。私にはそれが何か意味ありげに聞えた。

私はちつと彼を見返した。實は私には少し思ひ當る所があつたのである。私は暫く思ひ惑つた。この冷い灰色の鐵片から、よし何が出て來た所で、又その結果がどこへどんな影響を及ぼさうとも、私は仕方がないのだ。私の學者的良心は何者にも煩はされる事なく、冷い科學的の斷案を下す事が出来る。いや下さねばならぬのだ。私は決心した。

「よし、やつて上げよう。」

木村は喜んで頭を下げた。そして満足さうに歸つて行つた。私は彼の後姿を見送りながら、彼

の如き人物を味方としては頗る頼しいが、それだけ敵としても恐るべきものであると云ふやうな事を漠然と感じた。

木村が辭し去ると、私は直ぐ留守を頼んで置いた堀田越吉を呼び入れた。彼は若い有望な理學士で私の助手である。堀田は光行の失踪事件を聞き知つてゐたと見え、悄然として私の前に現れて、私に慰めの言葉を發した。ふと見ると右の手首を繻帶して蒼い顔をしてゐる。

「どうしたんだね、手首は。」と尋ねると、

「お留守中に元素分析の加里管を爆發させましてね、鳥渡怪我をいたしました。彼はどぎまぎしながら答へた。

「さう、大した事はないのかね。」

「え、大した事はありません。」

「氣をつけなくてはいかんね。」

それから鹽原温泉の事など一言二言話した後、私は夕食もそこ／＼に、伯母に會ふべく矢本の家を訪ねた。夏の夕はいつかトツプリと暮れてゐた。牛込見附内の彼の豪壯な邸宅は氣の故かひつそりと喪服をつけたやうに静まり反つてゐた。

伯母は私の豫期してゐた通り、さ程取り亂してはゐなかつた。けれども可成の精神的打撃を受

けてゐるに相違ない事は明かに察せられた。ほんの暫く會はないうちにひどく弱つたやうに見受けられた。

彼女は、私は正確には覺えてはゐないけれども八十に近い年齢で、しかも、若い者も及ばぬ程壯健だつた。私は若い時から彼女を見る毎に思った。男に生れて來れば好かつたと云ふのは全く彼女の事である。彼女はその外貌がしつかりとして威壓的であると共に、内心も亦判断力に富んで頗る決行的であつた。が決して男性化はしてゐなかつた。女性的な情熱にも乏しくはなかつた。時代の相違から來る頑固さは仕方がなかつたが、學識も十分にあるし、彼女は私の最も尊敬する女性の一人だつたのだ。

彼女はポツリ／＼と話し出した。

従弟の光行は、前にも聞いた通り、私が娘を連れて旅立つたその晩から宅に歸らないのだつた。一晩位宅を明ける事は珍しくないもので、伯母はさして氣にしなかつた。と云ふのは彼には五十いくつの今日迄定つた妻がないのであつた。私はこゝで従弟を誹謗するに忍びない。殊に彼が行方不明になつて、或は既に死んだのではなからうかと思はれてゐる際だから、一層云ひ悪いのだが、彼の行方不明になつた事件を記録する以上は、この點に言及するのは、蓋し止むを得ないのだ。彼はある事情から終生妻を娶らなかつた。その爲であらうか、彼は職務上に於ても、又社

交上に於ても、さして非難を受けない紳士であつたが、閨房の事になると、立派とは云へなかつたのである。然しそれとても彼位の社會上の位置を保つてゐる人達には有勝ちの事で、取引上の事で狭斜の巷に出入するのは止むを得なかつたらうし、それに無妻でもあり、職業的の女に戯れるのは許し得べき事だらう。又實際私は彼が良家の處女を弄ぶと云ふやうな事は絶えてないと信じてゐたのである。が、この私の考へは意外にも後に覆へされた。最近の彼の品行は私の豫想以上に亂れてゐたらしかつた。(永く獨身生活をした者の中年以後に起る病的傾向でもあつたらうか)

さて、光行の行方が一晩二晩分らないうちには、さして氣にかけられなかつたが、それが三晩四晩となつては打ち棄て、置けなかつた。伯母は始め大方彼が私達の跡を追つて鹽原へ出向いたのであらうと私達へ照會の手紙を出したのであつたが、それが豫期にはづれたので、始めて狼狽し出した。そしていろいろの人の手で彼の消息が探索せられた。

當日の朝、彼は平常通り彼の經營する鐵工所に、いつもの通りの時間に姿を現した。この二三日來何か心配でもあるやうにむづかしい顔をしてゐた彼は、その日はむしろ平生より機嫌が好かつたさうである。午前中彼は彼が苦心經營して今日の隆盛を來した大工場——無論之には彼の父の殘した遺産や、母親の内助や又、私自身の技術上に於ける助力等が預つて力があつたが——

を、いと満足氣に一廻りした。晝食後彼は彼の部屋で多くの事務を處理して、五時過ぎ工場を出た、それきり宅へ歸つて來ないのである。後に調べた所によると、當夜彼の知人で彼と會合した者は一人もなかつた。又彼の出入する遊里にも、彼を客とした家は一軒もなかつた。さうして意外な事には、彼は夜十時過ぎ、再び工場に姿を現してゐたのである。思ひがけなく夜遅く重役の來訪を受けた門衛は、驚きの餘り直立して禮をした。彼は軽く會釋を返して、門内に這入ると直ちに工場の方へ行つた。彼の後姿を見送つた門衛は、反射的にタイムレコーダーについてゐる大きな時計の面に眼を移すと、それは正に十時十五分過ぎを示してゐた。

工場は好況時代には夜も晝と同じく數多の職工が出勤して、時々開く爐の口から洩れる眞赤な光りに、半面を照されて半裸體で黙々として働く者や、右往左往に走つて罵りわめく者や、さてはモーターの廻轉につれて、重い響きを立てるベルトの音などが交錯して、晝とは違つた物凄さと活々さがあつたが、今はたゞ、中斷すべからざる仕事に、最少限度の職工が夜番としてついてゐるだけで、大きな鐵骨の小屋組から下つてゐる睡さうな電燈が鈍い光を投げて、眞黒な巨大な機械の蔭に蠢いてゐる一つ二つの人影を臚に描き出すのみであつた。

彼を認めた職工は三人あつた。二人は彼が鑄物工場のあたりを歩いてゐるのを見た。他の一人は彼と話さへ交へたのである。その職工は最近据ゑつけられた獨逸の特許品である大きな製鋼爐

の番をしてゐたので、之は數噸の銑鐵を鋼鐵に變へる事の出来る爐で、在來のものに比して頗る大きかつたので、火入れ後の結果については非常に心配せられてゐたのであつた。それで特に他會社から經驗ある職工數名を抜擢して、仕事に當らせてゐたので、當夜の番人もそれらの職工の一人であつた。

光行はその職工に當直の職長を呼んで來るやうに命令した。職工は職責上爐の傍から立去る事が出来ないので躊躇してゐると、彼は自分が見てゐるから大丈夫だと云つた。やがて、職工が職長を連れて戻ると、意外にも重役の姿はそこには見えなかつた。さうしてそれからどう云ふものか、火の色が非常に悪くなり、之を加減するのに随分と骨を折つたが、結局直す事が出来なかつたさうである。

「この日の一日二日前からね、氣分が悪いやうで、なんとなく洗んでゐて、それに足許が少しよろついてゐたやうに思へた。尤も之は後で思ひ當つた事だがね。」

伯母はかうつけ加へた。

今まで眞直に立つてゐた蚊遣の煙が、スーツと岐阜提灯に照された縁の簾を縫つて二筋三筋に分れながら廣い庭の方へ消えて行つた。思ひ出したやうに團扇を使つた伯母の顔は暗かつた。伯母の顔を仰ぎ見ると、氣の毒だといふ感がむら／＼と湧いて出た。が、私は勉めて平氣を装う

た。

私は伯母といろ／＼打合せた末一先辭去したのである。

二

それから一週間のうちに、いろ／＼不愉快な事が起つた。私達はなんだか猜疑の眼で周圍から見られるやうになつた。光行の行方は依然として不明だつた。私は焦慮したけれども、無論彼の搜索については私は何等貢獻する事が出来ないのだ。私は伯母と共に彼の事業や財産に關する整理に忙しかつた。

思へば光行が行方不明になつた晩に私達父娘が旅に發つたと云ふ事は、幸な事であつたのだ。私達は少しも氣づかなかつた事だけれども、從弟の消失によつて、遺産について一番利益するものは私達だつたので、探偵學の初歩によつて、私達の上に疑ひの眼が光り出したのだつた。從弟の失踪當夜の私達の行動は細大となく調べられた。が、もとより私達は當夜六時三十分の列車に乗つて上野驛を發つたのであるから、上野驛の驛員によつても乗つてゐた列車の車掌によつても西那須から鹽原迄の自動車の運轉手によつても十分認められたし、又鹽原以外の地に出なかつた事は旅館の番頭達によつても十分證明せられた。殊に汽車中で大宮驛附近で、一人の知人に遭つ

たと云ふ事は、話しかけられた當時は稍迷惑を感じた事だつたけれども、その友人の證明が今は反つて非常な幸ひとなつたやうな次第だつた。之等の取調べは私にとつて實に不愉快だつた。殊に娘のはる子にとつては堪ふべからざる苦痛であつたに相違ない。辛辣なる檢事が、私が列車中娘に夏蜜柑の皮を剥いて與へたと云ふ些細な事實を失念してゐたのを鋭く訊問した時などは、はる子は遂に卒倒する程であつた。いや私は今徒に興奮してゐる時ではない。靜に一週間の出來事を書き記して見よう。

伯母の許で詳しく光行の失踪の事情を聞いて歸つた翌朝、助手の堀田越吉が明に狼狽した態度で實驗室に這入つて來た。彼はづかくと私の前に來て口籠りながら云つた。

「先生、お、お嬢さんが自殺せられます。」

私は驚いて私の愛する助手の顔を見た。

娘が自殺をしないかと云ふ懸念は私にもないではなかつた。然し鹽原温泉の數日で私は娘の心が平靜になつたのを認めたので、安心してゐたのだつたが、どうして堀田はこんな事を云ふのだらう。私は靜に云つた。

「君はどうしてそんな事を云ふ。」

彼は暫く顔を赧くして黙つてゐた。しかし、やがて決心したやうに答へた。

「鹽原から手紙を貰つたのです。」

「いつ？」今度は私が狼狽した。

「今朝です。」

私は二週間前のある朝の娘の姿を思ひ浮べた。娘はこの一年ばかり光行の家に預けてあつた。一人娘として甘やかして來た彼女は——と云つて彼女を我儘な愚かなものとは思はぬが——數年前、母を失つて父親である私一人になつてからは一層甘やかす危険があつたし、それに私自身の經驗による持論としても、人は殊に女はどうしても他人の家に寄寓して、親の家の有難さや、奴婢に對する同情心などを養はねばならぬと思つてゐたし、一つには伯母もと子の躰を受けさせたと思つたので、彼女を従弟の家に預けたのであつた。これは後に思ひ合すと取り返しのつかぬ失敗であつた。或朝彼女は蒼ざめた顔に、取り亂した姿で私の懷に歸つて來た。それから間もなく私は彼女を鹽原に伴つた。そこに滞在してゐるうちに電報で呼び返された事は既に述べた通りである。

娘がやるせない情を堀田に訴へたのは實に意外だつた。堀田ははる子の婿にしても決して恥かしからぬ人物である。が、娘の戀人であると云ふ事は今まで氣づかなかつた。戀人でなくて、どうしてこんな事を打明けられようか。私は決心した。娘はやはり呼び返した方が好い。

「君。御苦勞だが、これから直ぐに鷹原へ行つて娘を連れて歸つて呉れ給へ。」

堀田は嬉しいとも迷惑ともつかぬ表情をして出て行つた。

私は助手に代つて、木村の置いて行つた鋼鐵の分析を始めた。

夕方、堀田から娘の無事であつた電報を受取つた。

翌日、はる子は堀田と共に親鳥の巢に歸つて來た。私はほつとした。

この時から警察の不愉快な取調べが始まつたのである。参考人として一度は娘と共に検事局に出頭を命ぜられた。堀田も警察へ喚ばれた。矢本の行方不明事件は私の家を暗くした。見えざる監視と疑惑の眼が絶えず我々の上に注がれてゐた。私達はだんく無口になり憂鬱になつた。

その間に例の鋼鐵片の分析が出来上つた。可成の燐を含んでゐた。

私は電話で木村を呼んだ。彼は直ぐにやつて來た。

「可成燐を含んでゐるよ。」私は分析表を見せた。

「さうすると、どう云ふ事になりますか。」彼は聞いた。

「どう云ふ事と云ふと……」

「實はこの試料は矢本さんの工場の例の新式の爐から取つたので、丁度、矢本さんが立つて見て居られたと云ふ時の分ですが。」

「——」私はぢつと木村を見た。

鋼鐵は通常燐を含んでゐない。いや燐を含ませない爲に苦心するのである。燐を含むと鋼鐵の性質が著しく劣悪になるので、銑鐵を鋼鐵に變へる時に、空氣を吹き送つて、銑鐵中の化合燐を追ひ出して終ふ。職工は絶えず爐につき添つて燃え上る焰の色を注意してゐるのだ。あの晩從弟は番人の職工を餘所へ追ひやつた。さうして暫く爐の傍に立つて居た。やがて彼の姿が見えなくなつた。それから爐の火の色が悪くなつた。私はふと、この二三日前から心配氣だつたと云ふ從弟の様子や、足許がフラついてゐたと云ふ伯母の言葉を思ひ出した。もしや從弟は爐の中へ——人體には多量の燐がある。もし人間が爐の中へ落ちたら——私は木村の顔を覗ひながら、私のこの推論を云はうか云ふまいかと思ひ惑つた。

「警察では。」思ひ惑つてゐる私の顔をまじく見ながら、木村はたうとう口を切つた。「矢本さんが爐の中へ落ちたのではないかと云ふ疑ひを持つてゐるさうですが。」

「出来上つた鋼鐵中に燐を含んでゐると云ふ事實から、さう推斷する事は出来ない事ぢやないか——」私は答へた。

「然し、どうでせう。あの爐の中へ人が過失で落ちませうか。」

「さあね。私はあの爐が据えつけられた時に一度見た事があるが、可成大きなものであるし、爐

口も十分人の這入るだけはあるが、過失で落ち込むと云ふ事は——」
 「むづかしいでせう。」木村は私の言葉を途中から引き取つて云つた。
 「むづかしい。」私は彼の言葉を肯定せざるを得なかつた。「飛び込んだと云ふなら、起り得るね。」
 「すると、自殺と云ふ事になりますね。」
 「自殺？」私は思はず相手の言葉を繰り返したが、はつと、今何について話してゐるかと思ふ事に思ひ當つて、口をつぐんだ。
 従弟が自殺したかも知れぬと云ふ想像は人々にあつた。然し、それには遺書もなかつたし、彼の財政状態は鞏固であつたし、其他いろ／＼と調べられた結果は、只二三日來の様子が稍打洗んでゐたと云ふだけで——その理由は私には思ひ當る所はあるが、どうして私はそれを公表する事が出来よう——別に之と云つて自殺すべき理由は見出されないのであつた。それに過失で爐の中へ落ちると云ふ事は實際起りさうにもない事であつた。
 「もう一つ考へ方があります。」木村は私の當惑に一向構はない調子で續けた。「突き落されたんだと云ふ。」
 「然し矢本は一人であつたんぢやないか。」私は餘りに意外な彼の臆測に驚きの聲を上げた。
 「それに彼には人から恨まれるやうな事はなかつた筈だ。」

「一人であつたと云ふ事は突き落されなかつたと云ふ有力な理由にはなりませんね。又恨まれてゐるかゝらないかと云ふ事は、さう容易く第三者に解る問題ぢやありませんよ。」木村は一息に喋つて私に口を入れる暇を與へないで更につけ加へた。
 「處でもう一つ考へ方があるのです。」
 「——」私は熱心に彼の云はうとする所を聞かうとした。
 「爐では何事も起らなかつた、とかう云ふのです。」木村は云つた。
 「では燐は。」
 「燐は人間でなくても、何か燐を含んだものを故意に投げ込んだと考へる事が出来ますよ。」彼は事もなげに答へた。
 その通りである。今日の化學では例へば鋼鐵中の燐は容易に定量出来るけれども、その燐が人體より来たものであるか、又は他の燐を含むもの、例へば燐灰石のやうなものから来たのかは區別する事が出来ないのだ。
 「君の云ふ事は間違つてはないが。」私は彼の云ふ事に敬服しながら「ぢや、一體何の必要があつて矢本は燐の含有物を爐の中へ投げ入れたのだ。さうして今だに彼が行方不明である事について、君はどう結論を下すのだ。」

「それは残念ながら未だ申し上げられませんが。」彼は答へた。
やがて、彼は燐含有量を書いた分析表をポケットに収めて歸つて行つた。妙な男だ。自分で燐の分析を依頼して置きながら、その存在によつて推定せられる事實を否定しようとしてゐる。この男のやり方は未だ私にはよく分らない。私は少し不安になつた。だが、彼にどうして真相が分るものかと云ふ氣がした。

その晩私は伯母を訪ねた。

二週間に亘る息子の行方不明と、手を盡した搜索の無効に、伯母はもうあきらめてゐた。氣丈な婦人ではあるが、年が年であるし、眼に見えて弱つてゐた。

私は木村に頼まれた鋼鐵の分析の結果の話をした。

燐の存在と、それから推定せられる事實をなるべく、伯母の感情を興奮させないやうに話した。

伯母はぢつと私の云ふ事を聞いてゐた。やがて云つた。

「さう云ふ風な推測は前に警察の方から聞きました。それで私はね。」伯母はこゝで心持聲をひそめて、然し力強く云つた。

「どうもあれが爐に落ちたと云ふのが本當ぢやないかと思つてゐます。」

「過失でゝすか。」私は伯母の顔を見て云つた。

「ぢやない自殺だと思ひます。」

「えつ、だつて自殺する理由が——」

「ないとは云へん」ときつぱり云つた伯母は、急に調子を變へて、聲を震はした。

「政行、私が至らなかつた。どうぞ許してお呉れ。」

伯母の眼には涙が光つてゐた。私は久し振りに、伯母から私の名を呼び棄てにされて、幼かつた時代に、悪戯が過ぎて儼然と呼びつけられた時や、土産物を買つて來ては、頭を撫でながら私の名を呼んで呉れた時の記憶が歴々と蘇へつて來て、懐しいともなんとも云へないある一種の感情がこみ上げて來た。私の眼にも涙がにじみ出して來た。

「政行、お前の大事な娘を預つてゐて、あゝ云ふ事になつたのは何とも申譯がない。昔なら私は光行を斬り棄て、自害する所です。」

あゝ、やつぱり伯母は知つてゐた。だが私の生命にも代へ難く思つてゐる可愛い娘、私の未來を盡くそれにかけてゐると云つて好い私の一人娘、それを野獸のやうな光行は、彼の肉慾の犠牲にして終つたのだ。もとより彼の家に彼女を預けたのは私の不明の至す所ではあつたが。

伯母は洗んだ聲で續けた。

「政行、之もなあ、あの娘があんまりよく母親に似てゐたからです。美しう生れたものは不幸です。」

私は三斗の冷水を浴せられたやうに感じた。彼女の母、即ち死んだ私の妻、あゝ彼女は初め従弟の妻たるべき女であつたのだ。彼女は美しかつた。勝れた女性であつた。私は彼女に戀した。彼女も亦私に戀した。さうして私は彼女を彼から奪つた。彼の終世遂に娶らなかつたのはその爲であつた。然し、それから二十數年經過した。彼と私とは兄弟以上に親密であり、彼は我が子の様に私の娘を愛した。彼女は確にその母親に生寫してあつた。それが従弟の煩惱をそゝつたのであらうか。それとも彼は永い間密に私に復讐の刃を磨いでゐて、私の娘を凌辱する事に依つて、それを遂げたのであらうか。いや、眞逆さうではなからう。やつぱり彼女が母に似てゐたからであらう。いづれにしても彼は私の最愛の娘に肉體の死に勝る精神の死を與へたのだ！

「が、私には光行の心もよく分つてゐます。」伯母の話は縷々として續く。「あれもあゝしたものの、きつと後悔してゐます。良心の苛責に堪へないで自殺した事と思ひます。」

何、良心の苛責だ。私の娘を弄んだ。しかも手込めにしたやうな奴に、何良心があらうぞ。悔悟の念で自殺するやうな者が、どうしてあんな野獸のやうな眞似をしよう。私は心から光行を憎んでゐる。彼は十分死に價する男だ。私は危く激怒しようとした。然し伯母の弱々しい、しみ

じみとした言葉の前には反抗が出来なかつた。運命だ。何事も運命だ。私はさう思つた。「どうぞ私の罪と、それからあれの罪も許してやつて下さい。罪の贖については私も覺悟してゐる事があります。」伯母は息をついた。

「伯母さん。」私は昔子供時代にかう呼びかけた時のやうな懐しい心持で呼びかけた。「すんだ事はすんだ事です。それより光行さんの——」私の口から思はず慰めの言葉が出た。だが、心では冷静に光行を憎んでゐた。

「いえ、いえ。」彼女は遮つた。「それは無駄な事です。あれはもう生きてる筈がありません。」餘りにきつぱりした調子に、私ははつと伯母の顔を見た。

「そりや、二週間も行方が知れないのですから、さうお思ひになるのも無理はありませんが、まあ力を落さずに——それから短氣を起さないやうにね、ね、伯母さん。」

私は之以上彼女に云ふべき言葉を知らなかつた。私は悄然として家に向つた。自宅へ歸ると又も、木村が待ち設けてゐた。

三

木村は相變らずニコ／＼して、私の顔を見ると云つた。

「先程はとも有難うございました。」
 「何か手がかりが得られましたかね。」私は聞いた。
 「え、多少得られました。そこで實はその事で鳥渡お訊ねしたい事がありまして、お伺ひしたのです。」

「——」私は黙つて彼の質問を待受けた。

「矢本さんの失踪の第一日ですな。」彼はテキパキした調子で始めた。「先生とお嬢さんは午後六時三十分の汽車で上野をお立ちになりましたね。」

「その通りだ。」私は答へた。

「それから大宮驛あたりで車内で或る友人にお遭ひになつた。十一時に西那須に着いて、すぐに自動車で鹽の湯にお出になつたのですね。」

「——」私は黙つて合點した。

「翌朝大そう早く宿をお出かけになつたさうですが、どちらへお出になつたのですか。」

「早くと云つても七時頃だつたが、鳥渡須卷の温泉まで出かけたよ。」

「須卷へは晝近くお着きになつてゐますが、どつかお寄りになつたんでせう。」

「さう。夫婦杉から源三穴の方へ廻つたよ。」

「さうでしたか。有難うございました。それで先生の方はすつかり分りました。所で、之は警察の方でも見落してゐる事ですが、先生と同じ汽車に、先生の助手の堀田越吉君が乗つてゐましたんですがね。」

「えつ、堀田が。」私は思はず大きな聲を出した。

「さうです。」

「どうしてそれが分つた。」

「實は正確に云ひますとね。」木村はニヤリと笑ひながら、「驛員や車掌の云ふ所から歸納したのですから、詰り堀田さんによく似た人があの列車に乗つてゐたと云ふ事に過ぎないのです。人の記憶と云ふものは絶對的に正確ぢやありませんし、それに大勢の客の中に或る一人をチラと見たゞけで、さう覚えてゐられるものぢやありません。ですから先生の場合でも、先生とお嬢さんによく似た人が乗り合せてゐたと云ふ事になります。尤もお嬢さんだけは間違ひないでせう。あゝ云ふ美しい方は一眼見れば忘れませんからね。ハ、ハ、ハ、——」

「そんなら好いぢやあないか。私の娘の傍に私に似た人が居れば、即ち私に違ひないぢやないか。」

「さうです。」彼は笑を收めて云つた。「ですから、先生の場合は何等疑はしい事はありません、只

堀田さんの場合ですね。本人は恐らく否定せられるだらうと思ひます。」

「さうすると、君の方が怪しくなるね。」

「然し、もし堀田さんが否定せられるとすると、代りに當夜お出になつた所を云つて頂かねばなりません。」

「無論云ふだらう。」

「所が私の調べた範圍では、堀田さんは當夜汽車以外の他の場所には見出されなかつたのです。」

「委しく調べたものだね。」私は稍皮肉に云つた。「それで何かね。堀田は鹽原まで来たのかね。」

「さうらしいです。」

「ふん。」私はちつと堀田の最近の舉動を思ひ浮べた。

「それに堀田さんは先達つて右手に繻帶をして居られたさうですが、あれはどうせられたのですか。」

「元素分析の際に加里管が破裂して、その破片で負傷したのだ。」私は何事にも疑の眼を向けずに居られない探偵に對して稍腹を立てた。「よくある奴で、我々の仕事は君達の想像だにしない所に、大きな危険があるのだ。」

「さうでしたか。」木村は私の劍幕に鳥渡口を嚙んだが、やがてニコ／＼して眞面目とも冗談とも

つかぬ調子で云ひ出した。

「それからもう一つ調べた事があります。」彼は云つた。「當夜の終列車、午後十一時發の青森行に、もう一度先生が乗つて居られるのです。」

「何、私が？」私は眉をひそめた。

「ハ、ハ、ハ、木村は笑ひ出した。「いや、之も正しくは、先生によく似た人が乗つてゐたと云ふ事です。」

「私は丁度十一時に西那須に着いてゐる。」

「さうです。だから先生である筈がないのです。第一先生は車掌とか驛員とか云ふ曖昧な證人でなく列車中で友人にお遭ひになつてゐる。然し之は大宮邊でお遭ひになり、少しお話しをなすつた切りですから、その時刻に列車内にお出になつたと云ふ證據だけで、そこから引き返して、再び上野を十一時發の汽車でお立ちにならなかつたと云ふ積極的の證據にはなりません。」

私はこんな無禮な言葉には答へる必要がないと思つた。又彼の殊更に言葉を構へて、私から何か聞き出さうとしてゐる所にも、十分警戒しなければならなかつた。けれども彼の話振りには何か私を惹きつけるものがあつたと見えて、私は口を開かないでは居られなかつた。

「然し私は度々車内を巡つて来た車掌によつて、ずつと一つ席にゐた事が證明せられてゐるぢや

ないか。「私は云はなくとも好い辯明を試みた。

「さうく。」木村は思ひ出したやうに、「先生はお嬢さんに何か果物の皮を剥いて上げられたと云ふ事を、否定せられたと云ふではありませんか。」

「否定したんぢやない。」私は少しましくしくなつて来た。「忘れてゐたんだ。そんな些細な事は忘れる方が當然だ。」

「ご尤もです。所で十一時の汽車に乗つてゐたのは無論先生ぢやありません。私は矢本さんぢやないかと思ひますが。」

「矢本？」あまりの意外に私は椅子から少し身體を起した。

「矢本さんと先生はよく似て居られはしませんか。」藪から棒に木村が聞いた。

「従弟と私はお互同志ではさう似てゐると思はない、然しよく人から似てゐると云はれた事がある。年も五つ程違つてゐるので、若い時分には全然似たと云ふ分子はないやうに思つてゐたが、お互に年をとつて、もう五つ位の差は大して關係しない年頃になつて見ると、流石に血を別けた者は争へないもので、だんく似た所があるやうになつて来た。背恰好は殆ど同じだし、横顔にほどことなく共通した所があるさうだし、殊に聲音は最もよく似てゐたので、蔭で聞いてゐてよく間違はれた事があつた。」

「さあ似てると云へば似た點があつたかも知れんが、間違へられる程似てゐる事はないよ。」

「さうですか。」木村は考へながら云つた。「矢本さんが十時十五分過ぎに田端の工場に姿を現してから、上野十一時發の汽車に乗られると云ふ事は出来得べき事ですからね。兎に角、その矢本さんによく似た男は翌日の午前三時に西那須驛に着いて、それから實に奇怪な行動をしてゐるので。」

「どう云ふ行動かね。」思はず私は訊ねた。

「それは今鳥渡申上げかねます。」彼はキツパリ云つた。

「君は始めにその男が私に似てると云つたり、又矢本に似てると云つたり、どう云ふ據り所があるのだね。」

「その列車で午前三時に西那須驛に下車したものは、割に多かつたのですけれども、私が驛員に矢本さんの寫眞を見せて、かう云ふ人が下車しなかつたかと聞くと、風體は全で違つてゐましたが、似通つた人が一人下りたと云ふ譯なんです。」

「ぢや君は矢本も鹽原へ行つたと云ふのだね。」

「さあ、それははつきり申上げられませんが、どうもさうぢやないかと思はれる節があります。つまり先生と令嬢とが鹽原へ出かけられると、堀田君がそつと跡をつけて行く。續いて矢本さん

が出かけて行く。要するに鹽原に何か曰くがありますよ。鹽原は一度委しく調べて見る必要がありません。」

「さうすると君は、矢本が十時頃工場に姿を現してから、十一時の汽車で鹽原へ行つたと、かう推測するのだね。」

「まあさうです。」

「矢本はなんの爲に態々工場に寄つたのかね。」私は木村をちつと見て聞いた。

「さあ、それは鳥渡分りかねます。」彼は平氣で私の鋭い視線を受け流しながら答へた。「矢本さんが鹽原へ行かれたと云ふ推測が正しいとすると、矢本さんは先づ爐に細工する爲につまり燐の化合物を爐に投げ込んで、自殺を装ふ爲に立寄つたものとしたか考へられませんか。然し自殺を装ふ積りなら、第一遺書を書くでせうし、その外の事から云つても自殺を装ふ理由がないやうに思はれる。さうすると、爐に細工したのは、矢本さん自身でなくて誰か變装したのかも知れません。いづれにしても、矢本さんの消失を願つてゐるものでなければならんと云ふ事になります。」

「ふん。」消失を願ふものは自分だと考へながら私は云つた。「當夜の職工は調べたかね。」

「全部調べました。怪しい者は居りませんでした。」

「ふん。」私は重ねて云つた。「中々むづかしい問題だ、兎に角も私は搜索については、全然君の手

腕に信頼してゐるから、宜しく頼むよ。」

「必ず御信頼に背かないやうにします。」自信ありげに彼は答へた。

木村の姿が消えると、私はすぐ助手の堀田を呼んだ。が前程までゐた筈の彼の姿はどこにも見出されなかつた。

私は卓子にもたれて、ちつと思ひに打沈んだ。

四

それから又どうする事も出来ない一週間が續いた。

家の中には牢獄のやうな沈黙が坐り込んでゐた。はる子は益々憂鬱になつた。私は益々いらいらして來た。木村は稀にしか姿を見せぬやうになつた。

突如として助手の堀田が拘引せられた。矢本をいづれへか誘き出して殺害したと云ふ嫌疑であつた。實驗室へツカ／＼と這入つて來た刑事が堀田に令狀を示すと、彼は私の前に立つて悲痛な表情をした。

「先生、行つて參ります。私は覺悟いたして居ります。決して先生やお嬢さんに御迷惑はかけません。」

私は餘り意外な出来事に黙つて點頭くだけだつた。堀田の下宿を搜索の結果、矢本に宛てた一通の未發送の手紙と、一挺の短銃が発見せられたのだ。手紙には激越な調子で矢本の背徳を攻めて、決闘を申込み事が認められてあつた。短銃は六連發のうち一發射たれてゐた。最近に發射されたものである事を専門家が鑑定した。矢本の行方不明になつた當夜の行動を彼は頑として云はなかつた。之だけで嫌疑を受けるに十分であつた。堀田が矢本を憎んでゐた事は、彼がはる子と相思の仲であつたとすれば、あり得る事だ、然し彼が發射せられた短銃を持つてゐたと云ふ事はいかにも不思議である。木村の推測によると彼れは我々の乗つてゐた汽車で鹽原に來たさうだが、それは何の爲だつたらう。同じ汽車で鹽原へ來たものならどこかで遭ひさうなものだと思はれる。彼はどこで矢本を殺し、どこへその死體を隠したと云ふのだらう。さう云へば當時彼は右手に負傷をしてゐた。實驗中負傷をしたと云ふ事だつた。木村がそれを指摘した時に、彼の爲に私は辯明したのだつたが、やつぱりあれは何か事件に關係した事だつたのだらうか。

検事の考へでは堀田が矢本を殺害したのだが、はる子も或は共犯ではないかと思つてゐるらしいのだ。はる子が鹽原から堀田に宛てた手紙を押收せられたとすると、検事にさう云ふ考への起るのは當然だ。私とはる子は代るく、検事局へ召喚された。私は堀田の事については全く何事も知らない。

らなかつた。はる子は名は参考人であつたが、事實は嫌疑者同様に嚴重に調べられた。私は傷々しく瘦せて行く娘を見るに忍びなかつた。いつそ従弟の非行とすべての事を公表しようかと思つたが、それは娘に死以上の恥辱と苦痛を與へるものである。私はあらゆるものに咒の言葉を吐きかけた。

蒼い顔をして歸つて來た娘を見ながら私は云つた。

「どうだつたね。」

「検事は堀田さんと私はどう云ふ關係だと云ふのです。」

「うん。」

「それから鹽原で堀田さんに遭はないかと云ふのです。」

「無論遭ふ筈がない。」

「え、遭はないと云ひました。だけどね、お父さん。」はる子は唇を噛みしめて、泣き出さうとするのを堪へながら云ふのだ。「實は堀田さんに遭つたのです。」

「えつ。」私はギクリとした。「ど、どこで。」

「お父さん、どうぞ聞かないで下さい。堀田さんはどんな事があつても云はないと決心してゐるのです。堀田さんさへ口に出さなかつたら、妾達の事は決して知れないのですから。」

「——」堀田がどうしたと云ふのだらう、と私は心のうちで考へた。「けれどもね、お父さん。私はなんだが妾達のした事が知れずにはすまないやうな気がしてなりません。」

「そんな事があるものか。」私は押しつけるやうに云つた。然し私にもその心配はあつたのである。私は續けた。「よし知れた所で、私は親たるものゝ権利として、なすべき事をしたのだ。少しも疚しい所はない。」

「お父さん、妾、ほんたうに有難いと存じて居ります。みんな妾が至らなかつたから起つた事です。どうぞ堪忍して下さい。——でも、わ、わたし、あの後で、どうして小父さんを許して上げる事が出来なかつたかと後悔いたして居りますわ。お父さんだけでなく堀田さんにまで御迷惑をかけてどうしませう。いつそ一思ひに死んで終へばよかつたと思ひます。いえ、今でもさう思つてゐるんですわ。」

私は娘を抱きしめた。不幸な父娘は飽く事なく涙を流したのであつた。

かう云ふ悲しみと苦しみの最中に、私は突然木村から電報を受取つた。開いて見て、私はあつと聲を上げた。差出した所は思ひがけない鹽原で、その溪谷の一で、矢本の死體を發見したと云のである。どうして發見したのだらう。私はしみじみ木村を名探偵だと感嘆しながら、取るもの

も取り敢へず鹽原に急行した。

矢本が行方不明になつてからもう三週間を越えてゐる。いろくの事情から推して見ると、彼の死は行方不明後間もなくであらねばならない。彼の死體は少くとも死後十數日を経過してゐる筈で、夏季ではあるし、必ず腐敗してゐるに違ひない。それをどうして生前面識のない木村が矢本である事を確認する事が出来たか。もどかしい汽車の中で、混乱した頭腦ながらに、私は疑問に堪へなかつた。所が愈々現場に行き着くと、私は又しても餘りに事の意外なのに驚いた。

死體の發見せられた現場は、常川の上流、鹽原の町はづれを右へ川を徒渉して、洗心の瀧へ行く山道のうねつてゐる溪谷の一つであつた。木村は或る理由で、死體のありさうと思はれる場所を限定して、探偵犬をつかつて搜索したのであつた。私の駆けつけた時には、木村は警察官の一行と共に現場にゐた。夕暮れ近い深山の林の中はもううす暗かつた。白服の巡査に交つて立つてゐる木村に鳥渡挨拶をして、朽葉とじめくした眞黒な土とが堆高く積まれたあたりに眼をやる。と、そこに死體があつた。次の瞬間に私は思はずじく後へ下つた。矢本の殆ど裸である死體は、さながら眠れる如く、何の變化も受けないで、地上に横はつてゐたのだ。死體は右の手に赤く錆た一挺のピストルを固く握つてゐた。後で調べた所によるとピストルは一發發射されてゐた。土中に埋められてゐた事と裸體である事とが、自殺を否定した。然し死體には傷口と思はれ

るものは一つも見出されなかつた。ピストルの赤く錆びてゐた事は、死體の長く土中に埋まつてゐた事を語つてゐた。然し死體は餘りに生々しかつた。

死體に觸れる事は許されなかつた。

矢本に相違ない事を證言すると、その儘死體は解剖の爲に東京迄運ばれた。私達は無論柩と共に東京に歸つた。

歸つて見ると、家は空漠として沙漠のやうだつた。はる子は參考人として再び検事局へ召喚されたのであつた。驚いた事にはたうとう堀田は矢本の殺人犯人として起訴せられたのである。

その夜はまんじりともする事が出来なかつた。黒い影が頭の中で亂舞するのだ。死體の發見、生けるがまゝの死體、傷口のない死體、堀田の起訴、はる子の召喚とそれからそれへと不思議な姿をした黒い影が頭の中で踊り廻るのだつた。

いつもと違つて、翌朝になつても、はる子は歸つて來なかつた。私は耐らなくなつて、電話で木村を呼んだ。電線を傳つてくる彼のいつもの齒切れのいゝ聲は今日は救世主のやうに聞えるのだつた。私は彼に直ぐ來て呉れと懇願した。さうして彼の姿を千秋の思ひで待つた。

木村が席につくと、私は何より先に聞いた。

「はる子はどうしたのだ。」

「共犯の疑がある」と云ふのでね。」木村は氣の毒さうに、「たうとう留置せられたのです。」果してだ、私は叫んだ。

「え、そんな、馬鹿な事があるものかッ。で、堀田はどう云ふのだ。」

「死體が出たと云ふと、すつかり覺悟して、逐一白状したのです。」

堀田の白状はかうだつた。彼はどうしてか、矢本が鹽原に向つたと云ふ事を知つたので、彼と決闘する積りでその後を追つた。矢本の鹽原行を知つた事及び決闘の理由については一言も云はなかつた——かう云つて木村は私の顔を見た。私は彼の明敏を恐れる。さうだ、この理由は私は知り過ぎる程知つてゐるのだ——翌日堀田は、はる子と矢本とを人跡稀な鹽原の溪谷の林中に見出した。彼は突如として矢本の眼前に躍り出た。さうして矢本を罵つた後、彼は二挺のピストルを示して、一つを矢本に擇ばしめた。はる子は只茫然として見守つてゐるのみであつた。矢本が一つのピストルを取り上げると、堀田は約束の間隔を保つべく、あとずさりを始めた。所が突如矢本が發砲した。幸に堀田には當らなかつたが彼は矢本の卑怯を怒つて彼に向つて一發射つた。が矢張り之も命中しなかつた。矢本は直ちに第二彈を發した。之が堀田の右手を掠めたので——彼が嘗て繃帯してゐたのはこの時の傷であつた——堀田はピストルを落した。彼は第三彈を恐れて、直ちに傍らの草叢へ姿を隠した。所が不思議な事には矢本は第二彈を發射すると同時

に、ウンと云つてピストルを握つたまゝ悶絶した。

「とから堀田さんは云ふのですがね。」木村は云つた。「死體の握つてゐたピストルが一發しか射たれてゐないので、甚だ不利なのです。」

「で、はる子はどう云ふのです。」私は心配して訊いた。

「堀田君の云ふ所と全く一致します。」

「それにしても死體が何の變化も受けてゐないのが不思議だ。」私は思はず呟いた。

「さうです。」木村は耳ざとく聞きつけて云つた。「傷口がないのみならず、この炎天に腐敗してゐないのですからね。眞逆犯人が防腐劑を注射しやしますまい。それ所か、犯人は寧ろ腐敗する事を願つてゐたのですよ。」

「えつ、」私は聞き咎めた。「どうしてそんな事が分る。」

「裸にしたのはその爲ですよ。あゝして置けば、時日さへ経過すれば、よし發見せられても、誰だか分りませんかからね。」

「が、死體は何の變化も受けなかつた。」私は溜息をついた。

「それについてですがね。先生。」木村は云つた。「何かかう死後も何の變化も受けないやうな毒薬、と云つたものがないでせうか。」

私は飛び上つた。さうだ忘れてゐた。私は脱兎の如く、薬品戸棚に駆けつけた。手が顫へて中鍵がさゝらない。漸く開けると、無い！ 埃だらけの薬品棚の中に、はつきりとたつた一つの小さい丸い、罐の型がついてゐる。誰か持つて行つたのだ！ いつから無くなつたのだらう。私はもつと早く之に氣がつくべきだつた。娘の事件以來、頭腦が駄目になつてゐたと見える。

それは私が最近に發明した薬品の一つであつた。複雑な有機化合物で、私は始め之を死體の完全な防腐用にする積りであつた。出来る上と、防腐の目的は完全に達せられたが、困つた事には一種の恐るべき毒性があつて、之を少量づつ動物に與へると、徐々に疲弊して遂に倒れて終ふ。大量は無論即死する。いづれにしても死後何の痕跡も残さない。もし少量づつ人間に與へたら、死因は少しも分らないだらう。而も死體は永く變化しないのである。迂濶に發表する事が出来ないで、少量の試料を造つたまゝ、薬品戸棚に秘めて置いたのであつた。

「さうすると。」聞き終つて木村は冷靜さを失はないで云つた。「その薬品の事を知つてゐるのは誰ですか。」

助手は無論知つてゐる。それから——私は考へたが、從弟が知つてゐたかどうか、私は彼の宅で、伯母や娘と共によく晚餐をとつたが、そんな時に一度、こんな薬品を發明したが、發表する事が出来ないと思つたやうな話をしたと思ふ。その時に從弟は好奇心にそゝられながら、色相や、

置場所などを聞いたと思ふ。私はそれを話した。

「さうすると、矢本さんに堀田さん、その外はありませんね。」

「ないと思ふ。」

「お嬢さんは。」

私ははつと思つた。彼女は——彼女は知つてゐるかも知れない。さうすると——私は此の際彼女の爲に、彼女の知らない事を切に祈つた。

「絶対にない。はる子は私の研究などに、全然觸れないからね。話した事もない。」

「さうすると、いよく堀田さんが不利ですね。その毒薬を飲まして置いてから、決闘を挑んだかも知れませんね。」

「然し、彼はそんな事はしまいよ。」

「兎に角、矢本さんはピストルを一發しか射つてゐませんからね。もう一發の弾丸の説明がつかなければ、堀田さんのみならず、その場にゐたお嬢さんも甚だ不利です。お嬢さんが矢本さんに毒を飲ましたかも知れない。或はもう一發の弾丸はお嬢さんが射つたのかも知れない。それで堀田さんはそれを庇ふ爲にあゝ白状したのかも知れません。」

「そんな事は嘘だ。」

「どうしてですか。」

「娘は鹽原で片時も私の傍を離れた事がない。」

「然し堀田さんの白状は或程度まで疑ふ餘地はありません。死體の發見せられた現場の模様などよく知つてゐます。」

「そんな事は皆出鱈目だ。堀田が現場を知る譯がない。」

「でもお嬢さんは堀田さんの云つた事を全部肯定してゐますし、お嬢さんも現場の模様をよく知つて居られます。」

「娘はどうかしてゐるんだ。君達だの検事だのが寄つて、娘の頭を惑亂さして、そんな途方もない事を云はすのだ。」

「では堀田さんを射つたのは誰です。」

「無論矢本だ。」

「然し矢本さんの握つてゐたピストルは一發しか射つてありません。」

「一發しか射たないのだ。」

「然し堀田さんは確に矢本さんが二發射つたと云つてゐます。」

「矢本が幾發射つても構はない。堀田は知らん事だ。娘も無論知る譯がない。」

「さう否定許りは出来ません。検事は一發はお嬢さんが射つたものと認めて居ります。」
 「ば、馬鹿な、その彈丸は俺が射つたんだ。」私は耐らなくなつて叫んだ。

五

私はたうとう白状して終つた。實は矢本の倒れた時の模様が混亂してゐたので、私にも娘が一發射ちはしないかと云ふ疑ひがあつたのだ。それで名探偵木村の術中に陥ちて終つたのである。私は水も洩さぬ計畫のもとに行つた積りだったが、一つの些細な手落と、思ひがけない出來事の爲めに、木村に看破られた。彼は私に疑ひをかけて、次第に追ひ詰めて、たうとう私を白状させたのである。

木村が射手の分らない一發の彈丸とはる子とを結びつけて、鋭く私に詰寄つた時に、私の頭腦は混亂した。

私は確に彈丸を射つたのだ。さうしてその彈丸で光行は斃れた事と信じてゐた。所が死體には傷がなかつた。のみならず不思議にも三週間も経つた今日腐敗してゐなかつたのである。かうなると、私自身も亦娘のはる子を疑はねばならなかつた。彼女には十分矢本を殺すべき理由があつた。毒藥を與へる機會もあつた筈である。私は堀田が私達の跡を追つて、鹽原に來た事は少しも

知らなかつたので堀田が娘と共謀したのか、或は堀田が單に娘の罪を引受けるべく虚偽の白状をしたか、或は堀田の告白する所が正しいのか、ちつとも分らなかつたけれども、娘が殺人の嫌疑を受けると云ふ事は私の堪へる所ではない。すべての事が公表せられて、娘が鐵窓に呻吟する。想像して見ただけでも私の腸は千斷れる。私は前後の考へもなく、もろくも彈丸を射つた事を白状して終つたのである。

私の計畫はかうであつた。

私は、はる子が従弟の毒牙にかゝつて、身を以つて逃れて來て、私にそれを訴へた時に、彼光行に死を與へようと堅く決心したのだ。私のこの決心については多く説明する必要がないと思ふ。私はその手段について思ひ廻した。矢本ははる子が宅へ歸つて來てから、數通の手紙を送つて來て、謝罪、歎願、脅迫とあらゆる言葉を連ねて悶々の情を披瀝した。私は之を利用したのである。私は彼を毒藥などで誑し討ちにするのは好まなかつた。と云つて東京ではどうする事も出來ない。そこではる子に偽つて彼を許さして、祕密に鹽原へ誘はしたのである。その時に娘に云ひ含めて、矢本と共に鹽原に行くのは、人に見られても困るから、父と一緒に行く態にしたいと云はして、彼を私の姿に變装させた。かうすると、娘は私と一緒に行く事になり、矢本が鹽原に向つた事を誤魔化す事が出来る。さうして矢本を人里離れた所で殺した後に、私は矢本の代りに

本當の私になつて娘と共に宿屋へ歸れば好いのだ。かうすれば何の證據なしに、十分安全に彼を葬り去る事が出来るのだ。そこで、私は同じ汽車に乗つてそつと彼等の跡をつけて、態と外の車へ出かけて、知人を物色した。幸に一人めつける事が出来た。私は彼と暫く談話を交へた。かうして置けば他日この汽車で鹽原に向つたのは私に違ひない事を證明させる事が出来る。だが、後で考へると、こんな事はしなくつても宜かつたのだ。私は友人が大宮驛で下車した所を見届けて、續いてそつと下りて、直ちに上野驛へ引返した。そして今度は矢本に變装して工場へ行き、爐の中へ燐灰石を投じた。之は彼が爐中に墜落したやうに見せかけて、搜索の方針を誤らす目的だつた。かうして搜索に暇取らせて置けば、よし彼の死體が鹽原の山中から發見せられても——發見せられる事はないと思つたが——腐敗し、何人とも判別がつかないし、よし判別がついても死因等は到底分るものではないと信じてゐたのだつた。所がかう云ふ巧妙な計畫が僅かな事を見逃した爲に、而もその見逃した點が自分の専門である化學上の事であつて、たうとう名探偵木村に看破られるに至つたのは皮肉な事であつた。

私は燐灰石を爐中に投げ込む時に一つの失策を行つたのである。

私は無論、夜ではあり、十分門衛を欺き得たし、又私の話しかけた職工は最近他工場から來たものであるから、少しも見現される心配はなかつた。然し、私は矢本が彼の部下に宣傳する皮相

的勤儉主義によつて、黄金の裝飾を排斥して、銀の實用價値を鼓吹して、いつでも大きな銀時計に太い銀鎖をからませ、銀の巻煙草入を持ち、銀の握りのついたステッキを持つてゐる事を忘れてゐた。いや、銀の握りのついてゐるステッキだけは持つて行つたが、それを爐中に投ずるのを忘れたのだ。前に擧げた多くの銀具の銀の量は可成多いから、彼が爐の中へ墜落したとする、一部は鐵中に殘留して無論分析によつて、出て來なければならぬ。木村は密に試金を行つた。——彼はその十分な技術を持つてゐた——所が鐵片からは銀の痕跡をも認める事が出来なかつたので、彼は始めから、矢本の爐の中に落ちた事は信じなかつたのである。それに燐が出たのは、どう云ふ譯か、之は故意に何か燐の化合物を投入したとしか思へない。さうすると矢本は何の必要があつてそんな事をしたか、自殺を装ふ爲か。そんなら偽りの遺書を作るべき筈だ。又彼に自殺する理由があるとも認められない。自殺を装ふ理由がなければ、爐に細工する必要もなくなる。で、木村は深夜工場を訪ねて來たのは矢本でなくて矢本に變装した第三者ではないかと疑つて見た。彼は探偵の結果、私の娘の外に、堀田も矢本も鹽原に行つた事を知つた。私と矢本が可成似通つてゐると云ふ事を聞き知つた。彼は漠然と一片の疑ひを私にかけたのだ。或は私が矢本に變装したのではないかと疑つたのであつた。けれども私は絶えず娘と共に車中に居たと云ふ事實があるので、彼は解釋に苦んだ。流石の彼も娘と共に居た私が、矢本の變装したものである

とは容易に気がつかずなかつたのだ。

木村は先づ鹽原に眼をつけて、宿屋を調べたり、附近の里人に訊ねたりして、私等親子が鹽原に着いた翌朝早く、洗心の瀧方面に行つたのを聞き出した。そこで彼は探偵犬を使つて、その附近を探つて遂に矢本の死體を發見したのである。ついで堀田の自白で、大分事件がハッキリして來た。矢本が殺されたとする、爐に燐の化合物を投入したのは彼ではあるまい、矢本に扮したものの即ち私であらうと推定した。所がその時刻には私は汽車中にゐた事が證明せられてゐるのだ。どう云ふ譯か？ さうだ、彼は漸く考へついたのである、始めの方即ち娘と一緒にゐたのが矢本だ。さう考へると、些細な事ではあるが、私が車中の出來事を忘れてゐた事と、堀田が六時三十分の汽車で追跡した理由も分る。矢本と私は似てゐた。驛員にしても、車掌にしても、又運轉手や宿屋の番頭にしても、深夜鳥渡見ただけで、而もそれから程經て調べられたのであるから區別し難かつたのは當然と考へられる。彼はかう結論した、さうして彼は私と娘と堀田の三人が共謀して、矢本を殺したものと推定したのである。彼は私を自白させる爲に、殊更に娘はる子に對する嫌疑を高唱したのであつた。が、木村の觀測には稍誤りがあつた。堀田と私の間には何の關係もなかつたのである。

堀田と私との間に何の關係もなかつた爲に、私がいよいよ矢本を殺すに當つて、思はぬ手違ひ

が起つた。之も發覺を早めた一つの原因であつた。私は娘に矢本を殺すと云ふ事は少しも云はなかつた。鹽原山中の人無き所で彼を叱責すると云つて、彼を誘き出さしたのであつた。然し、彼女は薄々私の意圖を察してゐた。堀田は矢本と彼女が鹽原に行くのを知つて——はる子は彼にすべては打明けなかつた。然し戀をするものゝ敏感は、戀人の身の上に起つた又は起るべき何ものをも見逃がさなかつた。——彼と決闘すべく、彼の後を追つた。さうして彼は私より、一步先に林中で迫つたのである。

私は當夜大宮から引返して、爐に燐灰石を投じた後、十一時の汽車に乗り、翌朝西那須驛に着いた。私は態と關谷まで歩き、それから馬車に乗つて、七時頃古町に着いた。そこからかねて娘と打合せてあつたやうに、洗心の瀧に急いだ。そこへ娘が矢本を連れ出してゐる筈であつた。昨夜からの汗でねばくした身體は、早朝の山の冷氣に、一種異様な不快な膚觸りを感じた。兩側からこの狭い、時に峻しい山路に蔽ひ被さつた雑草はしとどに濡れてゐた。覆ひ茂つた樹々の蔭は夜のやうに暗かつた。私は悪寒を覺えながら、熱病にとりつかれた患者のやうに、只管道を急いだ。が私は遅つた。私が漸くほの暗い林の中からチラと白く浴衣姿の娘と、それに向ひ合つて、背を見せつゝる矢本の姿を認めた時に、私は矢本の手元から白い煙がパツと出るのを見た。銃聲は凄く鋭く響いた。あつと思ふ間もなく、續いてもう一發の銃聲が響いた。私は之を娘

が撃つたものと思つた。何故なら私には堀田の姿が眼に這入らなかつた。——氣がせいいてゐた爲と、堀田の黒つぽい服装の爲でもあつたらう。——私はもう猶豫してゐられない。用意のピストルを矢本目がけて打放した。矢本はバタリと倒れた。後で考へるとこれは私の弾丸に當つた爲でなく、矢本は外の原因で倒れたので、私の射つた弾丸は堀田の右の手を掠めたのであつた。私はすぐに飛び出した。——堀田はこの時、彼が自白したやうに第三弾を恐れて草叢へ隠れて終つたので見えなかつた。——これらの事はすべて後に分つた事である。——私は豫ねての計畫通り忽ち死體を裸にして、土中に埋めた。その上に落葉をかけた。さうして茫然としてゐる娘の手を引いて、私に變装してゐた矢本になり代つて、宿屋へ歸つた。昨夜遅くと今朝早くとチラリと私達を見ただけの宿屋の者は誰一人私を疑はなかつた。堀田は思ひがけなく私が飛び出して萬事處理したので、姿を現す事が出来ないで、その儘歸宅したのであつた。さうして拘引せられた後も罪を一身に引受ける積りで私の事は少しも云はなかつたのだ。

「さうすると。」私の告白を聞き終つた木村は云つた。「薬は誰が飲ましたのでせう。」さうだ、その問題が残つてゐる。あゝ、死體が生けるがまゝにあつた事はこの計畫を暴露させた最大の原因ではないか。薬は誰が盗んだのであらうか。又誰が彼に飲ませたのであらうか。或は彼自身で飲んだのであ

らうか。はる子だらうか。もしさうなら、私の白状は少しも娘を救ふ事が出来ないのだ。あゝ、私は深い深い溜息をして、椅子に沈み込んで終つた。

木村も腕を組んでちつと考へ込んだ。——唐突に、電話がけたましく鳴つた。

六

空がドンヨリと曇つて、蒸し暑い夏の日の午後、肅々として、矢本家から二つの棺が出た。それは淋しい葬儀であつた。

喪主のはる子の白無垢姿はさ、まぐの事件で傷ましくも瘦せ衰へた身體を一入哀れに見せた。私は思はずハラ／＼と涙を落した。さうしてこの薄命な母子の冥福を祈つた。

私が私の研究室で木村に告白してゐる時にかゝつて來た電話は、伯母の召使からで、伯母の容體が急に悪いと云ふのであつた。私と木村が駆けつけた時には、彼女は眠れるが如く息を引き取つてゐた。

伯母の枕許には私に當てた一通の遺書があつた。

私は別室に退いて靜にそれを開いた。讀んで行く中に私の手は戦いた。私は涙に濡れた眼で天を仰いで長嘆息した。

やがて涙を収めた私は木村を招いて手紙を示した。

一筆書遣します。

光行事死骸となつて鹽原山中に見出されました由、豫ねて覺悟してゐた事ながら、不覺の涙に咽びました。死骸は御許様の御發明の藥品の効め空しからず、さながら生けるがやうであるとの事、かくては中々に相見ん事心臆して出來ませぬ。あの世の對面を樂しみに、私も同じ藥で死出の旅に急ぎます。

我れと我が子を手がけようとは夢にも思ひ依らぬ事でした。さりながら御許様へ申譯なき我子の不始末を思ひ、又皆様の御にくしみが我子にかゝる事を思ふも空恐しく、彼の命を奪ふ事は反つて慈悲の道に叶ふものと思ひ、淺ましくも我子を手にかげんと決心いたしました。妾も共にと思ひました。我子を殺し妾も共にと思ひましたが、我子を殺し妾も自害して果てると、世上の取沙汰も喧しく、先祖へも申譯なき事と存じました。故豫て御許様が光行に御物語りなされた藥の事、妾も居合せ小耳にはさみました故、その藥で我子を亡きものとし、妾も自害しますれば、光行は卒中とも思はれ、妾は子に先立たれた悲しみの餘りと思はれ、矢本の家に傷もつくまじと存じ、女だてらに藥を盗み出しました事深く御詫びいたします。

光行や妾に對するお腹立もさぞやと思ひますが、何事も妾に免ぜられ、どうぞ御許し下さい。尚鹽原の山中で光行が死にましたについては、いろく御迷惑の方も有之事と存じます。が、毒藥を與へましたのは私に相違なく、光行も毒死に相違なき故、下手人は妾なる故、外の御方様には御迷惑かゝらざるやう御許様より宜しく御願ひ申上げます。光行が行方不明になりましたから、一日々々と生き延びてゐる事は、地獄の責苦に勝る思ひでありましたが、彼の最後を見届けた上ならでは、死ぬ事も叶はず、甲斐なき身を今日まで永へてゐた辛さ、御察しなされて下さいませ。

×月×日

政行どの

もと

思へば従弟は不幸な人であつた。上面には何不自由のない大會社の重役も、獨身の心のうちには常に淋しいものだつたらう。そして最後にふと犯した誤から、かくまでに多くの人々から憎しみをかけられて、儂い最後を遂げたのは、之も前世の約束事であらう。日が移り月が變ると共に私の感情はだんく落着いて來た。私は従弟に對するエゴイスチック

な考^かへ方^{かた}に自^じ責^{せき}を感^かじるやうになつて來^きた。が、一^い方^{ぽう}では彼^{かれ}は當^た然^{ぜん}の刑^{けい}罰^{ばつ}を附^つせられたのである
と驛^{さよ}く何^{なに}者^{もの}かある。私^{わが}は私^{わが}の行^ぎ爲^ゐが幸^{さい}に法^{はふ}網^{まう}に免^まれ得^えた今日^{こんにち}、静^{しず}に天^{てん}の裁^{さい}きを待^まつ外^{ほか}はな
いと思^{おも}つてゐる。

拾つた和銅開珍

明治の末の年、と云ふともう十五六年前の話ですが、當時甲武線と云つた今の省線千駄ヶ谷驛は頗る貧弱なものでした。今でこそ明治神宮の外苑を直ぐ傍に控へ、神宮への参道にも當つてゐますし、郊外住宅地としても屈指の所で、驛も見違へるやうに立派になりましたが、以前は黒ずんだ堀立小屋同様のちつぽけな建物で、驛を出ると前の所にホンの一塊り粗末な家が並んでゐるきり、あとは茫々たる野原です。右の方は可成の窪地になつて、それが小高い今は明治神宮外苑の當時は練兵場だつた大きな原に續いてゐます。驛の裏の方は四谷の方に通じてゐるうねつた小路で、一方は新宿御苑の土塀が蛇々と連なり、一方は小さな谷川で中途にはゴト／＼と水車がかゝつてゐると云ふ有様ですから、無論夜などは滅多に通る人はありません。驛の表口は即ち今云ふ茫々たる野原で、而も町の形になつてゐる千駄ヶ谷の通りへ出る途中には、今は開放されて澤山家が建ちましたが、當時は未だ徳川公爵家の廣大な屋敷が横たはつてゐましたから、夜などは迎も提灯なしでは歩けなかつたのです。それでも當時は膨脹して行く東京の人口の排け口として、優秀な候補地だつたので、ボツ／＼移住する人があり、一電車毎に相當の人が乗降するのでした。

驛を降りた大部分の人は、千駄ヶ谷の通りの方へ向ふのですが、その爲には原を眞直ぐに突切つて徳川公爵家の表門に突當り、門番の人に斷つて邸内を裏門へ通抜けさして貰ふか、さもなければ茫々たる原を斜めに突つ切り、公爵の垣根について迂回して通りに入るよりか路はありませんでした。所で、停車場は野原よりも一段低いレベルにありましたので、野原に達する前に約一町程窪地を通り、切通しのやうになつたダラ／＼阪を上らねばなりません。この窪地と云ふのは元の野原と同じレベルにあつたのに相違ありません。それを土を取る爲かそれとも何か外の理由で、掘下げて土を外へ運んだものです。それで停車場から約一町の所で土を取るのを止めたものですから、そこが切立つた崖となり、路はその崖を切通してついでたのです。土を取つたところ云ふのは餘程以前の事らしく、崖には醜い皮膚などは少しも見えず、草が生い茂つて、殊に切通しの兩側の三角形になつた斜面地には、背の低い雑木がモチヤ／＼被さつてゐて、大袈裟に云ふと晝尚小暗く、じめ／＼した草の下には毒蛇でも潜んでゐるか、どうかしたら人の屍體でも横たはつてゐるさうな所で、覗いて見るのさへ氣味悪く思はれるのでした。

これだけの説明をしても今日の千駄ヶ谷驛しか御存じない方は、十五六年以前にこの驛の附近が、蝶を採集するのに好適の地だつたと云つても中々信用なさらないでせう。信用なさらなくつても事實さうだつた事は、當時中學の上級生で、両親と共に千駄ヶ谷の通りに近い所に住んでゐた私の屢々経験した所です。驛附近の野原一帯は春から夏へかけて、翻糞として蝶々が飛んでゐましたが、殊に例の切通しの所には、あげはのてふ科やたてはのてふ科の大形の蝶がよく來ますので私の大切な漁場でした。何事にも凝り性の私が捕蝶網を振り廻して夢中になりながら、あをすぢあげはや、るりたては、ひをどしてふ、あかたてはなどと云ふ比較的珍らしい蝶を捕へて大喜びをした時の事を考へますと、今更ながら自分の年を取つた事と、土地の變遷と云ふ事に無量の感なき能はずです。

さて、さうした時分の或る日でした。私は例によつて切通しの附近に行つて蝶々を追ひ廻してゐました。蝶々に限らず動物は何でもさうでせうが、捕まへると云ふ爲には追ひ廻すと云ふ事は禁物なのです。蝶などは鳥渡考へると別に當もなしにフラ／＼飛んでゐるやうですが、あれでゐて案外規則正しいもので、一廻り飛ぶと又元の所へ歸つて來るものです。ですから蝶の姿を見た時にそれが捕まへ悪い位置にゐたら、惜しくても見逃して置くのです。さうすると二度目に飛んで來た時に易々と取れる事が多いのです。取れないと知りながら、徒に追かけると蝶は驚いて

高く飛び上り、二度と歸つて來ません。

蝶を追ひ廻す事はいけないと知りながらも、そこは未だ子供ですから、珍らしい蝶が飛んで來ると、つい我慢が出来ないで無理な網の使ひ方をしては蝶を追ひ廻すのです。この日も多分こむらさきだつたと思ひますが、可成珍らしい蝶だつたので、捕まへ易い状態になるのが待ち切れず、追廻し始めたのでしたが、夢中になつた餘りつい切通しの右側の例の雑木が鬱蒼として茂つてゐる中へ這入り込んで終ひました。尤もそこへは前にも鳥渡位は踏込んだ事はあつたのですが、踏み所もないやうに生ひ茂つてゐる草と、じめ／＼した皮膚の足觸りにぞつとして、直ぐ飛び出して終ふのでしたが、蝶を取りたい一心に夢中で飛び込んだと云ふ譯なのです。ハツと氣がついた時にはもう取りたい蝶はどこかへ逃げて終ひ、私はしとどに濡れた草の露を踏んで、大きな木の枝の下に立つてゐました。もう薄氣味悪くて耐りません。直ぐに飛出さうとしましたが、その時にふと足許に、粗末な然し比較的新しい紙箱が落ちてゐるのが眼につきました。

私はどうしてその箱を拾ひ上げたのか、今考へて見ても分りません。この雑木の林はさ程広い所ではなく、晝尙小暗いと云ふのは可成誇張した形容ですし、時は夏の眞晝間、直ぐ眼の前には停車場があり、切通しの路を通る人もチラホラあるのですから、深山幽谷と云ふ譯ではなし、ビ

クついてはゐながら私の心にはどこか餘裕があつたのでせう。一つには今でも探偵小説などが好きで愛讀する所を見ると、臆病な癖に好奇心は人並以上にあるのかも知れませんが、兎に角私はその箱を拾つたのです。

箱の中には今でも能く覚えてゐますが、當時盛んに廣告をしてゐた梅毒の賣藥が這入つてゐました。箱そのものがその賣藥の何日分かをいれるものだったので、箱の中には其使ひ残しが這入つてゐたのです。箱にはその外に古い大形の銅錢が一枚と一朱銀が一枚這入つてゐました。私は直ぐその藥を棄てました。少年の私の心には梅毒などと云ふものは耐らなく嫌なものだつたのです。ですから賣藥そのものも、いやさう云ふ病氣に罹つてゐる人間の持物として、非常に不潔に感じたのでした。その癖古錢の方には異常な魅力を感じたと見え、それは棄てもせず握つたまゝ家へ持つて歸つたのでした。賣藥の方は確に即座に棄てたと記憶してゐますから、箱は拾つた場所であつたに相違ありません。日頃から氣味悪く思つてゐる場所で、得體の知れぬものを拾つたのですから、そのまゝ外へ持つて出てから開けて見さうなものです。其の場で開けて見たと云ふのはどんなものでせうか。人と云ふものは氣味の悪い事に出會したら、出来るだけ早く結果の見たいものと見えます。

古錢を拾つた事などは無論家の者には少しも話しませんでした。私がこんなものを拾つて持つ

て歸つたのは、利慾と云ふよりは珍らしいものを手に入れたと云ふ好奇心からで、私は早速父の書齋にあつた國史大辭典を持出し、その中の古錢圖譜と對照して研究しました。一朱銀の方は無論近世のもので、平凡極まるものでしたが、古錢の方は思ひがけなく、日本最古の銅錢として知られてゐる和銅開珍でした。

今はもう能く覚えてゐませんが、奈良朝の元明帝の時でしたか知ら、武藏の秩父に銅が出土した。この銅と云ふのは所謂自然銅で、元素のまゝ出たのです。銅鑛は無論日本全國到る所に産しますが、いづれも硫化銅とか酸化銅とか化合してゐますから、冶金術などの幼稚な奈良朝時代にはそんな鑛石から銅を吹き分けると云ふ事は出来なかつたのでせう。それで秩父から自然銅が出る迄は日本に銅と云ふものがなかつたと見え、早速朝廷に獻上すると、帝は深くこの銅を嘉納しましたし、元號を和銅と改められ、この銅で鑄られた銅貨が即ち和銅開珍なのです。私はこの二錢銅貨に一廻り大きい、眞中に四角い穴の開いてゐる銅貨が、そんな由緒のある古いものかと思ふと、一種の懐しさに堪へませんでした。

私はもしかしらこの銅貨が大した値打があるのではないかと思ひ出したのです。もしさうだつたら一方にはそんなものを拾つたと云ふ心配と、一方には幸運を授かつたのではないかと云ふ擦つたい喜びとがありました。

私は古銭の相場表を見たり、古銭商の前に立つたりして、値打を調べましたが、それによると、和銅開珍に二種類あつて、一種の方は珍らしく値も高いが、もう一種類の方は可成多く流布してゐて、大した値打のものではないと云ふ事で、私の拾つた方はその多く流布してゐる方だと云ふ事が分りました。私は軽い失望を覺えると共に、遺失主に對しても大した責任を持たなくていと云ふ安心を得ました。

そんな事で一時私に異様な興奮を興へた和銅開珍は、間もなく筐底の奥に入れられたまゝ、忘れられるとなく忘れられて終ひました。

申し残しましたが、一朱銀の方は後に學校で化學を教はり、深い趣味に囚はれた時に、ある化學書にあつたのを讀んで、銀と銅とに分ける爲に硝酸に溶して了ひました。銀と銅とに分ける事は不完全ながら成功しました。分けた純銀分は再び硝酸に溶かして硝酸銀にしたと覺えてゐます。

さて、中學生時代に拾ひ上げて、そのまゝ人知れず秘め置いた和銅開珍は、十數年後、私が一廉の俸給生活者として納まつた時に、岡らずも奇々怪々な物語の發端となつたのでした。

二

大正十×年の夏でした。私は湘南地方のある海水浴場で、ふと大學時代の友人の富田に會ひました。一口に友人と云つてもいろいろありますが、中學時代や高等學校時代の友人はいつまでも遠慮がなく、その當時の氣分に返つて愉快に話が出来ますが、外の高等學校から來て大學だけで知合になつた友人と云ふものは特別の場合を除く外、卒業後會つても何となく氣が置けて、中學校や高等學校時代の友人のやうには打解けられぬものです。それにこの富田と云ふ男は一體内氣な男で、いつも陰氣臭い顔をして、落窪んだ近眼を眼鏡の下から神經質に光らしてゐると云ふ風でしたから、餘り親しく交際つた事はなく、只彼の父が若くして文學博士になつた秀才で、大學教授となるまでに可成の苦學をした人であると云ふ事を噂に聞いてゐた位で、餘り彼については知らなかつたのでした。

けれども何と云つても三年の間同じ級で學んだのですし、それに私は前に申上げた通り拾つた一朱銀を硝酸に溶かして化學實驗をやつた位でしたから、たうとう大學も應用化學科を修めたのですが、此科は外の科と違つて實驗の時間が多く、従つて法科あたりの學生から見たら、同級生はずつと親密になりますから、卒業後數年にしてヒョッコリかうして、富田に會ひますと、矢張り懐しさに堪へず、直に双方から親しく挨拶を交しまして、その日は終日學生時代の話に耽り、誰彼と同級生の噂をしました。

學生時代の話に飽いた時に、話は自然お互の現在の境遇に落ちましたが、二人とも未だ獨身で、似たやうな工業會社に勤めてゐるのですから、収入も似たやうなもので、俸給生活者として不平不満も大體同じやうなものでした。

そのうちにふと住所の話が出て、現在の彼が千駄ヶ谷町にゐる事を知りました。だんく聞いて見ると、彼のうちは随分古くから千駄ヶ谷にあるので、私達一家が十数年前に一二年そこに住んでゐた時も、彼の一家は直ぐ近所にゐたらしかつたのです。尤も彼は市内の或る中學に通ふ關係から、當時は學校の近所の知人の家に寄宿してゐたさうですすから、お互に少しも知らなかつたのも無理はなかつたのです。

彼の現在の家が、どうも私の少年時の記憶に残つてゐる、例の茫々たる野原の一部に建てられてゐるらしいので、私はつい昔その野原の片隅で、和銅開珍と一朱銀とを拾つた話をする氣になりました。

「千駄ヶ谷と云ふと思ひ出話があるのだがね、實は懺悔話なのだが――。」

私はかう前置きをして、例の雑木の林の中に踏み込んで薄氣味の悪い箱を拾つた事、その中から思ひがけなく古錢を二枚見出した事、それをその儘着服して終つた事、一朱銀の方は化學實驗に使つた事を委しく話して聞かせました。

聞手が中學時代の友人でもあつたら、話の途中で茶化したり皮肉を云つたり、洒落のめししたりした事でせう。そんな事は話手にとっては迷惑であると同時に、話に調子がついて油が乘るものです。

所が富田の場合は彼が私にとつてそんな程度の友人でなかつたからでせうが、始めから黙り込んで熱心に私の話を聞くのです。終ひには彼の眼が何となく異様に光つて、話に身を入れて聞く態度に愈々眞劍味が加はつて来るのです。私は氣味が悪くなつて來て話を止めようかと思ひましたが、さうもありませんから終ひの方は彼の眼を氣にしながら、うわの空で手早く済ませました。

話が済むと彼は深い溜息をホツとついて、急ぎ込んだやうな調子で聞きました。

「それで君はその和銅開珍を今でも持つてゐますか。」

「えゝ、持つてる筈です。どこに入れてあるか鳥渡思ひ出さないが、探せばどこかにある筈ですよ。」

「私に一度見せて呉れませんか。」

彼はどう云ふ積りだかこんな事を云ひました。

「えゝ、見せますよ。然し君は横領罪で僕を告發するんぢやあるまいね。ハ、、、、。」

私がかう云つて笑ひますと、彼はニヤ／＼してゐましたが、別に見たいと云ふ理由については云ひませんでした。私も大した理由があるとは思ひませんから、深く追究もせず、その日はそのまま別れました。

東京へ歸つてからも、實は私は富田とそんな約束をした事などはとうに忘れて終つて、和銅開珍の事などは夢にも思ひ出さなかつたのですが、驚いた事には富田が或日私の所へ態々訪ねて来たのでした。

「君、すまないが此間の話の和銅なんか云ふ古銭を見せて呉れないか——」

云ひ悪くさうに彼が切り出した時に、私は始めて先達つての約束を思ひ出し、彼の來意を知つたのでした。

「やあ、失敬々々、すつかり忘れて終つた。」

私は頭を掻き／＼座を立つて、心當りの入場所を引掻き廻しましたが、幸ひに見つける事が出来たので、私は拾つた當時と何の變りも見せてゐない、千數百年前の古銭を掌のうちに握つて座に戻りました。

「之だよ、君。」

私は無造作に和銅開珍を彼の前に置きました。

彼は定めし好奇の眼を輝かして、貪るやうに眺める事と思ひましたが、案外冷然たる態度で鳥渡手に觸れて見たきりで、私の方を向いて云ひました。

「實はね、僕の父が非常に之を見たがつてゐるんだ。相すまないけれども二三日貸して貰へまいか。」

彼のこの言葉から推すと、始めからこの古銭に興味を持つたのは、彼でなくて彼の父だつたらしいのです。然し私にとつては彼だらうが彼の父だらうが關はないのです。もと／＼私は和銅開珍には大して執着はないのでしたから、私は即座に答へました。

「あゝ、好いとも、どうぞお持ち下さい。」

富田はホツと安心したやうな顔をして、銅貨を大切さうにポケットに入れると、ソコ／＼に歸つて行きました。

二三日と云ふ話でしたけれど、其後一週間経つても二週間経つても富田は姿を現しませんでした。けれども何回も云ふ通り、私は貸した古銭は一向惜いと思ひませんでしたから、催促に行くは愚か、例によつていつとはなしに富田に貸した事などは忘れて終つたのでした。

それから一月程経つて、さうです、そろ／＼秋風が立ちかけてゐた時に、悄然として富田が訪ねて來ました。

「和銅開珍を返さなければならぬのだけれども、父が何だかひどくあれを研究し出してね、中手放さうと云はないのだ。すまないけれどももう少し貸して置いて呉れ給へ。」
 彼は云ひ悪くさうにさう云ひました。

「あゝ、好いとも、僕はちつとも關はないよ。進呈したつて好いんだよ。」

「有難う、ちやもう少し貸して置いて呉れ給へ。」

かう云つて彼は未だ何か話したい事があるやうにもぢくしてゐましたが、たうとう云ひ出せないで、しよんぼりと歸つて行きました。

「少し變だな。どうしたと云ふんだらう。」

私は彼の後姿を見てかう呟いたのでした。

所が思ひがけなく其の翌日、彼はあわたゞしく私の家に駆けつけて來ました。さうして當惑したやうな顔をしながらか、吃りくく云ひました。

「君、誠に濟まない。君から借りた和銅開珍がたうとう紛失したよ。」

紛失したと聞いてもさ程驚かなかつた私も、たうとうと云ふ言葉がひどく氣にかゝりました。

「たうとうつて、君、前から紛失しさうだつたのかい」
 彼の返事は意外でした。

「さうなんだよ、君。」

そこで彼がポツリ／＼話出した事はかうでした。

富田の父は前にも鳥渡述べた通り、文學博士の肩書を持つて、大學教授の職にゐる人ですが、若い時にいろ／＼苦勞した爲か變に氣むづかしくなり、家の人も餘り口を利かず、黙々として書齋に閉ぢ籠つて讀書に耽つてゐるのでした。和銅開珍の事は少し心當りがあつたので、富田は私から聞いた事を父の博士に傳へたのでしたが、博士は非常に好奇心を動かしたらしく、早速借りて呉れと云ふ事で、富田が私の家から持つて歸ると、ひつたくるやうにして受取り、それから熱心に何事か調べ初めたのださうです。

「所がね、君、父が君の和銅開珍を受取つてから、碌な事が起らないのだよ。」

かう云つた富田の顔は稍蒼ざめてゐました。

博士は和銅開珍を手に入れると、先代から世話になつてゐる顧問辯護士などを呼んで、頻りに相談をしてゐる様子でしたが、不思議な事には近頃度々博士の身邊に異様な事が起るのでした。

「一度はね、父の書齋に置いてあつた自慢の獨逸から持つて歸つて來たと云ふ大きな花瓶が、どろした機みか棚から轉げ落ちて、もう少しで父の頭に當る所だつた。一度は動脈硬化を防ぐ爲に醫者から貰つてゐる丸藥を呑んだ所が、非常な苦しみで吐血して、もう少しで生命の危い所だつ

たり吃驚してかけつけた醫者の調べた所ではどうも中毒らしいのだが、どうしてそんな毒が這入つたか、残つた丸薬は皆調べたけれども何の異常もないし、どうしても原因が分らなかつた。一度は講演會場から自動車で送られて歸つて來たが、家の附近に丁度自動車の通路に當る所に大きな石が置いてあつた。幸ひに運轉手が氣がついて無事だつたけれども、僕はどうも自動車を轉覆させる積りで故意に置いてあつたと思ふのだ。それに最近僕の中の近所に放火があつて、之も幸ひ大事にならないで済んだが、僕は之等の不吉な事がみんな和銅開珍に關係があるやうに思へてならないのだ。それにあの古錢を非常に欲しがつてゐる人間が父の周圍にゐるので、僕は一時も早く古錢を君に返すやうにと父に勧めたのだけれども、父は頑として聞かないのだ。そのうちにたうとう古錢が昨夜紛失して終つたのだよ。」

彼の謎のやうな話はどうも私の腑に落ちませんでした。私は彼を宥めて和銅開珍はもと／＼拾つたものだし紛失しても少しも關はない事、引續き起る博士の災難が、あの古ぼけた古錢がさせる業だと云ふのは少し迷信的でないかと云ふ事、君は神經衰弱にかゝつてゐるかも知れないからよく養生した方が好い、と云つたやうな事を靜かに彼に話してやりました。其の日は彼は和銅開珍を紛失させた事をクド／＼と詫を云つて、蒼い顔をしたが歸つて行きました。彼が歸つてからも暫くは何となく氣懸りでしたが、私は例の暢氣から直ぐそんな事は忘れて終

ひ、それなり和銅開珍の事は思ひ出しませんでした。

所が二三日してから富田が又もや私を訪ねて來た時には、彼の只ならぬ様子にすつかり驚いて終ひました。僅か二三日のうちに彼はゲツソリ瘦せて、凹んだ眼はキラ／＼と輝き、顔色は墓場から出て來た人のやうに土色でした。

「君、父はいよいよ殺されるかも知れない。」

私の顔を見ると彼は直ぐにこんな恐ろしい事を申しました。

「え、何だつて。」

「和銅開珍を盗んだ奴が、それを手に入れただけでは満足せず、父の生命を覗つてゐるのだ。僕はどんな犠牲を拂つても父を保護しなければならぬ。その爲に僕は此頃おち／＼と眠られないのだ。」

私は彼が發狂したのではないかと思つて、彼の怪しい眼つきを打守りながらぞつとしました。

「君、一體それはどう云ふ譯なのだ。落ち着いて悠くり話して呉れ給へ。」

私は彼の顔色を覗ひながらかう云ひました。

「かうなつてはもう隠してゐる譯には行かない。すつかり話をするから聞いて呉れ給へ。」

かう云つて彼の話出した所は實に稀代な話で、私が十五六年も前にそつと拾つて置いた一枚の

和銅開珍に、こんな因縁が結びついてるようとは夢にも思はない事で、只あきれるより外はなかつたのです。

富田の話した所によると、彼の祖父に當る人は千駄ヶ谷町が未だ村と云つて人家などは數へる程しかなかつた時代からの大地主で、徳川公爵家と所有地の大小を争ふ程だつたのでした。所が彼は何と思つたか、死ぬ少し前にその廣大な土地をそつくり賣つて終ひました。それは何の爲だつたのでせうか。多くの人の推測は多分彼が、財産を隠す目的だつたらうと云ふ事でした。と云ふのは彼には三人の男の子がいましたが、即ち富田の父もその一人で、彼は末子でありました。彼の上には長兄と次兄とがあつたのですが、この長兄と云ふのが賭碁に身を持崩して終ひました。彼は生得賭碁が好きでしたが、ふと碁を習ひ覺えると、すつかり夢中になつて終ひ、賭碁の味を覺えると、萬事放棄して賭碁でなければ夜も日も明けぬといふ始末で、終ひには碁品も相當にはなりましたが、何がさて坊ちゃん育ちですから、取られる一方で随分親にも迷惑をかけ持て餘しものになつてゐました。次兄は又酒と放蕩ですつかり身を持ち崩し、早くから勘當同様と云ふ始末で、満足なのは三男の富田の父だけでした。然し之とても未だ海のものとも山のものとも分らぬので、富田の祖父と云ふ人は巨萬の身代を擁しながら、子供についてはひどく不幸で、死後財産の安全を計るのには一方ならぬ苦勞があるのでした。そんな譯で祖父は生前にすつかり

不動産を處分して金に換へ、ポツクリ死んだのですが、兄弟が寄つて遺言狀を開けて見ると啞然としたのは、遺産と云ふのは和銅開珍が三枚きり、それを一枚宛三人の兄弟に與へると云ふのです。そして五年後に彼が生前信賴してゐた顧問辯護士の高宮玉一氏の所へ、その古錢を持つて集れと云ふのでした。

長兄と次兄とは夢中になつて父の遺産を探しました。然しどこを探しても一坪の土地も一錢の金もないのです。富田の父はもと／＼三男ですし、遺産などと云ふ事は當にせず、獨立でやつて行く道を講じましたが、兄二人はどうにも思ひ切れず、貰つた和銅開珍に何か仕掛でもあるか、深い譯でもあるかと眼を皿のやうにして研究しましたが、之も元より成功する筈がありませんでした。さうからするうちに長兄は折角親から譲られた和銅開珍を賭碁で忽ち取られて終ひました。賭碁で直接取られたのではなく、富田家の莫大な財産がどこかに隠されてゐると睨んだある慾の深い男が、和銅開珍がその財産を獲る何かの鍵になるに違ひないと思ひ込み、長兄の手から少なからぬ金で買取つたのだと云ふ説もありました。いづれにせよ、長兄の手にあつた和銅開珍は何者かの手に渡つて終つたのです。次兄の持つてゐたのは間もなくどこかへ遺失して終ひました。そんな事で五年後に兄弟三人が問題の古錢を持つて高宮辯護士の所へ集まるといふ事は自然消滅となつたのでした。

「その二番目の伯父の落したと云ふのが君の拾った和銅開珍らしいのだ。どうして伯父がそんな所へ落して置いたかと云ふ事は疑問だけれども、當時伯父はひどい梅毒にかゝつてゐたさうだから、先づ間違ひはあるまいと思ふ。」

富田は長々と物語つてホツと息をつきました。

「で、今君のお父さんの生命を覗つてゐる奴があると云ふのはどう云ふのだね。」

奇々怪々な話に釣り込まれた私はかう聞かすには居られませんでした。

「先達君から和銅開珍の話聞いた時にもしやと思つて父に話したのだが、その話が一番上の伯父の耳に這入つてね。」

次兄と云ふのは兩三年前に病歿しましたが、長兄は相變らず富田の父をせびつては賭碁に暮してゐるのでした。彼は和銅開珍の話を知ると非常にそれを欲しがつたさうです。一度少なからぬ金に換えてゐるので味を占めたのでせうが、一方には未だ父の隠した遺産の事が思ひ切れなかつたのでせう。

「親父の奴はどこへ財産を隠しやがつたか。今思へば例の古銭は三つ揃へるときつと寶を探し出す鍵になつたのだらうが、早く手放して残念な事をした。」

始終彼はさう云つてゐたさうです。だから彼が新に富田の父の手に這入つた和銅開珍を欲しが

つたのは無理はないのです。

「それにね、父が銅錢を研究して何か端緒を得たらしいのだ。頻りに顧問辯護士の高宮さんと往來し出したからね。父は何も祖父の財産を獨占めする積りはないのだらうが、伯父は氣が氣でないらしいのだ。」

「すると、何かい、君は伯父さんが——」

私は吃驚して富田の顔を見ました。

「あゝ、そんな事は考へたくないけれども、先達も話した父の上につつた怪しい危難の數々がどうしても、親しく父の周圍にゐるものでなければ出来ない事なのだ。」

富田は蒼白い顔をして悲しさに云ひました。

「まさか——」

私が打ち消さうとするのを追被せるやうに彼は云ひました。

「伯父の性質は随分ひねくれて終つたからね。賭碁などと云ふ事があゝまで性格に變化を與へるものか知ら。」

富田はかう云つて私の顔を見ました。これは私にとつて大きな皮肉でした。私は賭碁こそ打ちませんが、碁は非常に好きで學生時代にはすつかり癡つて、學業を顧みない事さへあつたので

す。私は富田の言葉を只苦笑ひしながら聞く外はありませんでした。

三

富田の最後の訪問から二三日して、私は朝床の中で新聞を擲けて見て、思はずあつと聲を擧げました。

社會面全面を埋める位に、大きな見出しで富田文學博士が昨夜何者かに慘殺された事が報じてありました。

友人の富田が彼の父の身に對して心配してゐた事が、不幸にも事實となつたのでした。

博士は世にも奇怪な死方をしたのでした。

昨夜九時過ぎ博士邸に一人の訪問者がありました。それは彼の父の時代からの顧問辯護士の高宮氏で、家人の話によると不意の訪問でなく、博士は彼の來るのを待ち受けてゐたと云ふ事です。で、博士は直ぐ奥の書齋の一間に通し、ひそくと何か重要な相談らしい事を始めてゐたさうです。對談約三十分、十時少し前に高宮氏は辭し去つたのですが、大抵の場合に來客を玄關に送つて出る主人が今日に限つて姿を見せないもので、少し不審に思ひましたが、女中はそのまま高宮辯護士を送り出しました。その時に彼の態度は別に變つた事もなく、そわ／＼してゐるやうな

様子は少しもなかつたさうです。

高宮辯護士が歸つてからも、博士は奥の一間に閉ぢ籠つたまま少しも出て來なかつたのでしたが、そんな事は稀な事ではなく、かう云ふ際に家人が行くと却つて叱られるので、その儘にして置きました。十二時少し前に息子即ち私の友人である富田が歸つて來ました。彼は據どころない用で夜遅くまで外出してゐたのでしたが、歸つた時には非常に疲勞してゐたさうです。彼は歸る早々家人からその話を聞くと大いに驚いて、書齋へ飛び込んで見ると、博士は机によりかゝつて、何か書物でもしようとした所を、背後から書齋に飾つてあつた南洋の土人用の短刀で只一刺に心臟をつき貫かれて、血まみれになつて斃れてゐたのでした。

急報によつて駆けつけた司法當局者の調べた所によると、博士は死後僅々二三時間位の所で、殺害された時間は九時から十時の間と云ふ事で、第一の嫌疑者として即刻高宮辯護士が召喚されましたが、驚いた事には、彼は博士邸と程からぬ、矢張千駄ヶ谷町に住んでゐる博士の長兄の所で悠然として碁を打つてゐました。そして彼自身及博士の兄、同家の家人の證言によると、彼はその日宵のうちから博士の兄の宅で同人を相手に碁を打ち續けてゐたので、一度も外出した事はないと云ふのです。之には流石老練な警察當局者もロアングリで途方に暮れたのでした。

一方博士の家人の證言には訪ねて來たのは確かに高宮辯護士だと云ひますから、先づ何人かど

巧みに辯護士に變装して博士を訪ひ兇行を演じたと云ふ外に解決の途はなく、尙兇行については餘程込み入つた事情があるらしく目下犯人嚴探中、と云ふのが新聞記事の要領でした。

何と云ふ奇怪な事件でせう。

博士はあの和銅開珍に纏る不思議な事件の爲に兇手に斃れたに相違ありません。犯人は何者でせうか。先達つてからの富田の話によると、疑はしいのは博士の兄、即ち彼の伯父です。然し彼は兇行の時間には自宅で高宮辯護士と碁を打つてゐたと云ひます。それから富田は夜遅くまで外出してゐたと云ひますがもしや彼が——いや、そんな事は絶対にありません。然し彼が偶々外出してゐたと云ふ事は何でも疑はずに置かない當局者の恐ろしい嫌疑から逃れる事が出来ませうか。而も彼は疲労して歸つて來たと云ひ、行先については明瞭な返答をしないと云ふではありますせんか。私は富田が瘦せこけた蒼白い顔をして神經を極度に緊張させながら、いら／＼してゐる姿が眼にチラついて氣懸りでなりませんでした。私は刑事などで固められてゐる混雑した博士邸を想像すると、嫌でなりませんでしたが、私の拾つた和銅開珍から事件が展開して、遂に博士の犠牲となつた事を考へ、友人としての義務を思ひ、富田を訪ねない譯には行きませんでした。富田の家は割にひっそりとしてゐました。取次に出た女中が引込むと、直ぐに興奮した富田が現はれて、私の手を執るやうにして、一間へ導きました。

「能く來て呉れた。君、父はたうとうやられたよ。僕が宅にさへ居ればこんな事にはならなかつたのだらうが、宅にゐなかつた許りに父は殺されるし、僕は僕で警察の奴に詰らない疑ひをかけられるし、僕はどうして好いか分らないのだ。」

彼は喉を掻きむしりながら、小供がむづがり泣きをするやうに喚きました。

彼が夜遅くまで外出してゐたと云ふのは普通の用事ではないらしく、彼は曖昧に言葉を濁して

私にさへはつきり云ひませんでしたから、警察で疑つたのも無理はありません。然し、彼が高宮

とか云ふ人に變装して現在の父を刺殺すなどと云ふ事は考へられません。然し、彼が高宮

「あいつだ。あいつだ。あいつが高宮辯護士に旨く變装して父を殺したのに相違ないのだ。而も

高宮と碁などを打つて巧みなアライバイを拵へたのだ。」

富田は狂つたやうに尙も喚きました。彼は深く伯父を疑つてゐるのでした。

彼の叫聲が外へ洩れた爲でせう。ヒョッコリ我々の坐つて居る部屋を覗いた人がありました。

家の人だらうとは思ひましたが、それは思ひがけなく我々と同年輩の瀟洒たる青年紳士でした。

「富田さん、餘り大きい聲を出してはいけませんよ。」

彼は年少者を勞るやうに云ひました。

「あつ、君、紹介しよう。」

富田は雷氣に打たれたやうに叫びました。

「之は木村君と云つて僕の友人なのだ。」

「始めまして、宜しく。」

さう云つて私は頭を下げました。この時私は有名な私立探偵の前に立つてゐたのですが、この時は全く富田の友人と思ひ込んでゐました。

私は別にする事もなく、厚く富田を慰めて其日は歸りましたが、翌日になると意外にも昨日富田の紹介した木村と云ふ紳士がヒョッコリ訪ねて來ました。

「富田君も實に神經質で——ね、變に伯父さんを疑つたりして困るのですよ。」

彼はニコ／＼しながら云ひましたが、やがて何を思つたのか、

「あなたは基がお強いさうですね。一つお教へ願ひないでせうか。」と云ひました。

私は彼の馴々しい態度を何となく薄氣味悪く思ひましたが、もとより好きな道だし、富田のことなどでくさ／＼してゐた時ですから、早速盤を持ち出して對手をしましたが、木村は私よりは二目位弱いやうでしたが素人としては、中々強く氣持の好い碁でした。

「いや、中々強い、とても敵ひません。」

彼は勝負がすむと私の技倆を歎賞しながら云ひました。

「どうでせう。私の知つてゐる者に碁の強い奴がゐましてね、私はいつてもやられて口惜しくてならないのですが、あなたの腕前なら間違ひなしにやつつけられると思ひますが、一つ私の仇を討つて呉れませんか。」

碁と云ふのは本來好きませんし、見た所惡氣のなさうな人ではありませんが、昨日會つた許の人ですから、氣が進みませんでした。どうしてこの木村と云ふ人は勧め上手で、私はたうと其晩その碁の名人と手合せをする事を承諾して終ひました。

其の晩私は木村の所へ參りました。

對手はもう待ち構へて居りました。もう六十を大分越えたらうと思はれる赤ら顔の老人で、好々爺然とはしてゐましたが、どこかに狡猾さうな卑しさが漂うてゐるのです。

木村の紹介で挨拶がすむと、すぐに對局を始めました。初めての事ですから先づ石を握りましたが、私が先を布く事になりました。我一子彼一子と下して行きましたが、彼は中々強くそれに碁に似ない筋の好い碁で、随分よく考へて手筋を打つのでした。私も劣らずによく考へました。自惚かも知れませんが、先ならば私に負けはないと思つてゐました。

そのうちに双方にむづかしい石が出來ました。一步を誤ればお互に潰れて終ふと云ふ際どい碁になつたので、私も一生懸命でしたが、對手の老人の眞劍さと來たら、私が未だかつて経験した

事のない程でした。

彼は二十分経つても三十分経つても石を下しません。私はその中に小用を催しましたので、鳥渡目禮して座を立ちました。極く弱い策碁には一手に五分と考へる事は稀で、たとへ自分の手番でも對手に中座されると、中々一人でちつと考へてゐると云ふ事は出来ないのですが、素人でも初段近くになると一手に相當考へますし、考へ中に對手が立つてもさして苦にならぬものです。殊に今は初對面の而も何程か賭かつてゐる——私は知りませんでした。木村が賭けたらしいのです——眞劍な勝負の、最もむづかしい所ですから、彼はちつと差うつむいて盤面を睨んだまゝ、私の立つたのをさへ知らぬやうでした。

私は小用をすませて、手洗ひの所の雨戸を一枚繰開けてある所から外を眺めて、疲れた頭を休める爲に大きく二三回深呼吸をしました。外は晴れ渡つた秋空にキラ／＼と星がキラめいてゐました。

「對手の考へ方では未だ十分や二十分はかゝると思ひましたから、態と悠くりして、そろ／＼と座に歸りますと、私はあつけに取られました。私の座席にはちやんと木村が座り込んでゐます。老人は相變らずうつむいて一心に考へてゐるのです。盤面を見ると私の覺えのない黑白二石が並んでゐます。思ふに白が一手打つたのを、木村が私の代りに一手應じたらしいので、老人はまた

一生懸命に考へてゐるものと見えます。大事な碁に、而も木村は私より一二目弱いのですから、無斷で代理などを勤められては困りますので、咎めるやうに木村を睨みますと、木村は私の顔を見てニヤ／＼笑ひながら、黙つてゐると云ふ合圖をしました。その様子が意味ありげなので私は仕方なしに碁盤の横の木村の坐つてゐる所へ腰を下しました。

老人は一向そんな事に氣がつかないらしく、一石ポーンと下しました。木村は待つてゐたと許りに直ぐ黒石を下しました。老人は對手が意外に早く石を下したのに面食ひながら、又一生懸命に考へ込みました。

こんな風に黑白合せて六手位下される間に、時間にして一時間足らず、老人は少しも對手の變てゐる事に氣づかず、どん／＼碁は進行いたしました。

私は傍で見えてゐて、木村の對手が無茶なので、碁がだん／＼悪くなつて行くのが氣になつて耐りませんでした。

そのうちに木村が何と思つたか大きな聲で云ひました。

「富田さん氣がつかませんか。さつきから私が打つてゐるんですぜ。」

私ははつとしました。老人がどんなに怒るかと思つたのです。老人は無論吃驚して顔を上げました。さうして對手をちつと見ました。それから横に坐つてゐ

た私の顔を見ると、彼は驚駭の爲にみる／＼顔色を變へました。それは息が止まるかと思はれる程の絶大な驚きでした。兩眼を大きくみはり、四肢を硬直さして、作りつけの人形のやうになつた彼の顔は終生忘れる事が出来ません。

やがて彼はフラ／＼としたかと思ふとパタリと前にのめるやうに倒れました。

x x x x x x

之で私の拾つた和銅開珍の捲き起した悲劇は解決したのでした。

私の碁の對手は既に讀者諸君の御推量の如く、友人富田の伯父で碁に熟中して父なる人から遺産を譲る事を躊躇させた人です。私をこの人と對局させた木村は有名な私立探偵木村清であつた事は先刻諸君の御承知の事です。彼は博士の不思議な死を解決すべく博士の家人から依頼されたのですが、訪ねて来た高宮辯護士が他人の扮装したものであるとしては餘りに巧みに過ぎるので、木村はむしろ高宮が兇行を演ぜられた時間に、恰度富田の伯父と對局してゐたと云ふアリバイに疑ひを起しましたが、アリバイは既に警察當局でさへが信じて終つた程立派なもので、對局の對手富田老人が確信を以つて證明した所で、虚偽の申立とはどうしても思はれませんでした。そこで木村は考へました。彼も又少し碁を嗜みました所から、かつて或る高段者同志が昇段披

露會で對局した時に——之は眞劍のものでなく、餘興的のものでした。——一人の碁客が中座した時に、或る悪戯好きの矢張り高段碁客が代理に一石を打つた所、考へ込んでゐた對手の碁客は一向氣がつかないで、應手をしたと云ふ話を聞いてゐましたので、對局中對手に悟られないで替玉を置く事は必ずしも不可能事でないと思ひまして、高宮と富田老人の碁風を探つて見ると、高宮の方はさうではないが、富田老人は非常に熱中する性質で、對局中は殆ど盤面を睨んで他を顧みないと云ふ事が分りました。で、木村は私が碁に強いと云ふ事を聞いて早速私を利用して彼と對局させ、對局中に十分代理が利くと云ふ事を富田老人に悟らせ、且つ私をその證人にしたのでした。實際にやつて見せなければ、恐らく富田老人は高宮と對局中にいつの間にか對手が變つてゐたと云つても容易に承知しなかつたでせう。それだけに私と對局中いつの間にか對手が木村に變つてゐた事を發見した時の彼の驚きは絶大なるものでありました。高宮の代理を勤めた碁打も木村の機智で直ぐ捕まりました。之も一つの面白い話になるのですが、長くなりますからお話しない事にします。

木村の働きによりまして富田博士を慘殺した恐るべき犯人は、高宮辯護士である事が判明しました。彼は巧みに富田老人の碁風を利用して、對局中に替玉を遣つてそつと彼の家を脱け出し程遠か

らぬ博士邸に行き、博士にある證書を署名させ、隙を覘つて背後から刺殺し、悠々と富田老人の所へ引返へして、碁を打繼いだので、實に恐るべき犯罪者でありました。

高宮が博士を惨殺した理由はかうでした。

博士の父なる人は三人の子供のうち二人までが身を持ち崩して、遺産を譲る時は意味なく浪費し反つて悪い結果を招く事を恐れて、生前に不動産をすつかり處分して動産に換へ、之を信頼してゐた高宮辯護士に保管を依頼して、三人の兄弟には勿體らしく古銭を三枚分け與へて、五年後に高宮の所へ集るやうに違言しました。

彼の考へでは五年間無一文にして置くうちには、二人の兄も何とか身が納まるであらう。

その時に財産を分けてやれば有効だと考へたので、高宮に預けた五年後の遺産處分法には委しくさうした事が書いてあつたのでした。

高宮と云ふ人間も必ずしも先代富田氏の信頼に値ひしない男ではなかつたのでしたが、大金を委託されて氣が變り、長男の和銅開珍は賭博で捲き上げ、次男が遺失して了つたのを幸ひに委託された財産を横領して終つたのでした。

それが圖らずも次男の落した和銅開珍を私が拾つて、不思議な因縁で十數年後にそれが三男の

博士の手に這入り、博士が熱心に研究し出した爲、高宮の罪惡が發覺しさうになつたので、彼は種々の手段で博士を苦しめ、たうとう殺して終つたのでした。

富田が伯父を疑つたのは全く見當違ひでした。

只一つ残つた疑問は友人の富田が、父の博士が殺された夜の十二時までどこかにゐて、その居場所を警察の訊問にさへ答へなかつた點ですが、後に私の間に彼はかう答へました。

「僕はね、君が和銅開珍を拾つたと云ふ場所を私に掘り返へしたのだよ。二番目の伯父がそこへ立入つたのは何か理由がある事だと思ひ、もしかそこに寶が隠されてゐるのではないかと掘つて見たのだ。」

さう答へて彼は恥かしさうに顔を赤くしました。

氣早の惣太

惣太の經驗

彼は仲間には氣早の惣太で通つてゐた。彼の本性を知りたい人は警視廳へ行けば、指紋と共にちやんと分る筈であるが、姓などは彼自身さへ必要に迫られて時折思ひ出す位なもので、この話には餘り關係がない。

惣太は生れつきのあわて者で、驚くべく氣早である。ある時彼は銀行へ忍び込んで、金庫の前金の網戸を開けた。中へ這入つて文字盤を出鱈目に引掻き廻してゐると、金庫が彼と共にスーと上へ昇つた。彼はエレベーターの中へ這入つてゐたのであつた。或時彼は或る家の雨戸をこぢ開けて忍び込んだ。廊下の突當りに箆箆があつたので、力委せに押破ると彼は外へ出て終つた。箆箆と思つたのは戸袋だつたのである。——こんな話が仲間内に誠しやかに傳へられる程彼はあわて者であつた。多分こんな話は作り事で、現に惣太は銀行の金庫を破る程の高級な盗人でない事は分るが、手提金庫だと思つて鐵瓶を提げて來たり、ラヂオのラツパの積りで水牛の角を攫つた

りする事は、彼にとつては朝飯前であつた。かういふ粗忽者が永年泥棒を働いて、稀にしか捕まらなかつたのは、一に彼の幸運に歸すべきだが、彼が生活の爲にしか盗みをしなかつた事も大きな原因である。

生活の爲めに盗みをするに云ふ事は大して樂な事ではなかつた。もし惣太の父親が盗人でなく、母親が父親の刑務所入りの留守中、何か生活を支持すべき仕事があつたか、又は彼が兩親に死に別れてから、仲間が羽振りの利く親分に養はれなかつたら、彼は何か別の職業を撰んで愛嬌者と唄はれて一生を送つたかも知れない。尤も彼は一度正業につかうと思つて、一日土方をやつて見た事がある。けれども恐ろしく力の要る仕事で、それに朝から晩までコツン／＼穴を掘つてゐる様な單調な事は、彼は逆もやつてゐられなかつた。彼は豆だらけの手で、一品料理屋の出前持になつた。所が彼は配り先を間違へてばかりゐた。その上集めに行く段になると、配り先をケロリと忘れてゐた。それで、二日目にむかふから斷られて終つた。彼は止むなく彼には一番適した夜盗を生業にした。その代り彼は負らなかつた。可成儉約しい生活をして、金がなくなると、威勢よく稼に出かけた。

或る時、惣太は洋館に忍び込んで見たいと云ふ慾望を起した。別にどうと云ふ理由もなかつたが、洋館に這入つて見たくなつた。後には洋館にはどうかすると西洋人が住んでゐて、西洋人と

云ふものは家中に無暗に銃を下して、稍ともするとピストルを打放すものであると云ふ事が分つたので、滅多に這入つて見たいなどは思はなくつたが、その時は何分始めての事であるし、兎に角這入つて見たくなつたので、彼は晝間目星しい洋館を物色して歩いた。で、上野公園の奥、鶯谷の方へ出ようとする所に、こんもりと森に圍まれた、三軒の同じやうな建て方の洋館を發見して、大嫌ひな犬がゐない事を確かめると、忽ちその眞中の家に這入つてやらうと決心した。上野の森の夜は早く来る。殊に時は二月の末で、寒さが未だ酷しい折だつたから、十時過ぎにはもうこの邊を通る人はない。さつきから待ち草臥れた氣早の惣太、もう耐らなくなつた。そつと低い石垣を乗り越えて建物に近くと、コチ／＼と窓の邊で音を立てゝゐるたが、忽ちヒラリと中へ躍り込んだ。

飛び込んだ所は、もとより勝手などを知つてゐたのではないが、可成廣い部屋で客間らしかつた。懐中電燈で照らして見ると、壁には大きな額が懸つてゐて、床には厚い絨緞が敷きつめてあり、ドツシリとした調度、惣太の眼には可成贅澤に思はれた。彼はホク／＼喜びながら、いきなり煖爐の前の棚に乗せてある黄金色をした置き物に手をかけた。その時である。部屋の電燈がパツと點いた。

惣太の狼狽は氣の毒なやうであつた。彼は洋館の電燈は戸口にあるスイッチで、外から點けら

れるものだと云ふ事知らなかつたのだ。續いて扉の外の話聲を耳にすると、彼は無我夢中で窓際の長椅子の下に這ひ込んだ。

彼が長椅子の下で腹這ひになつて、息を凝らしてゐると、扉の開く氣配がしてコツ／＼と足音が響いた。二人らしい。その人達は長椅子に近いたかと思ふと、いきなりその上へドシンと腰を下したのである。長椅子は御承知の通り、バネがついてゐて、腰をかける人にはフ／＼して氣持のいゝものだが、バネは上から重みが加はるにつれ、幾分下へ出張る事になつてゐるから、下に潜つてゐる人には不愉快千萬で、惣太は押し潰された蛙のやうに手足を伸びる丈伸ばして、腹を床にピタリとつけるより仕方なかつた。それでも上でフ／＼する度に、コツ／＼と背中へ堅いものが當る。

腰をかけたのは一人は洋服を着た男に違ひなかつた。揃へた足が二本彼の鼻先でちつとしてゐる。外に二本、之も人間の足には違ひないのだが、床の上二三寸の所を、全で章魚の足のやうにピン／＼跳ねて、惣太の鼻先を掠める。その度に彼は、せい／＼五分位しか動かす餘裕のない頭を、一生懸命に引込めて、それを避けねばならなかつた。始めは素足かと思つたが、薄い肉色の絹の靴下を穿いて居るのだつた。華奢な恐ろしく踵の高い靴を穿いてゐる。つまり洋装した女性の足なのだ。男の膝に腰をかけて、兩足をピン／＼振つてゐるのだ。大方兩手で男の頸にブラ下

つてゐるのだらう。惣太は漸く之は西洋人夫婦だと思つた。然し彼はそれを直ぐに取消した。日本人に違ひないと思つた。足で區別したのではない、頭上の會話がまぎれもない日本語だつたからである。

「よく来て下すつたわねえ。」女の聲。

「うん——」男の聲。

「ほんたうに妾待つてゐたのよ」

「さうか。」

「あなた、あれ持つて来て下すつて。」

「うん、持つて来たよ。」

「まあ、嬉しい、あなたはほんたうに實があるわねえ。」

女の足が急に運動を止めたかと思ふと、チウツと云ふ異様な音が聞えた。

惣太は思はず低聲で畜生！と云つた。もし長椅子が少し軽いか、それとも男の方が腰をか

けて居なかつたら、この時長椅子は女を乗せた儘躍り上つたかも知れない。いづれにしても、惣

太が腹を立てたにもかゝらず、長椅子がビクともしなかつたのは、彼にとつても女にとつても

幸な事であつた。

「あなた、なぜそんなに妾をじろく見るの。」

「餘り美しいからさ。」

「あら、お世辭が好いのね。」

「君位美しいと随分惚れ手があるだらうね。」

「ないわよ。誰も惚れてなんか呉れないわ。」

「そんな事があるもんか、誰だつて惚れるよ。」

「ぢや、あなたでも。」

「無論さ、でも片思ひだから仕方がない。」

「あら、片思ひはないでせう。あたしの方がよつぽど片思ひだわ。」

「——」

「あら、また恐い顔をするのね、あなた今晚は何だか變だわ。どうかなすつたの。」

「どうもしやしない。」

「ぢや、機嫌をよくして下さいな。」

惣太は長椅子の下でへた張りながら又チエツと云つた。女の足は相變らず、ブラン／＼と彼の鼻を掠める。氣早の惣太もう我慢がならなかつた。飛び出さうとするとたんに、不思議な事が起

つた。ブラン／＼してゐる足の尖から靴がパツと床に落ちた。いや女が脱いだのだ。惣太は驚いた。踵の高い女靴があゝ簡単に脱げるものとは思はなかつた。が、もつと驚いた事は、女の白い手がスウーと上から降りて来て、靴に近づいたかと思ふと、キラリ、靴の中へ小さな光るものを落とし込んだ。次の瞬間にそゝくさと足尖で靴を引つけたと思ふと、又ブラン／＼始めた。

「おや、惣太は首を縮めた。」この女は仲間かな。

「あなた、今日は陽氣に一つ飲みませうね。」上では會話が始まる。

「僕はだめだよ。」

「あら、そんな野暮な事を云はないで飲みませうよ、ね、ウイスキー？ ブラン？」

「そんなきつい酒は逆も飲めないよ。」

「まあ、お飲みなさいよ。」

女の細い足がヒラリと床について、暫く見えなくなると、やがて盆の上にグラスのふれ合ふ音がして、又女の足が見えた。

「あたしも飲みますから、あなたも飲んで頂戴。だつて今日はあたしの望みが叶つて、こんな嬉しい事はないんですもの。」

「うん、のむよ。」男の不精々々答へる聲が聞えた。

惣太はさつきから考へてゐたが、どうも仲間内にはこんな女は思ひ出せない。畜生！ 太い、また。こゝはきつと淫賣宿に違ひない——それにしても洋館なのが不思議だ——淫賣なら淫賣で好い。客を喰へ込んで、持物を掠めるとは太い奴だ。よしこつちにも覺悟があるぞ。さう思つて、惣太は機會を覘つてゐた。

やがて女は又長椅子に腰をかけて、足をブラン／＼振り出した。惣太は不自由な身體を曲げて、やつと片手を出すと、矢頃を計つて、鼻先へやつて来た靴に鳥渡指を觸れた。はずみで、豫期した通りに、靴はポロリと落ちた。彼は素早く手を入れて中のものを掴み出すと、用意して置いた洋服の腕からもぎ取つたボタンを入れた。斷つて置くが、惣太は安物の洋服を着てゐた。彼は何となく洋館に忍び込むには洋服を着て行かねばならんと思つたので。

女はあわて、靴に足をつつ込んだが、指輪がボタンに化けた事は氣がつかかなかつたらしい。それから暫く女ははしやいで喋りつづけた。男の方はうんとか、さうかとか言葉少なに受流してゐたが、だん／＼返事がなくなつて、やがて四邊がしんとした。

氣早の惣太、椅子の下で腹を凹まして肘を張つて鎌首をもたげて見ると、女の足はもう見えな

いで、男の足だけが、斜めによぢれたやうになつて、椅子から下つてゐた。ぢつとして動かない。惣太は鳥渡突つてみた。ぢつとして居る。今度は力を入れてついで見た。矢張動かない。

少し癢に障つてきたので、思ひ切つて突き飛ばすと、足は忽ち動いたが、すぐ元通りに斜になつて静止する。惣太はそろ／＼長椅子の下から這ひ出した。

立上つて見ると、椅子にもたれて、一人の男がだらしなく寝そべつてゐる。安心すると共に、惣太はのう／＼と大きな伸をしたが、伸をしてゐる中に彼はカツとなつた。酔拂つてグウ／＼寝てゐる、それは未だ好いとして、あんな女に引かかる奴はどうせ青二才の腰拔野郎だと思つてゐた所が、こいつはどうだ、四十男の鬚面だ。どう見たつて女に好かれる顔ぢやない。なんと云ふ態だ。惣太はいきなり横面を撲り飛ばさうと思つたが、その瞬間に彼の職業意識が蘇へつた。金鎖がチヨツキの胸で光つてゐる。彼は忽ちチヨツキのボタンを外した。内懐を探ると、手に當つたのは、一束の紙幣、天の與へである。彼は素早く、紙幣束をズボンのポケットに押し込むと、さつさと窓を開けて外へ飛び下りた。生活の爲めの職業だ。これ以上は時計だらうが、寶石だらうが振り向く惣太ぢやない。

二

窓から飛び下りると、例の低い石垣を乗り越えて、惣太はスタ／＼鶯谷の方へ歩き出した。まだ十二時前だ。彼は鼻唄でも歌ひたいやうな気分である。

ものの半町とも行かぬ中に、暗闇からモシ／＼と呼び留めるものがある。

惣太は飛上つた。女の聲ではあるが、よし刑事でないにせよ、この夜更、しかも上野の森の中で、だしぬけに呼び留められるのは好い氣持ぢやない。夜遅く淋しい路を歩いて行つて、暗がりからいきなり白い猫に飛びつかれた經驗のある人は、今の惣太がそれだと思へば好い。

「——」彼は立止つて暗をすかし見た。

「あの——」暗闇から出て来たのは確に女だつた。みすばらしい身装で赤坊を背負つてゐる。遠くの街燈をたよりに、臃げながらにやつれた顔が見える。「お呼び止めて甚だ失禮でございますが、あなたは今あの宅からお出になつたと存じますが。」女は洋館を指し示した。

惣太はヒヤリとした。が對手は多寡が女一人だ。

「え、さうです。」平氣で返事をした。

「あれは一體どう云ふ宅でございますか。」女の問は意外である。

惣太は弱つた。

實は彼にもどう云ふ宅だか分らないのだ。

「どう云ふ宅つて？」彼は言葉を濁した。

「實は私の夫が今あの家にゐるのでございます。」女は鳥渡言葉を切つた。泣いてゐるらしい。

いえ、あの家へ連れ込まれたのでございます。あの女が連れ込んだのです。あ、悪魔です、あの女は。」おかみさんは到頭泣き出した。

惣太の好奇心は極度に緊張した。

「あの人があんたの亭主かね、四十位の年配の鬚を生やした——」

「お見かけになりましたか。お恥しい事でございます。いかにもあれが夫でございます。夫はあの女にすつかり誑されました、うつゝを抜かして居ります。貧しい銀行員の身で、無理工面をいたしまして、御覽の通り、私達には乞食同様の眞似をさして、あの女に注ぎ込むのでございます。自力で稼ぎましたお金なら、男の甲斐性と申す事もございますが、あの人は、「女は泣きぢやくりながら、雄辯に口説き立てる。」あの人は銀行の金を盗んだのでございます。前々から可笑しいとは思つて居りましたが。現在の夫が盗人とは思ひもありませんでした。女にうつゝを抜かして、人様のものを盗むとは何と見下げ果てた事でございませう。」

無論あたりに人は居なかつたが、かう度々盗人と云はれるのは、惣太にとっては有難くない事だつた。

「おかみさん、惣太は云つた。」尤もだけれども、いくらなんでも往來で盗人なんて大きな聲を出すのは止したらどうだい。自分の亭主の事ぢやないか。

「お言葉でございしますが、盗人はどこまでも盗人に相違ございませぬ——こいつあ手がつけられねえなと惣太は心の内で思つた。災難だと諦めて黙つて聞く事にしよう。——おかみさんは涙聲で訴へ續ける。

「今日も今日とて、又女から無心でも云はれたのでござませう。銀行からお金を持出したのでございませぬ。阿漕が浦も度重なれば何とやら、銀行の方でも氣がつかずには置きませぬ。先程宅へ課長さんが見えまして、これ迄の所は又の話として、今日持出した五百圓は明日の朝までに返へして置かねば、表沙汰にもなるかも知れんから、早く、費つて終はぬ中に、連れ戻すやうにこの事でございませぬ。私はこの子を背負まして、半狂亂で宅を飛び出しまして、心當りをあちこちと訪ね歩き、漸く居場所を突留めた所でございませぬ。けれども、私はどうもあの家に這入り兼ねるのでございます。女の顔を見るのが身を切るより辛いのでございます。それに遭はせて呉れるかどうか、それさへ分りませぬ。丁度お通り合せのあなた様、一生の願ひでございませぬ。何とかお力添へ下さいませぬでせうか。」

惣太はさつきからズボンのポケットへ手を入れて、紙幣束を握みながら、うづうづしてゐた。早くおかみさんの話がすめばいと、きつかけを待つてゐたのである。ちやんと五百圓耳が揃つてゐるかどうか分らぬが、兎に角これはあの男が銀行から盗んで來たものに違ひない。盗んだ金

を盗んだ譯で、考へて見りや、あいこで、この金は俺に授つたものだ。けれどもかうおかみさんに口説かれては見殺しにする譯に行かない。え、元々だ、返へしてやれ、——彼はかう思つたのである。思つたからには氣早の惣太、おかみさんの話に區切りがつくと、忽ち紙幣束を突きつけた。

「そいつは氣の毒だ。だがね、おかみさん、御亭主はもうその金を持つてゐないぜ。きつと女に呉れてやつたに違ひない。之からあの宅へ行つて、すつたもんだと騒ぎ廻つても、無事に戻るかどうか分らない、第一亭主の恥を曝すばかりだ。幸ひと私はこゝに少しばかり持合せがある。足りるか足りないか知らないが、課長さんに頼めば、どうとくして呉れるだらう。亭主の方の始末は俺が引受けるから、兎に角之を持つて、一度歸りなさい。」

一氣にかう云ひ切ると、惣太は驚くおかみさんの手に紙幣束を無理やりに握らして、踵を返すと、さつさと元來た道に引返へした。おかみさんは後を追はうともせず、ぼんやり立つてゐた。

惣太は元の洋館に引返へすと、忽ち窓を破つて飛び込んだ。中でキヤツと異様な叫聲が聞えた。はつと驚く惣太の前に、背の高い年寄の西洋人がピストルを突きつけて立つてゐる。その後ろに婆さんが震へてゐる。

「だれ！ だれ！」西洋人は叫んだ。

「こいつはいけねえ、あぶねえ〜。」惣太は手を振つた。

「早く、出て行く宜し。ピストル打つぞ。」西洋人は呟鳴つた。

惣太は毬の如く窓から飛び出した。何が何やら分らなかつたが、つまり惣太は依然の洋館の隣へ這入つたのだつた。

「驚いた、驚いた。ピストル打つぞと來やがつた。ドンとやられて耐るもんけえ。」

惣太は隣の洋館に近寄つた。窓から燈火が洩れてゐる。覗いて見ると、さつきの男が、チヨツキのボタンをはづした儘長椅子に長々と寝てゐる。

窓から飛び込むと、ピストルの恨みもある、惣太はいきなり男の頬を撲り飛ばした。男はムニヤ〜と云つただけで、又眠らうとする。二發、三發目に漸く男は起き上つた。

「痛いっ！ 何をするのだ。」彼は寢惚け眼をこすつて惣太の立姿を見ると、タチタチと後へ下つた。「誰だ！ き、君は！」

「誰も蜂の頭もあるもんけえ。鼻の下を長くしやがつて、ちつたあ女房の事でも考へろ。」

「あら、亂暴ぢやありませんか。誰なの？」

女の聲が後ろでした。振り向くと、肩の眞赤な洋服女、無論それが巴里の職業女の厚化粧の眞似とは、惣太知る由

もなかつたが、虫酔が走つた。
 「おや、出たな。化物め！ 指輪をくすねて靴の中へ入れやがつて、——惣太が尙も云はうとする、蒼くなつた女はツカ／＼と惣太の傍へ来て遮つた。惣太の袖を引きながら、低聲で云つた。

「誰だか知らないけれども、指輪の事は云はないで下さい、ね、きつとお禮するから、この様子を眺めてゐた男は、始めて腹を立てるのに氣が付いたやうに怒號した。

「どこのどいつだ。斷りなしに俺を撲つた奴は！」

「へん、憚りながら手前のやうな性質の悪い盗人にや、俺の名前は聞かされねえ。女に熱くなつて銀行の金をくすねるやうな卑怯な奴は、俺達の仲間にはやねえんだ。」

男の顔は忽ち蒼白になつた。ブル／＼震へだして、口が利けなかつた。

「態見ろ！——惣太は勝誇つて云つた。「手前は紳士の——惣太は鳥渡つかへた。彼には紳士に對する女性の言葉が急に出て來なかつた。「何とかのたつて、俺のやうに生活の爲めに盗みをするものより、餘程心は汚いのだ。へぼ盗人め、氣をつけやがれ。」

次の瞬間に彼の姿は消えた。

それから暫く惣太は稼ぎに出なかつた。攫つて來た指輪を宿主のけいづ買ひの助五郎に見せると、この老爺は踏み倒しやで、仲間から毛嫌ひされてゐるのだが、それでも十五圓に買つて呉れたので、生活のたつ間は稼ぎに出ないのが、惣太の定めだつたからである。

でも十五圓の金は一週間とは保たなかつた。

一週間後に彼は又出かけた。洋館には懲りたから、今度は日本家を覗つた。

下町で、鳥渡妾宅と云つた構への粹な見つきの家が無人らしかつたので、その家へ忍び込んだ。十二時は夙に過ぎてゐたのだが、奥の一間に近くと、燈火が洩れて、コソ／＼話聲が聞える。惣太は立止まつた。

女二人らしい。どうも聞き覚えのある聲なので、そつと襖の隙間から覗いて見ると、一人はまぎれもない先達で洋館にゐた女で、今日は和服でだらしない風で足を投げ出して坐つてゐる。驚いた事には、もう一人の女は例の暗闇から出て惣太を掻き口説いた女である。化粧などしてござつぱりとした身装をしてゐる。

「結局あたいの負かね。」

「さうともさ、お前さんが男を誑して金をとるには、好い身装をして、色仕掛けに限ると云つたからさ、あたいもふと逆らう氣になつて、汚い身装で泣き落しても男は誑せると云つて、つい賭になつたんだが、あゝ旨く行かうとは思はなかつたよ。」

「おや、と惣太は耳を傾けた。」

「あたいだつて、成功してゐたんだがなあ。あの男はあの晩ちゃんとお金を持つて来たんだものねえ。尤もあたいも拙かつたの。例のから貰つた指輪をはめてゐてね、あの男はそら嫉妬やきで、殊に例のと來ると、一層妬んでせう。それに何だか機嫌が悪くつてね、あとで考へれば悪い譯があつたんだが、その時は氣がつかずさ、指輪を見られちゃ拙いと思つてそつと抜いて靴の中へ隠しちやつたり、お酒を飲ましたり、そりや苦心したもんよ。所がいつの間にか御存じの泥坊が出て來て、おぢやんさ。おまけにあの男の前で指輪の事を云ひ出して困つたわ、それから男の金も銀行から盗んで來たつて事を知つてたのよ。」

「あら、銀行から盗んで來たの。」

「さうらしいの、あの泥坊が、銀行から金を盗んだ卑怯者めと云ふと、あの男は蒼くなつて黙つちやつたわ。」

「さう、それぢや、女房の事を云はなくて。」

「云つたやうだわよ、女房の事を考へるとかなんとか。」

「ぢや、あたいが云つた事なのよ。あの家に私の亭主が銀行の金を盗んで、女と一緒に居りますつて。」

「ぢや、それを本氣にして飛び込んで來たのね。」

「さうよ、きつと、」

「さうすると、銀行泥坊つて云ふのは、お前さんの作り事で、まぐれ當りだつたのね。」

「さうよ、オホ、、。」

「オホ、、、」

畜生！惣太は烈火の如くなつた。畜生、飛び出して恥を搔かしてやらう。だが待てよ、口ぢや逆もこの二人には勝てねえぞ、惣太はかう思ふと、鳥渡二の足を踏んだ。

「でも、あの泥坊はさつぱりしてゐて好い男だわ。あたい惚れても好い。」

惣太は鳥渡首を縮めて舌を出した。

「あたいも満更でもないわ、第一氣前がよし。」

「そりや盗つたお錢だもの。」

「でも、あゝ氣前好く行くもんぢやないわ。あたいお前さんの客がさ、お金を持つてゐるに違ひ

ないから、誑してやらうと構へてゐたけれども、機會がなくて駄目さ。暫く宅の廻りをウロついでるとあの泥坊が窓から這入つて、やがて出て来たから、鳥渡一狂言書いたのだけれども、眞逆三百圓呉れやうとは思はなかつたね。」

もう我慢がならなかつた。惣太は二人の前へ躍り出ようとしたが、まて、金を取り戻してやらう、もう少し様子を見た方が好い、と思ひ直した。

「兎に角、賭はあたいの負だから出すわよ。」

この家の主人らしい方が立つて、用篋箆をコト／＼さしてゐたが、やがて百圓紙幣を一枚出した。

「有難う。ぢや貰つとくわよ。三百圓も未だ持つてるのよ。」

女は手提袋から脹れた紙入れを出すと、その中へ百圓紙幣を押し込んだ。その時である。

「御用だ、神妙にしる。」惣太は襖越しに叫んだ。

二人の女はキヤツと云つて逃げ出した。

惣太はこの言葉がさう利目があるとは思はなかつた。第一この頃の警官がこんな舊式な言葉を使ふかどうかさへ、知らなかつた。たゞ講釋で聞き覺えた言葉を應用して見たのだつた。

惣太は落ちてゐた手提袋を拾ふと悠々と外へ出た。

「これで一、二ヶ月は樂に暮せるか。だが氣早と云ふ事は考へものだなあ。少し改良しなくちやいけねえかな。」

獨言を云ひ／＼、惣太は上機嫌で家路に歩いて行つた。

惣太の幸運

惣太は夜店が氣に入つた。

夏の夜店は嬉しきものである。今は電燈になつて終つたので、アセチリン瓦斯や、もつと湖つてカンテラや蠟燭の時代から見ると、風情は薄いが、さまざまの形に張られた小さな屋臺店が兩側に並んで、いろ／＼な色彩の品物が小兒や小兒らしい大人の購買慾をそゝる。薄暗い所に荷を据ゑた風鈴屋、小さな蟲籠を一杯つけた蟲屋の店が、明るい所に一杯拾げた水桶に、大小さまざまな美麗な金魚を泳がせた金魚屋と隣合つてゐるのも面白い。もしそれ輕羅を翻へして白い襟足を見せて行く町内の娘の二三人連などと擦れ違ひ、或は重合つて肩越しに香具師の口上を聞くなどは夜店最上の收穫であらう。

だから、惣太が夜店が好きになつたと云つて、別に不思議はない筈である。——尤も彼には娘の方の趣味はなかつたが——けれども、惣太は諸君の御承知の通り夜盗である。それに何とも手

のつけやうのない周章者で氣短である。それが毎日のやうに夕方になると宅を飛び出して、夜店を素見すと云ふのは少し可笑しく感じる。事實、氣早の惣太がポカンと口を開けて、長い間香具師の口上に聞き惚れたり、汚いバケツの中で縦横無盡に走り廻るセルロイド製の小さな魚に驚異の眼を見張つて、二十錢出して説明書を買つて、振假名を頼りに拾ひ讀みをしたり——無論、生きた魚に引張らすべしと讀み下すが早いか破つて終つたが——玩具店の前に半時間も立つて見たりしたのはどう云ふ理窟か、鳥渡説明がつき難い。

尤も氣早の惣太は飽くまで氣早やの惣太である。何度しくちつたか分らない。

一度は外の店と鳥渡かけ離れた所で、五六人の人が何かを取圍んで覗き込んでゐるので、掻き分けるやうにして割込むと、小僧が蹲んでしきりに反物を擴げてゐた。すると、その前に蹲んだ紳士體の男が横柄に云ふのだ。

「いくらなんだつて、お前それぢや安過ぎるぢやないか。」

「へい。」小僧は神妙である。

「僕もかう見えてもこの道のことは少しは知つてゐるが、品物は立派なものだ。ざらにある反物とは違ふ。」

「へえ、そりやもう本物に違ひないので、へえ。」小僧はピヨコンと頭を下げた。

「それがお前、」紳士はかさに懸るやうに、「市價の三分の一にも足りない値で賣らうと云ふのは可笑しいぢやないか。怪しい品だらう。」
「冗談ぢやありません。旦那、小僧は悲しうな聲を出した。之はお店が破産しちやつたので、私達奉公人が給金代りに品物を貰つたんです。私は早く金にしたいので、かう安く見切るんです。」

「どうだか、」紳士は未だ疑ひを晴さない。「大方店の品をくすねて来たか、それとも盗んで――さつきから、ぎりぐり歯軋りをして、横柄な紳士面を睨んでゐた惣太は、盗んだ、と云ふ言を聞くと、憤然として呶鳴つた。

「おい、い、加減に止さねえか。唐變木め。云はして置きや、可哀さうに小僧さんを捕へて、くすねたの盗つたのと、やい手等に分らねえだらうが、一體、盗んだものを往來傍でかう大勢の前で公然と賣れるもんかどう考へて見ろ。盗んだものなんていのは――」
勢ひに乗じて、うっかり自分の商賣を話しさうになつたので、惣太はあわて、口を叩へながら、小僧の方を向いて云つた。

「かう、小僧さん、こんな唐變木にや構はないで、早く商賣をしねえ。」
紳士は惣太の勢ひに吞まれたか、それとも對手にするのが嫌だつたのか、それつ切り黙つてや

がてこそくと姿を隠して終つた。反物は飛ぶやうに賣れた。

惣太は好い氣持になつて方々素見しながら、横町を曲ると、思ひがけなくそこに小僧を従へて立つてゐた。惣太は忽ち尻を端折つて、草履を脱いで懐中に入れた。

程にもない瘦せた拳固を固めて待つてゐると、傍へ寄つて来た紳士はびよこんと――

「旦那、さつきはどうも有難うございました。お蔭で大繁昌で、」
「――」惣太はあつけに取られて、目をパチクリした。

「旦那、有難うございました。小僧も禮を云ふ。」
「な、なんだお前達あ。」
「御存じないのですか。」

「知るもんか。」
「あつしや、さくらですよ。」
「何でい。さくらたあ。」

「つまり、この小僧と共謀なんで。あゝ云つて客を釣んできさあ。」
「あゝ、さうか。」

平生の惣太なら忽ち怒る所だが、どうしたのかひどく感心して終つた。と云ふのは一週間程

前、彼は矢張り、夜店の盡れの淋しい所で、一人の婆さんを四五人の人が取り巻いてゐるのに遭つた。その婆さんは神田の真中で浦和へ行く道を聞いてゐるのである。

「浦和、そいつは大變だ。」一人の男が云つた。「とても歩いちゃ行かれない。一人の男がつけ足した。」

その様子を見ると、惣太は忽ち腹を立てた。

「何でい、大變で候の、歩いちゃ行かれないのだつて、婆さんはどうもならねえぢやねえか。う、その、うなんとか云ふ所は汽車に乗れば好いんだらう。だからさ汽車賃を出してやりや好いぢやねえか。」

かう云つて、惣太はいくらかの金を掴み出して老婆に與へた。それで外の人もそれ／＼金を出したのだつた。例によつて惣太は好い氣持である、意外にも彼は老婆と一緒に巡査に捕つて交番へ連れて行かれた。

民衆運動の勇者も、交番となると意氣地がなかつた。惣太はペコ／＼お辭儀をした。その時である、巡査が彼に

「お前はさくらだらう。」と云つた。

惣太は眞面目な顔で、ピヨコンと頭を下げながら、

「冗談云つちやいけません、旦那。あつしは人間ですぜ。木ぢやありません。」と答へたのだ。巡査は失笑して間もなく、彼を放免して呉れた。そのさくらの意味がやつと今分つたのだ。

「へえ、さうかい、さくらかい。」惣太は機嫌が好い。

「旦那も中々調子が好うがすぜ、紳士體の男は癒てた。毎晩ああ云ふ風にやつて呉れませんか。」「まあ、止さう。」

穩かに云つて、惣太は別の事を考へて居た。いつでも社會的に——かう云ふ單單で概念的な熟語は彼は知らなかつたが——正義を行つたと思ふ事が、極つて惡意のある第三者に利用されてゐると云ふ事が何となく悲しかつたのだつた。

或晩例によつて夜店を素見して、暗い横丁へ曲つた。どうも度々暗い横丁へ曲るので恐縮だが、之は惣太の下宿である故買者の助五郎の宅へ歸る順路だつたし、それに一體惣太の商賣が兎角暗い横丁で事を起す性質なので仕方がない。それに今までの出來事は云はゞ挿話に過ぎないが、之は話の本筋に關係があるので省く譯に行かない。で、もう一度暗い横丁へ曲らして貰ふ。暗い横丁を少し歩いて行くと、ポーンと草履に觸れたものがある。惣太は思はず立止つて、拾ひ上げた。

惣太は直ぐ後悔した。拾ひ上げたのは大變な間違だと云ふ事を發見したのだ。と云ふのはそれ

は可成ふくらんだ墓口だつたのだ。盗人が墓口を拾つて困つたと云つても誰も本當にしやしない。所が惣太と云ふ男は不正な事が大嫌なのだ。と云つて盗みをするのは可笑しいが、彼は盗みだけは正業だと思つてゐる。それは彼の育つた環境、つまり盗人の子と生れて、両親に別れるなり、盗人の親方に拾上げられ育てられて、殆ど教育を受けてゐない爲に起る、一種の社會意識の錯覺で、盗みは生計を立てる爲に必要な事だと深く信じてゐるのだ。それだから盗みだけは別で、他の不正、例へば拾つた金を横領するなどは非常な罪惡だと心得てゐる。

で、彼は金を拾つて困つたのだ。

今は拾つた物は交番へ届けば好い事になつたが、その頃は警察へ持つて行かねばならん。惣太はいくら正業だと思つてゐても、盗みは天下の法度だから、惣太も警察は恐い。況や住所姓名を名乗らねばならぬに於てをやだ。惣太は思案に餘つて、前後を見廻して、拾つた墓口を又捨てようとした。所がその時にすつと彼の傍を通り抜けた人がある。

そこで、はつと思ひついた惣太は忽ちその人呼び止めた。

「もしく、落し物ですよ。」さう云つて彼は墓口を突出した。

不意にキラリと光が眼を射た。思ひがけなく彼は懐中電燈で惣太を照らしたのである。「私ぢやない。」彼は答へた。

「そ、そんな事はない、惣太は一生懸命である。暗い上に、向ふから照らされてゐるので對手の風體は少しも分らないが、こいつを外しては墓口の處分に困る。」あ、あなたのです。さう云はな

いで受取つて下さい。惣太は無理やりに對手の手の中に墓口を押し込むとトットと逃げ出した。

それから二三日経つた晩、惣太はヒョッコリ仲間の集つてゐる飯屋に顔を出した。すると、そこにゐた四五人が今まで彼の噂でもしてゐたらしく、一齊に彼の方を見たので、惣太は少し照れた。

「イヨウ、御本尊がお出なすつたぜ。」かまきりの由公が大きな聲を出した。

「惣兄、近頃顔を見せねえなあ。」こゝでは禿の勘兵衛の次に据ゑられるむつりの吉次が珍らしく愛想が好い。

「どうもすみません。御無沙汰しやした。」何だか様子が變で、持ち上げられるやうな氣がして、惣太はくすぐつたくなつた。

「どうしたんだい。好いので出来たのかい。」由公が黄色い聲で聞く。

「あゝ、惣太は澄して答へる。

「へえ、かまきりと渾名を取つただけ、由公は細い頸を愈々長くしながら、「そいつは豪勢だ。素

人かい、それとも商賣人か。」
 「素人も商賣人もないさ。夜店と云ふ奴さ。」
 「ハ、ハ、ハ、こいつあ旨くやられた。夜店は好かつたね。さう云へば毎晩夜店の素見しだつてね。」

「うん。」

「商賣替へかい。」

「商賣替へ？」惣太は首を捻つてゐる。

「するんぢやないか。」

「冗談云ふねえ、惣太はもう險悪だ。あんな卑劣な事をするもんかい。」

「卑劣は好かつたね。由公は面白さうである。ぢや、夜稼ぎは卑劣ぢやないのかい。」

「あゝ、惣太の答は簡單である。」

「どうして？」由公は追究する。

「どうしてつて、お前、そつと寢静つた所をよ、起きないやうに、驚かさないうやうにして、別に暮し向きには差支へないやうな一品を頂戴して呉るんだ。罪にやならないさ。」
 「ぢや、なんだつてお上でとつ捕へるんだい。」

「捕るもんか。惣太は力んだ。」

「そりや、お前は運が好いから捕らないのだが、俺達の仲間では捕つて、囁い所へ入れられたのが澤山あるぜ。」

「そりや、慾張つて餘計盗るからさ。そして酒を飲んだり、女に構つたり、贅澤をするからさ。」

「なる程、そんなものかなあ。由公は感心したやうな聲を出した。」

「さうとも、むつとり吉次が口を出した。惣兄の云ふ通りだ。手前たちは盗り過ぎるのだ。」

「だがね、吉兄い、由公は云つた。「さう一概には云へねえぜ。いくら少く盗つても捕る時には捕るぜ。」

「うん、さう云ひやさうだ。」

「例の番町の鬼岡なんぞ、なんだぜ、這入りやどろしても捕つて終ふからねえ。」

「うん、鬼岡にや這入れねえ。吉次は大きくなつた。」

彼等は着々として惣太を釣つて行くのだ。彼等は何にも知らない惣太を用心堅固の鬼岡の邸に這入らして、捕らさうと云ふのだ。鬼岡と云ふのは有名な高利貸で、番町邊に宏壯な邸を構へ、吝嗇な彼は雇人も置かず一人で住つてゐる。その代りに一丈何尺と云ふ煉瓦塀を周圍に巡らし、あらゆる機械力を利用して、邸の内外を固めてゐるので、とても普通では忍込めない。彼等

の仲間なつかは、盡ことごとく失敗しつぱいしたのだ。そこへ惣太そうたを向けようと云いふのである。之これには譯わけがある。先まづ第一だいいちには惣太そうたが兎角とつが捕つかまらないのを自慢じまんをするのが癪さかに障さる、そこへ持つて来て、最近さいきんに彼等かれらの首くび領株りやうぐの禿かぶの堪兵衛かんとべを凹へこました、それで彼かれを難攻不落なんこうふらくの鬼岡おにが耶やへ向むかはして、失敗しつぱいさせて大きな顔かほの出來できないやうにさせたいのだ。もしひよつと彼かれが成功せいこうしたら、何か旨うまい汁じゆが吸すへやうと云いふものだ。どつちへ轉ころんでも損そんはない。そこで彼等かれらは謀まわし合あわせて、惣太そうたを引ひかけたのだ。果はたせる哉や、惣太そうたは黙だまつてゐない。

「何なにだつて、鬼岡おにががどうしたと云いふんだい。」
「鬼岡おにがにや這入はいれないと云いふ事ことさ。」由公よしこうが答こたへた。
「どうして？」

「どうしてつて、お前めま、とても用心ようじんが酷きましいのだ。あれこそはと思おもつたが皆みないけない。お前めまだつて這入はいれやしないよ。」

「何なにだと、どうしてお前めまにそんな事ことが分わかる。」
「そりや、お前めまはいゝ盗人ぬすこさ。どこへでも造作ぞうさなく這入はいるさ。だが、あすこだけは駄目だめだ。」
「冗談じやうだん云いふねえ、面白おもしろくもねえ、這入はいれねえつて事ことがあるものか。」惣太そうたはブン／＼として來きた。
「さうかい。」由公よしこうは逆さからはない。

「だが。」惣太そうたは急きふにも／＼しながら、「何なにかい、犬いぬはゐねえかい。」
「ハ、ハ、ハ、成程なるほど、お前めまは犬いぬが嫌きらだつたね。」由公よしこうは笑わらつた。「大丈夫だいぢやうぶだよ。鬼岡おにがの爺おやはしみつたれで、奉公人ほうこうにんも置おかない位くらいだ、犬いぬなんか税ぜいはかゝるしよ、食くふものは食くふし、そんな無駄むだなものは置おきやしねえ。」

「さうかい、ぢや俺おれが這入はいつて見みせらあ。」
「ほんとかい。」
「うん。」

「止よしたが好いいぜ。」吉次きちじが口くちを出だした。「惣太そうた、捕つかまるに定きまつてるから、」
「捕つかまるもんか。」惣太そうたは力りきんだ。

「ふん、ぢや、やつて見みるが好いいや。」
「やつて見みるとも、だが、無事ぶじに這入はいつたら、お前達めまたちはどうする。」
「さうさ、無事ぶじに一品ひとしなでも持もつて歸かへつて來きたら、惣兄そうあにい様々さまつて三拜さんはい九拜くはいしてやらあ。」吉次きちじはにや／＼笑わらひながら云いつた。
「よしつ、その言葉ことばを忘わすれるなつ！」惣太そうたは意氣天いきてんを衝つくと云いつた形で嘯どな鳴なつた。

翌晩、惣太は鬼岡の庭へ忍込んだ。
 一丈何尺と云ふ煉瓦塀、而も頂上に硝子の片の一杯植つてゐる高塀をどうして彼は越えたか。もし高い塀を飛越さなければ這入れないと思つてゐる人があつたら、その人に一言して置く。塀のどの部分にも這入口がなければ無論飛越すよりない。けれども人の住居である以上出入口がない筈はない。御用聞、訪問客、或は主人自身の出入口がなければならん。例へ御用聞や訪問客がない迄も、少くとも特種郵便の配達夫はどうしても玄関まで這入らねばならん。惣太は配達夫の後をノコノコついで行つたゞけである。

一旦這入つて終ふと、高い塀があると云ふ事は身を隠すのに非常に都合だ。彼は毫も往來を通るものに懸念する必要がないのだ。惣太は此のもと公使館かなんかだつた。だゞつ廣い荒涼たる庭に夕方から深夜まで數時間忍んでゐたが、十二時過ぎ、そつと草叢を按出て、用心深く警鈴の電線を切り放して、石の迫持の下に固く締つてゐる鐵の扉をギイと開けると、由公始め二三人の仲間を引入れた。之は彼の成否を見届ける證人なのだ。

惣太は無言で之等の仲間を従へて、古ぼけた、然しがつしりとした洋館の一角にかゝると、いつの間にも用意したか、大きな石でガチャリと窓を一撃した。
 四十七士が吉良上野介の邸を夜討にかけた時は、堂々と太鼓を鳴して、表門を叩破つたと云

ふが、今時盗みに人の宅へ這入るのに、窓を叩破ると云ふ法がない。防ぐ方でもそんな法がないと思へばこそ、窓をゆすぶつて見たり、こちたりすると直ぐ鈴が鳴るやうにしてある。所が生憎、こんな風に突然叩破られると、鈴を鳴らす装置も一緒に壊されて終ふ。尤もその代りガチャンと大きい音はするが、鬼岡の爺さんは寢室で好い氣持に寝てゐて、窓や扉に鳥渡した異狀があれば忽ち部屋も割れよと鈴が鳴るのを待つてゐるので、ガチャンと大きい音がしても寢室から餘り離れてゐるので聞えない。義経が無茶で一の谷を攻落したやうなものだ。惣太はあつげに取られてゐる由公外二三名の僚友を残して、ひらりと破れた窓から飛込んだ。

這入つた室は少しも使はれない室らしい。埃が堆高く積つて、何一つ盗るものはない。よしあつても、惣太はこんな手近な所から盗る氣はない。懐中電燈を照らしながら扉に近くと、錠が下りてゐる。惣太はドシンと身體をぶつつけた。三度目にミリミリと扉が破れる。之にも報知機がつけてあつた筈だが、幸運にも鳴らない。惣太は廊下に出た。どうも惣太のやり方は亂暴だ。彼はきつとこの大きな家に鬼岡老人一人しかゐないと聞いて高をくゞつてゐるのだらう。

廊下を出ると、流石に足音を忍ばせながら、そろ／＼と奥まつた所へ進んで行つた。歩きながら惣太は内心安々と成功したので得意がつてゐた。が、それは早計だつた。ものゝ十間と行かない内に、彼の足に觸れた廊下の板がギイと少し下つた。はつと思つて足を引いたがもう遅い。あ

つと云ふ間もなく、天井から得體の知れぬ白いものがフワリと下つて来た。
 惣太はヒラリと後に飛び退いて、懐中電燈で照らすと、思はずよろめいた。天井から下つて来たのは人の形をした化物で、髪を振り亂した顔は眞白な眼鼻のない、のつぺらぼうである。大概ならこゝでキヤツと云つて逃げ出す所である。だが、惣太は危く踏止まつて、彼の方へヒヨロヒヨロ寄つて来る化物の横顔を張り飛ばした。途端に家中に燈火が煌々と點いて、電鈴が數ヶ所で鳴り始めた。化物の顔の中には電線が仕込んであつて、撲くると共に電路が閉ぢて、電流が通じ、電燈のスイッチが這入る事になつてゐたのだ。
 惣太が餘りの意外さにポカンとしてゐる間に、寢臺で跳ね起きた鬼岡老人は忽ち指頭を働かして、壁のボタンを押した。すると不思議な事が起つた。

それはあの燈臺で見えるやうな現象で、凡そ十秒直き位に、家中の電燈が明滅するのである。これには惣太も面喰つた。いつそ闇なら、ぢつと隠れて敵の来るのを待つてゐられる。明るければ適當な方面へ逃げ出す事が出来る。けれどもこの十秒置きの明滅は始末が悪い。明るくなつたと思つて見當をつけようとすると、パツと消える。闇にまぎれた積りでゐると、パツと點く。一對敵がどこに居るのやら、どこへ隠れて好いのやら、どこへ逃げて好いのやら、無我夢中である。所で電燈は明滅しながら、順次に一室宛消えて行くのだ。消えた方の室へ逃げれば永久の闇の

中に潜めるのだが、丁度尖つた筒の尖から廣い籠に這入つた蟲が、廣い出口廣い出口と漁つて、元の入口を尋ね出す事の出来ない錯覺のやうに、惣太は電燈の明滅する度に、明るい方へと引摺られて、後へ下れない。その中に到頭、異様な一室へ誘き寄せられた。と、前後左右から金網が降つて来て、惣太は鼠落しに落ちた鼠のやうに、すつかり捕虜になつて終つた。

「畜生！ 畜生！」と連呼して彼は一生懸命に金網を揺つたが、みじん動きもしない。彼はたうとう捕つたのだ！

惣太は口惜くて耐らなかつた。警察、獄屋、そんな所を思ふのも悲しかつたが、それより、由公始め外の奴等はどう思つてゐるだらう。電鈴の響、電燈の明滅、そんな事で彼等はもうすつかり自分の失敗した事を知つたらう。今頃は手を叩いて喜んでゐるだらう。あゝ畜生！ 畜生！ 惣太は地團駄を踏んだ。

所へのそり／＼と足音がした。鬼岡老人が這入つて来たのだ。

彼はダブ／＼の寛衣を着て、舟のやうに大きいスリツパをそり／＼と引摺りながら、大きな骨張つた手に、柄のついた大きな凸レンズを持つてゐた。脂でギラ／＼光る禿頭の前額に一握りの縮毛がトグロを巻いてゐる。年の割にふくりと脹れた頬を一層脹らして、口をへの字に曲げながら、眼尻を下げて、嬉しさを嚙殺すと云ふ風で、鼠を取つた猫のやうに獲物の傍へそり／＼

と近寄つた。

「畜生！ けだもの！」惣太は鬼岡老人の姿を見ると、噛みつくやうに叫んだ。

「よし、よし、好い子ぢや。」鬼岡老人は獲物が元氣が好い程、嬉しいのである。「けだものは畜類な事は昔から極つとるのぢや。さう暴れてはいかん。」

「何だと禿頭奴、惣太は眞赤になつた。「早くこの籠から出しやがれ。愚圖々々してゐると只は置かないぞ。」

「元氣ぢやな。」老人は恭悦してゐる。「だが、永い年月にこの網まで來たのはお前を入れて、たつた三人ぢや。外の奴は窓でしくじるか、扉で鈴を鳴らすか、化物を見て膽を潰すのぢや。お前はそれでも勇氣がある。」

「や、喧しいやい。禿鬼め、俺を、ど、どうしようていんだ。」

「ハ、ハ、ハ。禿鬼とは怪しからん事を云ふ奴ぢやな。ハ、ハ、ハ。」

「狂氣奴、」流石の惣太もこの老人には齒が立たない。彼の貧弱な語彙ではもう云ふ事がなくなつた。「唐變木め、赤禿め。」

「どれ、元氣な若馬の顔をとつくり拜見する事にしよう。」

鬼岡老人は委細關はないで、大きな凸レンズを眼の前にずつと突出して、眼尻に皺を寄せて、

惣太の顔をちつと眺めた。暫くすると彼は呻り出した。「うむ、似とる、さうだ、違ひない。」

「な、何を云やがるんだい。」惣太はもうぐつたりとなつて、口を利くのが大儀だつたが、情性でブツ／＼云つてゐた。

「うむ、さうに違ひない。」鬼岡老人は獨言のやうに云ひ續けてゐたが、「おい、若い、お前さんは俺を知らんかい。」

「知るもんけえ。」惣太は鼻で返事をした。

「お前は何と云ふのだ。」

「惣太よ。」

「商賣は何だ。」

「盗人よ。」

「ふん、やはり盗人か。」鬼岡老人は暫く感心してゐたが、「お前は神田の夜店へ行くぢやらう。」

「行くよ。」それがどうしたんだと、惣太は老人の顔をちつと見た。

「何か拾つたらう。」

「何を！ 可笑しな事を云ふねえ。拾つて悪いか。俺は横領なんかしないぞ。」

「ふん、盗人の癖に何故拾つたものを自分の物にしないのぢや。」

「俺は不正な事はしねえ。」
 「可笑しいな、盗人は不正ぢやないのかな。」
 「盗人は商賣さ。商賣なら仕方があるがねえ、だが、盗んでも俺一人がけちに食ふだけだせ。お前見たいに慾張つて溜めやしねえ。」
 「ふん、中々面白い奴ぢや。やつぱり一流の達人ぢや。」
 「俺や、劍術なんか遣はないぜ。」惣太はあわてゝ云つた。
 「愈々話せる奴ぢや。所でお前は何故拾つた金を通行人にやつたのだ。」
 「何故つて、横領するのは嫌だし、と云つて警察へ届けるのは尙嫌だし、いつそ元の所へ捨てようと思つてる所へ、通りかゝつたから押しつけて終つたんだ。——だが、お前さんどうしてそんな事を知つてるんだ。」
 「お前の押しつけたのは俺だつたんぢや。」
 「えつ、ぢやお前さんだつたのか。」
 「さうぢや、二十何圓かあつたよ。天の與ふる所と押戴いたよ。」
 「ぢや横領したんだな。」
 「まあ、さうだ。」

「ぢや、お前さんは俺と同じ盗人ぢやないか。」
 「さう云はれると面目ない。兎に角、その籠から出して進ぜよう。」老人が壁のボタンを押すと、籠はスウツとどこかへ隠れて終つた。
 「あゝ、ひどい目に遭つた。」惣太は伸をした。
 「窮窟ぢやつたかな。」老人は氣の毒さうに云つた。「ぢやかうしよう。この間の臺口には二十三圓十五錢這入つとつたから、改めて半分宛として、お前さんに十一圓五十七錢五厘上げよう。」
 「俺そんな金はいらねえ。」惣太は斷つた。
 「でも——」
 「いやいらねえ、主義に關るからなあ、惣太は例の如く好い氣持になつた。その代りに何かお前さんのものを一品下せえ。」
 「品物？ 十一圓五十七錢五厘の値打のある品物かの。」
 「そんな半端はいりませんや。何だつて好いんです、一品。」
 「ふん、ぢや、このスリツバはどうぢや。」彼は足許を指した。
 「そいつは御免だ。もう少し氣の利いたものを下せえよ。」
 「ぢや、思切つて俺の湯呑茶碗を進ぜよう。少し缺けてゐるが。」

「缺けた湯呑茶碗も有難くないな。」
で、結局惣太は鬼岡老人の居間に案内して貰つて、そこに並べてあつた数々の骨董品や、貴金
屬類の素晴らしい品々の中から、やつとの事で古びた十八世紀頃の、紅茶茶碗程の大きさのある
懐中時計を貰ふ事にした。別れ際に鬼岡老人と氣早の惣太とは、百年の知己でもあつたやうに
固い握手を交した。夜はほのふくと明けかゝつてゐた。惣太はスタ／＼と歩きながら、むつつり
吉次とかまきりの由公の前へ、古びた懐中時計をポンと抛り出す時の痛快さを考へて、ゾク／＼
してゐた。

「だが、惣太は獨言を云つた。あの時、あの拾つた金を懐中へ入れて終へばそれつ切り、今朝は
どんな事があつても歸れつこねえんだ。して見ると、矢張り不正をやらねえと云ふ事は中々好い
もんだなあ。」

惣太の喧嘩

惣太はたうとう喧嘩を吹つかけた。對手は禿の勘兵衛である。一體氣早と渾名を取つた惣太が
今日まで辛抱してゐたのはよく／＼の事で、大風な陰險な（こんなむつかしい言葉は惣太は知ら
なかつたが）それでゐて下劣な禿は顔を見ても精に障るのだつたが、斯道の——と云ふのは盜
む事だが——先輩と思へばこそ、唾を呑み込んで、云ひたい事も云はずにゐたのだ。名にし負ふ
氣早の惣太だ、喧嘩の素早い事は鳶の油揚を攫ふが如く、嘗ておでんやの前を通ると、小男が荒
くれ男に胸倉を執られて、眼を剝いてゐるのが眼に這入つたから耐らない、盗みこそすれ、正義
觀念の人一倍強い惣太だ、忽ち大男の腰に喰ひついた。大男があつと悲鳴を擧げる隙に、小男の
方は脱兎の如く逃げ出したが、逃げ遅れた惣太は二つ三つぶん殴られた末、逃げた小男の勘定を
拂はされた。つまり惣太は食逃げを助けたのである。それ以來見知らずの喧嘩には成べく飛び
込まないやうにした。ある時惣太は友達に煽てられて、魚釣を試みた事がある。雑魚でも一匹に

つき十圓と云ふ懸賞つきだつたが、二分の間に七遍竿を上げて、四遍餌を取り替へて、八遍目に枯枝を釣上げると、忽ち残つた餌を河の中へ蹴込んで終ひ、竿でチャブ／＼と引掻き廻した。隣で釣をしてゐる人が怒ると、あつと云ふ間に餌同様河の中へ蹴込んで終つた。が、生憎釣人には餌と違つて手と云ふものがあつたので、素早く惣太の帯を掴んだから耐らない、惣太もズル／＼ボシヤンと河の中へ陥つた。所が又生憎な事には惣太は泳ぎを知らなかつたので、散々水を呑んで、三日間故買の助五郎の二階で呻吟した。それ以來彼は河の傍では喧嘩をしない事にした。かうしてだん／＼喧嘩の出来る範圍は狭まつて来たが、三度の飯の次ぎに止められないものだつたのだ。その惣太が辛抱を重ねて来たのが、些細な事から、たうとう爆發して終つたのだ。

「何をっ！ 禿勘め、てめえは……てめえは……」

惣太は餘り大きくない拳固を突き出して、敦固くのだが、一體口の滑りの悪い彼はかう昂奮すると、愈々口が利けない。

「何だと、あわて者め！」

禿勘は額の抜け上つた赤ちやけた頭から湯氣を立て、頬の肉をピク／＼させて、落着かうと焦りながら云ふのだ。

「何を口をもぐ／＼させやがるのだ。早く云はねえか馬鹿め！」

こゝはかう云ふ仲間の集る一膳飯屋と云つた所で、土間の上に薄暗い電燈が一つある切り、亭主を始め二三人の仲間達は止めようとせず、ニヤ／＼笑ひながら見物してゐる。「かう、俺はな」惣太は云つた。「かう見えても一本立だ。けちな眞似はしねえ。てめえはなんだ。女房から伴まで遣やがつて、泣言を並べたり、出鱈目を云つたり、へん面白くもねえ、卑怯な眞似をして、人様のものを騙して盗りやがる。憚りながら惣太さまは——」

「夜になるとノソ／＼と野良犬のやうに歩いて」禿勘は遮つた。「ピク／＼もので人様の家へ這入るのか。」

「だ、誰がビク／＼もので這入つたい。俺はいつでも正々堂々と這入らあ。」

「さうしちや、金の塊の積りで國旗の頭を盗んだり、手提金庫だと思つて臺所のテンピを盗んだりか。」

「何をっ！」惣太は眞赤になつた。「稀にや間違はい。大きなお世話だ。だけど、憚りながら俺はいつでも一人だぜ。てめえみたいは大勢がりのペテン師とは違はあ。」

「俺はな手前見たいな労働者たあ違ふのだ。紳士だぞ。こゝんの所を働かすのよ。」勘兵衛は頭を指した。

「へん、その禿頭をか。」

「さうよ」禿勘は苦笑した。「頭は禿げてゐても、こいつを一度働かせりや、忽ち何百兩よ。手前見たいなケチな小盗人と一緒にされて耐るけえ。」

「なんだと、ふん、餘計に盗るのが偉えと極つちやいねえぞ。俺なんざ、喰ふだけありやいゝのだ。そんなに盗つちや盗人の冥利が盡きらあ。盗らうと思や、いくらでも盗あ。」

「おや、ていさうな事を云つたな、口惜しきや、一度に何百兩と盗んでみろ。」

「さう云ふ手前も大風な事なあ、云へた義理ぢやねえぞ。手前や、變装が旨いの、頭を働かすのだつて、一體何度喰れい込んだのだい。へん、俺様なんざ、一度だつて捕つたこたあねえんだぜ。えいおい、前科者たあ違はあ。」

これは確に禿勘の急所だつた。惣太は古今稀なあわて者で、盗みに這入るのは行當りばつたりだつたが、どう云ふものか幸運にも一度も捕つた事がないのだ。惣太は何よりもそれを自慢にしてゐた。

禿勘がぐつと詰ると、惣太は圖に乗つた。

「態見ろ、手前などはあり餘つてゐるのに、その上盗んぢや、女房子を持ちながら、詰らねえ女にひつかゝつたり、酒に喰ひ酔つたりしやがるから、捕るのだ。馬鹿め！」

「うるせい」愈々急所を突かれるので、流石の禿勘もしどろもどろで、たうとう立上つて拳固と

振り上げた。「しやら臭せえ、小僧め、さあ來い、對手になつてやらあ。」

氣早の惣太、何條猶豫すべき、忽ち禿勘に飛びついたが、仲間の者に引戻された。

「惣太、いけねえ、勘兵衛にや手は出せねえ。」

仲間の一人が云つた。

「な、何だと」惣太は敦固いた。

「手前や未だ驅出した。俺達や勘兵衛にや厄介になつてゐるのだ。逆つちや爲にならねえ。まあ、今日の所は我慢しろ。」

惣太は齒軋しながら、たうとう仲間を抑へられて終つた。

惣太は口惜しくて耐らなかつた。こんな下劣な卑怯な男が、只自分より年が上で、従つて早くから盗人をしてゐると云ふ事だけで、仲間を幅を利かし、自分のやうな潔白な——どうも之は可笑しいが、惣太は眞面目にさう考へてゐた——外に生活の道を知らないのが盗みはしてゐるもの、少しも貪らない者が下手に出なければならぬのが業腹でならなかつた。彼はどうかして仲間を鼻を明かしてやらねばならぬと考へた。

惣太はむしやくしや腹で、そこを飛び出すと、涼しい夜の街をうろつき廻つた。残暑の酷しい

時だつたが、流石に十二時を過ぎると、起きてゐる家は少かつた。惣太は暗い横丁から横町へと潜つた。何でも大きな仕事をしようと思ふので、大きな家を物色したが、生憎なもので、大きな家は大抵洋館だ。惣太は前に洋館で懲々した事があるので、這入らない事にしてゐる。そのうちに運好く日本建の大きな家にぶつかつた。大嫌な犬がゐなかつたので、忽ちその家へ飛び込んだ。

いつもの惣太なら何か一品で済ますのだが、今夜は禿勘にケチな小盗人と云はれた腹立まざれだから、そこいら中を引掻き廻して、時計、指輪、鎖其他從來の經驗に徴して、金目になると思ふものを持ち切れない程抱へて、雀躍しながら、故買の助五郎の二階へ引上げた。

翌日の夕方だ。惣太は浴衣の尻を端折つて、例の仲間の集會所へ、昨日の鬱憤を晴さうと、助五郎に値踏をして貰つた數々の獲物を、しつかりと懐中に入れて、足どりも軽くスタ／＼と歩いて行つた。

ある横町を曲ると、

「ちよいと、惣太さん。」と艶めかしい聲がする。

一體惣太は女が嫌ひだつた。惣太は無學で字も碌に讀めず、従つて資本主義に楯つかうと思つ

て盗人をしてゐる譯ではなく、又女なるものが、資本主義の弊害を助長する上に於て、どんな位置を占めてゐるのか、そんなむづかしい事は一向解らなかつたが、兎に角、女が嫌ひだつた。一つは仲間の多くが捕へられて、暗い所で呻吟するのはみんな女の爲だと信じ切つて、多少迷信的に女を恐れてゐた故かも知れない。只さへ女が嫌ひな所へ、往來で呼び留められて、酷い目に會つた事があるので、彼はひやりとした。

「惣太さんてば、聲は近附いて来た。」

見ると禿勘の女房だ。年増振りの好い上に辯口が達者で、仲間でも姐御と立てられてゐるの

だ。ぺつ、こいつも敵の片割だ。

「何でい。」

「大それた威勢がいゝね。」

「大きなお世話だ。」

「何がさ。」

「何でもいゝや。うるせい！」

「あら、惣太さん、何を怒つてるのよ。」

「手前の知らない事よ。」

「亭主の事？」

「うん。」

「昨夜、亭主のと喧嘩したんだつてねえ。」

「それがどうしたつてえんだえ。」

「變に搦るわねえ。あたしやお禮をしようと思つてるんだよ。」

「えつ！」

「そんな可笑しい顔をしなくつてもいゝさ。あたしやお禮がしたいんだよ。」

「どうも分らねえ。」

「血の巡りが悪いねえ。あたしやほんたうに亭主の奴には愛想を盡かしてゐるのさ。」

「さうかい。」

「それでお前さんが昨夜散々云つたていから、よく云つて呉れたと喜んでゐるのさ。」

「ふん。」

「こんな所で立話も出来ないぢやないか。惣さん交際つてお呉れよ。」

「禿勘の女房は明るい方へ促すやうに歩き出した。惣太は狐につまゝれたやうな恰好でフラ／＼

ついて行つた。二人は薄暗い支那料理の暖簾を潜つた。割に空いてゐたので、隅の方へ腰をかけ

て焼賣を誂へると、低聲で話出した。

「ねえ。惣さん。あたしやつ／＼嫌になつて終ふ。だつて卑怯ぢやないか。人を誑してお金を盗るんだものねえ。」

「さうよ、だから俺も云つてやつたんだ。惣太は得意である。」

「それにね、あの老爺と來ちや道樂者で始末に了へない。そんなこんなであたしや苦勞するんだよ。惣さん。」

「さうよ。いゝ年をしやがつて女に構つてやがる。だからとつ捕るのよ。」

「しつ！ もう少し静かにお話しよ。」

「おや、手前や矢張亭主の肩あ持つな。」

「さうぢやないよ。お互の身が可愛いからねえ。」

かう云はれて惣太は懷中の贓品の事を思ひ出した。さうだ、こいつを刑事にでも見られちや大變だ。かうしちや居られない。

「そろ／＼出かけるぜ、俺かうしちやゐられないのだ。」

「だけど何だね、禿勘の女房は惣太の云ふ事には耳を借さず、しんみりした調子で續ける。惣さんなどはいゝ身分だね。一人でさ、苦勞はないし、稼ぎは男らしいし。——ね、惣さん、惣さん

の仕事などは度胸がなくちや出来やしまい。」

「うん、まあさうだね。」

「それに男振りはいし、道楽一つするぢやなし、亭主なんかと比べものになりやしない。」

「さう賞められると、俺何と云つていゝか分らねえ。惣太はニコくした。」

「でも、何だつて云ふぢやないか。惣さんの稼ぎはちつと許し細いと云ふぢやないか。」

「何だと、かう、おかみさん。もう一度云つて見ねえ。」

「氣に障つたら堪忍しとくれ。あたしや惣さんの稼ぎが少いと聞いたから。」

「冗談云ふねえ。」惣太は忽ち險惡になつた。

「夫婦狎合つてやがら。禿勘が昨夜さう云つたから、俺云つて聞かしてあるのだ。かう、おかみさん、俺稼げねえんぢやねえぜ。稼がないのだけ。」

「おや、さうなの、どうしてさ。」

「どうもかうもねえ。俺食ふだけありや好いのだ。何も負る必要はねえ。」

「成程ねえ。」

「仲間の奴はあるが上にも盗みやがるから、ついお上の御厄介になるのだ。」

「成程ねえ。」

「俺なんざあ、稼がうと思や、譯なしなんだ。證據を見せてやらあ、かう見ねえ。」

惣太は懐中の品物を掴み出すと、バラリと食卓の上へ蒔き散らした。

「かう見ねえ、之も昨夜ほんの一時許りに稼いだものだよ。この時計を見ねえ。」惣太は金時計をブラ提げて見せた。「アメリカの飛切てえのだ。オル——オル——なんて云つたかな。」

「オルサムかい。」

「それよ。捨賣にしても百圓がそこはあるのだ。この留針を見ねえ。」惣太は襟飾留針を取り上げた。「之も、猫眼石ていのだ。さう云や猫の眼に似てらあ。」

「綺麗だね。」禿勘の女房は感心してゐる。

「この指輪はどうだ。臺はプラチナだぜ。寶石を見ねえ、寶石を、赤鞠でえんだ。」

「だつて、ちつとも赤くないぢやないか。」

「俺も變だと思ふんだが、助五郎が云つたんだから仕方がねえ。捨値で七八十兩は缺かさねえと云つたぜ。」惣太はだんく機嫌がよくなつて來た。

「赤鞠は可笑しいね、アクワ・マリンぢやないかしら。」

「さうかも知れねえ。おかみさんは寶石の事は委しいのかい。」

「委しいて程ぢやないさ。」

「これやどうだい。翡翠てえんだよ。」

「まあ、綺麗なこと。」

「こんな性質のいゝのは今時珍らしいて助五郎が云つたよ。」

「さうだらうね。」

「これはどうだい。之はルビーてえんだ。尤も拵へものだつて云ふが、然し——」

「ちよいと惣さん。」おかみさんは聲を潜めた。

「何だい。」

「いゝ加減に片づけてお終ひよ。變な奴が居るから。」

「えつ！」

惣太が振り向くといつの間に来たか、いやに綺麗に頭髮を撫でつけた、にやけたやうな、だが眼つきの鋭い洋服男が、隅の方に腰を掛けてジロ／＼こつちを見てゐる。惣太はあわて、机の上のものを掻き集めて懷中にねぢ込んだ。

「いけねえ、うっかり出来ねえ。」惣太は低聲で獨言のやうに云つた。

「あたしやすつかり驚いたよ。」禿勤の女房はさも感服したやうに云ふ。「ほんとに偉いね、これだけ腕があるんだもの。亭主なんぞは足許にも及びやしない。」

「なにそれ程でもねえやね。——だが、そろ／＼出かけようぜ。」惣太は隅の洋服男が薄氣味悪いので、早く外へ出たくなつた。

支那料理屋を出ると、日はトツブリ暮れてゐた。惣太は禿勤の女房と連立つたまゝ、ものの二三町も歩いて、薄暗い横丁へ来かゝると、後からオーイ／＼と呼ぶ聲がする。

惣太は素早く下駄を脱いで尻を端折ると、禿勤の女房を後に庇ひながら振り向いた。驅けて来たのはさつきの洋服男である。

「何だつ！」と惣太は呷鳴つた。

「君、君は食卓の上へ之を忘れて行つたらう。」

洋服男は惣太の見幕にもめげず、何やら光るものを開けた掌に乗せて差出した。

「やあ、どうもすみません。」惣太は端折つた尻を直しながら、極り悪さうに手を出した。

が、忽ちその手はしつかり掴へられた。

「惣太、御用だ！」洋服男は低いしかし底力のある聲で叫んだ。

惣太はポカンとした。之が對手が刑事でなかつたら、彼は忽ち撲り飛ばして、逃げるのだが、惣太にはお上には抵抗出来ぬものと云ふ抜くべからざる信念があつたから、もうどうする事も出

來なかつた。

「さすがは惣太だ。いゝ覺悟だ。さあ來い。」

さつきから刑事は惣太々々と云ふ。大方惣太を捕へようと思つてつけ覘つてゐた刑事だらう。惣太も聲と聲のどこやらに覺えがあるやうだが、思ひ出せない。惣太は悄然と歩き出した。

「惣太、俺は一度はお前を擱へてやらうと思つて覘つてゐたが眞逆、お前が人中で公然と贓品を見せびらかすとは思はなかつたぞ。いゝ度胸だな、お前は。だが神妙だつたから、出来るだけお慈悲を願つてやるぞ。」

「刑事は惣太を捕へた嬉しさに、ニヤ／＼微笑ながら喋りつゞけた。

だが、惣太の耳にはそんな事は一切這入らなかつた。

彼は悄然と頭を垂れて歩みながら、あゝ、たうとう捕つたんだなとそれ許り考へてゐた。惣太の前には嚴めしい鐵の扉が浮び出た。繩を打たれた哀れな自分の姿、贖罪の筈、そんなものが次々に頭腦に浮んだ。さうして最後に仲間に威張つてゐた僅な誇を遂に失つた事につき當ると、胸が痛くなつて、涙がにじみ出ようとした。惣太は畜生、畜生、と心に叫びながら手の甲で女々しい涙をこすり取つてゐた。

惣太は昨夜禿勤の罵つた言葉を思ひ出した。彼は禿勤にお前達はあるが上にも慾張つて貪るか

ら捕るのでと云つた。さうして今夜は、たとへ慾の爲ではなかつたと云へ、いつもの決心を破つて、貪り盗んだ爲に、こんな目に遭つたのだ。

それからお前達は女に構ふから捕るのでと罵倒したが、たとへ色慾の爲ではなかつたと云へ、自分はやつぱり女の爲に捕つたのだ。禿勤の女房の口車に乗せられて、あんな所で獲物を得意さうに並べさへしなければ好かつたんだ。あゝやつぱり女は身を破る基だ。女と云ふものは恐ろしいものだ。

惣太はだん／＼忙しく手の甲を動かしたが、もう防ぎ切れなかつた。

ポタ／＼と滴が眼から落ちた。

刑事はさつきからの様子を見てゐたが、氣の毒になつたものか、割に優しく云つた。

「なあ、惣太、悪い事をすりや、いゝ報ひは來ない。捕まらないなんて自慢なんかしちや大間違だ。だが惣太、お前がまつこと悪かつたと思ふのなら、俺も何とかしないものでもない。」

「えつ」

惣太は吃驚した。

「大分こたへたやうだ。それに始めての事だ、見逃してやつてもいゝ。」

「えつ、本當ですか。惣太は子供みたいに涙の光つた眼で、嬉しさうな顔をした。

「うん、だが、惣太」
彼は聲を低めた。

「埋合せをしろよ。」

「埋合せ？」

惣太は分らない。

「うん、今日の所は見逃してやるから、お前の持つてる品物を置いて行け。」

洋服男は狡猾さうな顔をした。

「おやつ！ と惣太は思った。と忽ち惣太本来の面目が復活して来た。なんだと、見逃すから品物を置いて行け。何を云やがるんだ。俺は盗人が商賣だが、刑事は盗人を捕へるのが商賣だ。その爲にお上からお扶持を貰つてる役人ぢやねえか。それに賄賂を取つて盗人を逃がすとは何事だ。かう聞いちや惣太は黙つちやゐられない。こん畜生！」

「な、なんだと可笑しな事を云やがらあ。盗人を捕へるのが役なら、とつとと捕めえて行きやがれ、オタンチン奴。」

惣太は忽ち鐵拳を飛ばして洋服男の横顔を撲り飛ばした。さうして仕返へしをちつと待つてゐた、が、が——

惣太の眼の前には、つやくした髪の毛をどこかへふつ飛ばされて、代赭色の醜い禿頭を現しながら、口をへの字に曲げて、泣いてゐるやうな笑つてゐるやうな勘兵衛の姿がスツクと立つてゐた。

惣太の受難

一

氣早の惣太は久し振りで街に出た。

一體惣太は商賣が商賣なので、滅多に晝間ブラ／＼と外へ出る事はなかつたが、殊にこの正月以來、風邪の爲に故物質の助五郎の二階に寝た切りで、二月餘りも過したので、かうして假令夕方にしる、街へ出たのは全く暫く振りだつた。

街には、漸く冬が終りに近づいて來た爲であらうが、驚く程人が群れてゐた。

「ちよつ、相變らずウヨ／＼と歩いてゐるやがるなあ。これでみんな相當に用があるのかい。これぢや食ふに困る筈だあ。一體人間が多過ぎらあ。」

惣太は暫く寢込んでゐたと云ふ證據に、頬が少しこけて、顎に二三本短かい髯を生やして、顔

色も悪く元氣も平生程ではなかつたが、それでも心のうちにこんな啖呵を切りながら人群れを分けて行つた。

と、ドシンと惣太に突當つたものがある。

「あつ、こん畜生！」

惣太はいきなり前に居た男の胸を掴んだ。

「な、なにするんだ。」胸を掴まへられた男は眼を白黒させながら、「俺ぢやない、君に突當つた奴は、それ向ふへドン／＼行くぢやないか。」

「何だつて構ふもんかい。」惣太は猛り立つた。

「かうなりや人違ひでもなんでも、手前が相手だ。さあ、どうするか見ろ。」

「亂暴な男だな、君は。俺ぢやないつたら、そら向ふへ行く背の高い男だよ。」

「喧しいやい。」惣太は呷鳴つた。「向ふへ行く奴を今から追かけたつて、間に合はねえや。違つ

たつて構ふものか。手前が相手だ。」

「實に亂暴な男だ。」これは酷い。「やつつけて終へ。」こんな呟き聲が惣太の四方に起つた。

が、只何となくむしやくしやくしてゐた惣太は、こんな呼聲にはビクともしなかつたが、誰かど銳い聲で、

「巡查を呼んで来い。」と云つた時に、彼は思はずヒヤリとして、相手を放して終つた。惣太は夜盗だつた。いろ／＼と正業を試みたが、持つて生れた輕卒が禍ひして、どれもこれも動まらなかつた。で、結局親譲りの盗人になつて終つたのだが、この方は不思議に成功して行き當りバツタリの無鐵砲だつたが、未だ一度も捕まらなかつた。尤も彼が盗みに入つても貪らず、盗んだ金で切詰めた生活をして、少しも奢らず、それだからこそ、かうやつて二月餘り寢た揚句でも、尙何がしかの金を持つてゐると云ふ奇特な盗人だつた爲でもあるが、兎に角盗人には相違ないのだから、假令まだ一度も捕つた事がないにせよ、巡查は苦手だつたのである。惣太は喧嘩の相手の腕を放すと、コソ／＼と人混みに隠れた。暫くはあつけに取られてゐた周囲の人々は、やがてドツと笑ひ崩れた。

「アハ、、、、何だい、あいつは。」

「巡查と聞くと、一ぺんに逃げ出しやがつた。アハ、、、。」

かう云ふ笑聲を浴せかけられながら、逃げて行く惣太の顔は變に歪んでゐた。

「畜生！ 俺は何も好きで盗人になつてゐるんぢやねえんだ。他に仕事がねえからだ。畜生！ ああ、巡查なんか恐くねえ仕事欲しい。」

惣太は身體中火に包まれたやうに、カツとしながら、漸く薄暗くなつて來た裏通りを、裏通り

へと抜けて云つた。

とある横町で惣太はギョツと立止つた。

彼の眼の前に、相當な身装をしながら、魂の抜けたやうな商人風の若い男が、胡散らしくニョツキリ立つてゐたのである。

「かう、威かすねえ。」惣太は忽ち聲を上げた。

「ちよつ、何とか挨拶しろ、間抜けめ。往來の眞中に根を生やしてゐるやつがあるかッ！」

「之はどうも失禮、相手の男はウロ／＼しながら、別に、その、根を生やしてゐる譯ではござい

ませんので——」

「當り前よ、惣太の機嫌は中々直らない。人間からさう易々と根が生へて耐るもんけえ。例へ話だ、分らねえのか。」

「は、はい、好く分りました。相手はペコ／＼頭を下げた。

「一體、お前さんは。相手の大人しいのに少し張合抜けのした惣太は、いくらか言葉を和げた。

「そこで何をしてゐるんだい。」

「は、あの探しものをしてゐますんで。」

「何、探しものだ。そんならさうと早く云へば好いちやないか。俺も一緒に探してやらあ。何だ

い、落しものは金かい、指輪かい。」

「實は、相手の男は云ひ悪くさうに、子供なんで、」

「何ッ！ 子供だ。成程、迷子つて譯だね。男の子かい、女の子かい。そしてどつちの方へ行つたんだね。」

「女の子なんです。」

「呑氣だなあ、お前さんは。子供は一つ所にちつとしちやみねえぜ。俺あ、こつちを探すから、お前さんはそつちを探しなせえ。」

かう云つて惣太は駆け出さうとしたが、相手はあわてゝ呼び留めた。

「もしく。」

「何だい、ちよつ、じれつてえなあ。ぢや、こつちかい。」

「もしく、さう無闇に駆け出しても駄目なんです。」

「ぢや、どうすりや好いんだい。」惣太は立止つて、いらくしながら云つた。

「實はその迷子になつたのは今日ぢやないんです。」

「エッ、今日ぢやない！ ぢや昨日かい。」

「いえ、もう少し以前なんです。」

「一體いつなんだい。」

「三年前なんです。」

「なにつ、三年前だと、馬鹿めッ！」惣太は拳固を振り上げた。

「な、なんだつて、そんな古い事を俺に頼みやがつたんだ。」

「これは迷惑な。手前はあなた様にお頼み申した覚えはございません。」

「う、う、惣太は振り上げた拳固の始末に困りながら、呻り出した。「うん、成程、俺も頼まれた

覚えはねえや。だが、一體、お前さんは三年前の事を、何だつて、今頃ウロ／＼と尋ね廻つてゐ

るんだい。」

「實は、相手の男は急に首を垂れて涙聲で語り出した。「その迷子になつた女の子と申しますのは私の主人の娘なのです。三年前にその子は未だ漸く三つでしたが、私が手を引いて、お祭の出車を見に行きました所、丁度通りかゝつた荷馬車の馬が暴れ出して、騒ぎにまぎれて、子供を見失つて終ひました。たつた一人の女の子なので、主人夫婦は氣狂ひのやうになり、私も大責任ですから、何もかも打抛つて、毎日々々尋ね歩いてゐるのですが、三年経つた今日少しも行方が知れないのです。この頃は主人夫婦は店も人手に委したまふ、恰で死んだやうになつてゐます。私ももう生きた空はありません。かうやつて毎日毎夜うろ／＼と魂の抜けた人間のやうに歩き廻つ

てゐるのです。」

「あゝ、さうかい。」ヂリヂリして聞いてゐた惣太は云つた。「ぢや、お前さんの好いやうにするさ。之が五圓か十圓の金ですむ事なら、俺も片棒擔ぐがね。三年前に迷子になつた子供を探さな

んざあ、御免だよ、あばよ。」

惣太はスタ／＼歩き出した。

「あゝ、惣太の後姿には眼も止めず、若者に溜息をついた。

「之だけ探して行方の知れないのは大方悪者の爲に、支那人にでも賣飛ばされたのだらう。あの時はお祭りで、金目のものがあの子の腰に下げてあつたから、そんな所へ目をつけられたのだらう。」

彼はしよんぼりと、惣太と反對の方に歩いて行つた。

二

「ちよつ、人を馬鹿にしてやがる。暗闇で何かうろ／＼探してゐるから、何だつて訊けば、三年前の迷子を探してゐるんだとさ。世の中にや、あきれた氣の永い奴もあるもんだ。」

惣太は忌々しさに呟きながら、相變らず暗い横町を歩いて行つたが、ふと前の方をすかして見て、又ギョツとして立止つた。

「な、何だ。今日はいやに驚く日だぜ。子供ぢやないか。」

見ると六つか七つかと思へる女の子が一人、シク／＼泣きながら佇んでゐる。

「嫌だなあ。かう、お前は狐か狸ぢやねえか。今し方迷兒の話を聞いて來たばかりだ。そこへかう手際よく出られぢや驚くぢやねえか。かう、お前はどうしたつていふんだよ。」

惣太はおづ／＼と子供の傍へ寄つた。

「アーン／＼」子供は泣きじやくりをしながら、「おつ母が恐いんだよう。」

「何、おつ母が恐い。ぢや、何だ、迷兒ぢやないんだ。おつ母に怒られたのかい。何か悪戯をしたんだらう。」

子供はかぶりを振つた。

「ぢや、どうしたんだい。」

「おつ母があたいを苛めるんだよう。」子供は又シク／＼泣き出した。

「馬鹿云つてらあ、どこの國に子供を苛めるおつ母があるもんか。お前が悪いんだよ。さあ早く家に歸つて謝まるが好いや。」

子供などに向興味を持たない惣太ではあつたが、子供のいぢらしさに釣込まれて、思はず優

しく云つたのだつた。

所が、子供は強情にかぶりを振る計りで動かない。

「かう、歸れつたら。」惣太は少し腹を立てた。

「いやだ。」子供は動かない。

「くそつ！ 強情な奴だ。云ふ事を聞かなけりや腕力だ。さあ来い。」惣太はたうとう本氣に怒つて、子供の腕を握つた。

「いやだあ、いやだあつてば。」子供はよく／＼家に歸るのが嫌だと見えて、足をバタ／＼させた。惣太は構はず明るい通りの方へ引立てた。

「オイ／＼」不意に惣太の後で聲がした。「その子供をどうしようてえんだい。」

惣太がヒヨイと振り向くと、恐ろしく背の高い遊人風の男が突立つてゐた。

「大きにお世話だ。引込んでろ。」惣太は呶鳴つた。

「引込んぢやゐられねえや。」大男は割に靜かに答へた。

「その子をどうするんだい。」

「おや、未だ何か云つてやがるな、電信柱め。この子をどうしようて手前の厄介にならねえやい。俺はこの子の家へ連れて行つてやるんだい。」

「おや、さうかい。それは御親切さまだね。」相手の男は相變らず落着いてゐる。「で、その子の家はどこにあるんだい。」

「家かい。」惣太は忽ち詰つて終つた。例の氣早で、家も何も分らないうちに子供を引立てたのだつた。「家はその——この先だい。」

「この先のどこだね。」

「うるせえッ、この子に聞きや分らあ。」

「ウフ、、利いた風な事を云ふな。手前はその子を攫ふ積りだらう。」

「ふ、巫山戯るな。」惣太は敦圀いた。「誰がこんな薄汚ねえ子供を攫ふかい。人聞きの悪い事を云ふな。俺はこの子が泣いてゐるから、家へ連れて行つてやらうてんだよ。」

「嘘つけ。」大男はきつとなつた。「體裁の好い事を云やがつて。第一その子はいやだつて泣いてるぢやねえか。それから手前はその子の家を知らねえぢやねえか。胡散臭え奴だ。人攫ひに極つてらあ。」

「じよ、冗談云ふな、こんな薄汚い——」

「フン」大男は冷笑した。「おい、好い加減にしな。薄汚くても、その子は俺の子だぜ。」

「えつ。」惣太は仰天した。「な、何だつて、この子はお前の子だつて。」

「さうだよ。」

見ると子供は惣太の蔭に隠れて、大男の顔を見ながら、ブル／＼顫えてゐる。

「え、さうかい」惣太はあわて出した。「そいつあ濟まなかつたね。何、別に薄汚なかねえや。だが、いゝ所で出食はして好かつた。ぢや、この子を渡すから、連れて行つて呉れ。」

「へッへッ」大男は嘲笑つた。「虫の好い事を云ふなよ。俺に會つたからつて急にそんな事を云つたつて駄目だよ。手前がこの子を攫はうとした事はちやんと證據があるんだ。」

「じよ、冗談云つちやいけねえ。」

「つべこべ云ふな。」大男は呶鳴つた。「さあ、俺と一緒に警察へ来い。この邊りには近頃物騒な奴が徘徊してゐるので、警察でも旦那方はとうから眼をつけてゐるんだ。手前を連れて行きあ俺は、お賞に預かるんだ。さあ来い。」

「巫山戯ちやいけねえよ兄貴。」惣太は警察と聞いて青菜に鹽である。「警察は勘辨して呉れよ。俺あ、何も悪い事をしちやゐねえんだから。」

「悪い事をしてなきあ、警察だらうがどこへ行つたつて好いぢやねえか。フフン、手前は何か後ろ暗い事があるんだね。」

「馬鹿云へ。俺あそんな——」

「馬鹿とは何だ。」大男は氣色ばんだ。「云はして置けば方圖がねえ。さあ、とつとと来い。彼は惣太の腕をグイと掴んだ。惣太は振り解かうとしたが、ビクともしない。

「逃げようたつて逃がすかい。」大男は嘲笑つた。

「逃げるもんかい。」惣太は口惜しくつて耐らなかつた。「俺あ警察へ行くのは嫌だ。理由がねえ。」

「フン」大男は惣太の腕くの鼻の先であしらつてゐたが、何を思つたか急に調子を變へた。「手前はほんとうに警察は嫌かい。」

「嫌だとも。」惣太は腕を取られたまゝ力んだ。

「フン、ぢやあ五兩出しねえ。」

「えつ、」

「俺あ、實はすつかり取られちやつて困つてるんだ。今夜はきつと好い目が出るんだ。十兩貸しねえ。」

「おやつ、お前はさつき五兩と云つたぢやねえか。」惣太は咎めた。

「うん。所が手前が餘り驚かねえから、もつと持つてると見て取つたんだ。さあ、十五兩出せ。愚圖々々してゐると未だ増えるぞ。」

「嫌だよ。惣太は首を振つた。「俺は金を出すなあ嫌だ。そんな威しに凹みたかねえ。」

「さうか。」大男はうなづきながら、「ぢや、一緒に警察に来て貰はう。」
 「嫌だ。」

「嫌だつて、俺は引摺つて行くよ。お前は現在わん／＼泣いてゐる俺の娘を無理やり持つて行かうとしてたんだからね。家へ連れて行く積りだつて駄目さ。お前は家知らねえのだから。警察へ行つて見ろ。お前は何日も留め置かれて、散々引つぱたかれるんだぜ。」

惣太はブル／＼と身顫ひをした。

「それ見ろ。」大男は圖に乗つた。「お前顫へてるぢやないか。ねえ、大人しく二十兩出したな。」

愚圖々々してゐると、金の高はいくらでも増えるので、惣太は澁々二十圓の金を出した。

「お前のやうな奴に會つちや叶はねえ。仕方がねえ、呉れてやらあ。」

「兄い。」大男は金を受取ると、急にニコ／＼し出した。「ぢや、貰つとくよ。済まねえな。」

「くそツ！」惣太は忌々しさに呷鳴つて行かうとした。

「おつと、待ちねえ。」大男は呼び留めた。「済まねえが、その子を家まで送つて呉んねえ。この先の横町だから。」

「馬鹿にするねえ。惣太は怒つた。「御免だよ、そんなことあ。」

「おや、ひどく強氣になりやがったな。生意氣な事を云ふな。警察へ訴へるぞ！」大男は噛みつ

くやりに呷鳴つた。

「又、警察か。惣太は落膽しながら、「好いや、送つてやらあ。」

三

惣太は大男に威かされて、仕方なく教はつた通りの横町のとある路次の奥へ子供を連れて行つた。

「おや誰だい。」

惣太の足音を聞きつけて、家の中から鋭い女の聲がした。子供は犇と惣太に獅噛みついた。

「子供を連れて来てやつたんだよ。惣太は外から呷鳴つた。」

「おや、それは済みません。」

さう云つて、戸口からぬつと半身を現はした驪頭に青い疳の筋を立てたおかみは、子供を見つと噛みつくやうに云つた。

「一體手前はどこをうろついてゐたんだ。又知らねえ他所の伯父さんに縋りつきやがつて、おつ母の悪口を云つたんだらう。この恥曝し奴。」

「なに、さうぢやねえよ。おかみさん。何も云やしないよ。この子は。惣太は取り做した。「そこ

んところね、父さんに會つてね、こゝまで送つて呉れと頼まれたんだよ。」
 「何、あの野郎に頼まれたんだつて。」おかみさんの形相は忽ち變つた。「ぢや、お前さんはあの野郎の友達なんだね。碌でなし、お前さん達が寄つて、亭主野郎をあんなにして終つたんだ。口惜しいッ！」

「おかみさん。俺は友達でも何でも無いんだ。ぢや、子供をここへ置くよ。あばよ。」惣太はおかみの劍幕に恐れて、早々退却しようとした。

「鳥渡待つとくれ。」おかみは呶鳴つた。

「變な事をお云ひだね。亭主野郎の友達ぢやねえと。友達でもないものがどうして子供を預かつて来たんだよ。怪しいぢやないか。ちよいと、みなさん来て下さいよ。變な奴が来たよ！」

「オイ、おかみさん。惣太はあわてゝ留めた。俺は逃げも隠れもしないよ。變に疑つて大きな聲を出したりするのは止して呉んな。」

「白ばつてくれ。手前は何だらう。その子を攫ふ積りだつたらう。あたしは先刻からその子の歸りが遅いんで、どれ位心配してゐたか知れやしない。きつと、何だらう。途中で父さんに會つて威かされたんで、子供を屈けに來たらう。」おかみは雄辯に捲し立てた。「おいそれと子供はうけ取れないよ。身體検査をしなければ。」

「えつ、身體検査だつて。惣太はあきれた。」

「へえ、さうでございますよ。」おかみは憎々しく云つた。「その子の腰には金の這入つた巾着が下げさしてありますのでね。」

惣太があきれてゐるうちに、おかみはブル／＼顫えてゐる子供の側に寄つたが、忽ち頓狂な聲を上げた。

「それ見ろ、巾着がない。思つた通りだ。さあ巾着を返せ。」

「冗談云つちやいけないよ、おかみさん。俺はそんなものは知らないよ。」

「何を、盗人め。お前が盗んだのに違ひないのだ。さあ返せ。」おかみは喚き出した。「巾着はどこかへ棄てゝ終つたらう。金を返せ。巾着代と一緒に十圓に負けてやらあ。早く出さないと、近所の人を呼んで、警察へ突き出すぞ。」

惣太は溜息をついた。さうして、口惜しさに身體をブル／＼顫はせながら、最後の十圓紙幣をおかみに渡した。

「さう素直に出りあ、あたしも何も云はないよ。」おかみは金を受取りながら尙毒づいた。

惣太は煮えくり返る思ひで、足音荒く立去らうとすると、子供がしつかりと彼に抱きついた。「をぢちゃん。」

然し、この幼女のいたいけな有様も惣太の眼には這入らなかつた。彼は邪慳に彼女を振り飛ばした。

「何をやるんだい。」おかみは噛みつくやうに叫んだ。「その子は貰ひつ子だけれども、あたしの大事な子だよ。怪我でもさして見ろ。承知しないぞ。」

四

流石の氣早の惣太も散々な目に會つて、すつかり悄氣切つてゐた。元はと云へば矢張り彼が子供が行先を聞かないで、無理に引張つた輕卒から來たのだけれども、彼は世の中にはとても恐ろしい悪黨が充満してゐるのに慄然たらざるを得なかつた。

「それから思へば、俺なんざ、ケチな盗人だな。」

惣太は自分が盗人であると云ふ事にすつかり愛想が盡きて、悲しくなつて來た。けれども彼は差當り盗人の他に出來る事はなく、悪黨夫婦にすつかり持金を捲き上げられた現在、とにかくどこかに忍び込むより仕方がなかつた。

「さうだ。取り返してやらう。」

惣太はいつでも大きな家を選んで忍び込んだ。そこでは一品位取られても平氣のやうに思へ

た。そしてその一品が惣太の一月の糧位にはなるのだつた。貧乏な裏長屋などへは決して這入らず、又這入りたくなかつたのだが、今の場合はあの鬼のやうな夫婦の家に忍び込んで、取られただけのものを取り返して、思ふ存分復讐を遂げてやらう、とさう云ふ氣持で一杯だつた。復讐を遂げて後の痛快さを思ふと、ひとりでに微笑まれて來た。

彼はすつと夜の更けるのを待つた。

高の知れた裏長屋だから忍び込むのに造作はなかつた。彼等夫婦は六疊の一間に居汚なく酔潰れてゐた。五十燭光を、越すと思はれるやうな明るい電燈が、彼等の醜體を照らしてゐるのだつた。

「ちよつ、だらしのねえ野郎だな。」

ペツと唾でも吐きかけた氣持で、酒臭い呼吸をしてゐる夫婦の寢相を見たが、彼から捲き上げた金で、二人が散々呑み食ひをしたかと思ふと、疳積がムラ／＼と湧き起つて來たので、惣太は思はず、男の頭を一つポンと蹴つた。

「しまった！と思つて惣太は直ぐに逃げ仕度をしたが、男はムニヤ／＼と云つて、寢返りを一つした切り、又死んだやうに眠りこけた。そこで、惣太は今度は女の頭を一つ蹴飛ばした。「何をやるんだい！」

思ひがけなく女が鋭い叫聲を上げたので、惣太は吃驚仰天して、土間に走り下りたが、女は起き上らうとしなかつた。見ると、彼女は眼をしつかり瞑つてグウ／＼寝てゐる。

「なあんだ。威かしやがつたな。寢言かい。」

惣太は又ノソ／＼と這上つて、金目のものを物色したが、何にもない。枕の下でも探れば金があるかも知れないが、ちよつと恐くて手が出せなかつた。「馬鹿にしてやがら。」惣太は腹立まざれに大男の頭を又一つ蹴飛ばした。所が、今度は薬が利いて、彼が目を覺ましさうになつたので惣太は急いで逃げようとしたが、その足に纏はつたものがある。

「をぢちゃん。」

それはあのいたいな幼女だつた。彼女は先刻から目を覺してゐたと見える。彼女は感謝に充ちた懐しさうな眼で惣太を見上げてゐた。惣太は未だ生れてから、こんな優しい目で他人から見られた事がない。目前に危急が迫つてゐるのだけれども、彼は思はず立止つた。と、「泥棒！」と云ふ女の金切聲が聞えた。そして、惣太は足にしなやかな腕が絡みつくのを感じた。萬事休す！惣太は渾身の力を籠めて暴れ廻つた。之ほどの力が彼の身内にある事を今までに知らなかつた程暴れ廻つた。

ドン、ガチャン、すべては破壊である。

それでも天命の盡きない所か、惣太は漸く二人を振り挽つて逃げ出す事が出来た。醉眼朦朧とした男女二人は惣太の逃げた後を、未だ夢中で荒れ狂つてゐた。火の始末の悪かつた爲か、室の隅から黒煙が濛々と立上つてゐた。

數町程逃げてホツと一息ついた惣太は振返つて見て驚いた。

炎々たる焔が渦を巻いて火の粉が飛散つてゐる中を、黒い人影が右往左往してゐる。「しまつた！」

惣太の眼前には居汚なく寝こけてゐた悪漢夫婦の居間の有様が浮んで來た。轉つた燭徳利、燭をつける爲に持ち込んだらしい七輪の残火！「火を出したのは俺が元だ。」惣太は驚きの餘りブルブル身體を顫はしたが、彼はふと可憐な幼兒の姿を思ひ浮べた。「かうしてはゐらねえ。」

彼は一散に元來た道に引返した。人々があれ／＼と騒ぐうちに、火の子を被つて、狭い路次の奥に飛込んだ。

「をぢちゃん。」煙に巻かれてウロ／＼してゐた女の子は、惣太の姿を見るとしつかり獅噛みついた。惣太は夢中で彼女を抱上げた。再び火の子を潜りながら表に突進した。それつ切り彼は氣を失つて終つた。

ふと氣がつくと、惣太は大嫌いな警察の一室に寝かされてゐた。傍には嚴めしい制服姿の警官

が立つてゐた。惣太は驚いて起き上らうとしたが、一寸も動く事が出来なかつた。「では何だね。」惣太の頭上に警官の聲が響いた。「お前が子供を探してゐる事を、この男に云つたのだね。それで危険を冒して助け出したのだね。」

「さやうでございませう。それに相違ございませぬ。」惣太の聴覚のある聲が答へた。

「うむ、即時上申せねばならん。人命救助として賞状ものだ。」

「あの。」惣太に耳馴れない年寄の聲が聞えた。「この方の生命は大丈夫でせうか。」

「大丈夫です。」醫者らしい聲だつた。「手當を十分にすれば。」

「どんな手當でもいたします。」年寄の昂奮した聲が叫んだ。

「私の三年來尋ねてた可愛い兒を助けて下さつたのですもの。」

惣太は夢のやうにそれらの聲を聞いてゐた。

惣太の意外

惣太には暫く平和な日が続いてゐた。

尤も氣早と呼ばれた彼だけに周章する事だけは止められなかつた。例へば電車が故障を起して立往生した時に、無論彼は一刻だつてちつととしてゐない。忽ち飛降りたが、折柄チン／＼とけたたましく警鈴を鳴して走つて來た反對の側の電車を見ると、身を翻して飛乗つて終つた。そして獨言を云つた。

「あつ、いけねえ、之ぢや元へ歸つて終ふ。だが好いや、兎に角動いてゐる方が氣持が好いや。」

或晩、活動見物に出かけて、遅く歸ると、寢衣に着替るのが面倒なので、その儘寢て終つた。

翌朝起ると、周章で外出着を脱ぎ、寢巻に着替へて、澄まして外へ出た。ふと皆が自分を見てゐるのに氣がつくと、繼ぎだらけのみすばらしい着物を着てゐるので、彼は宙を飛んで宅に歸り、大急ぎで外出着に着替へたが、何と思つたか、その儘寢床に潜り込んでグウ／＼寢て終つた。

或時は省線電車の上野驛へ行つて「上野を一枚！」と嗚鳴つた。驛員がどうしても賣つて呉れないので、彼は癪癪を起して暴れ廻り、もう少して警察へ突出される所だつた。

が然し、懷中にはいくらか金もあつたし、毎日口笛を吹きながら、至極無事に暮してゐた。所が二三日前に下宿の主人の故買者の助五郎から、女持の指輪が欲しいと云ふ注文が出たのである。古來盗人を注文生産者として分類したものはないだらう。盗人は仕入専門で、仕入れた商品物を古物店なり質屋へなり持込むものと昔から定つてゐる。だから注文生産者としての盗人は惣太を以て嚆矢としたかも知れない。助五郎は惣太に四五日のうちに成べくよく光る石のついた上等指輪を一つ間に合せて呉れないかと頼んだ。大方彼は仲間内から注文を受けたのだらう。一體、惣太は盗みはするが負らない主義で、生活上緊急缺くべからざる以外は盗をしない。盗人の癖に清貧——も可笑しいが——に甘んじて決して贅澤な眞似をしない。粗衣粗食である。尤も惣太は贅澤は破滅のもとと堅く信じてゐるので、一面から云ふと捕へられて暗い所へ入れられたくないと云ふ自衛觀念から出發してゐるのだが、兎に角無學でこそあれ、さうして盗みこそすれ、彼は克己心の強い一箇の道學者だつた。だから懷中に少しでも金のある時に盗みをする惣太ではなかつたが、彼は平生から助五郎に非常に感謝してゐる。彼が今日迄無事であるのは偏へに彼を下宿として、彼の贓品を買つて呉れる助五郎爺のお蔭だと思つてゐる。彼は助五郎が彼の剩餘價

値をいかに搾取してゐるか云ふ事には一向に氣がつかない。尤も助五郎の方だつて危険な仕事をしてゐるのだから、儲けがなくては詰らぬので、(彼等の社會では剩餘價値の事を簡単に儲けと呼んでゐる。)それに助五郎は惣太に對しては一種の愛着の念があつたから、どつちかと云ふと惣太のものは高く買つてやつたので、この點では彼は惣太の感謝に値するかも知れない。

兎に角、惣太は助五郎の注文を快く引受たのである。

だが惣太は注文生産のいかにむつかしいものであるかと云ふ事をつくづく悟つた。行き當りバツタリに盗んで、それを金に代へると云ふ事はさして難事ではないが、何時何日まで、之のものを盗んで来いと云ふのは、殊に惣太のやうな熟慮を缺いた周章者には、地中海の底に沈んだ金塊を揚げるのよりもむつかしいのである。

指輪を盗むには指輪屋が一番好いと誰でも思ふだらうが、かう云ふ店は得て警戒が嚴重だし、さう云ふ店から盗んだものは足が付き易いから、助五郎の方でも嫌ふ。どうしても素人の家で數年以前に買込んだやうなものではないと工合が悪い。

惣太に好い考へのありやう筈がない。彼は仕方がないから、主義を破つて、懷中に未だいくらか金があるにも關らず、この二三日來手當り次第に方々へ盗みに這入つた。一晚に四五軒這入つた事がある。然し注文の指輪の以外のものは眼をつけない。諸君のうちには朝起ると明かに盜賊

の這入つた形跡がありながら、一向紛失物のないと云ふ不思議な目に遭はれた人があるかも知れない。それは確に惣太が這入つたので、目的に添ふやうな指輪がなかつた結果なのだ。女持の指輪なら藝者屋へでも忍び込めばザラにあるだらうが、惣太は生れついて女が嫌ひなのだ。いや嫌ひと云ふよりは恐いので、女にかゝるときつと誑されて酷い目に遭ふと考へてゐる。(又實際その通りだつた事は一再ならずあつた。)だからとても藝者屋へなどは忍び込めない。惣太はホト／＼困り果てた。

秋晴の氣持の好い午後だつた。惣太は差迫つた指輪の問題で心を痛めながら、大通を電車で走つてゐた。電車は四五人の人が吊皮に捕つて立つてゐる程度の混み加減だつたが、惣太の直ぐ前に立つてゐた人が、電車の動揺でよろける拍子に、前の座席からキラリと光つたものがある。惣太は元の位置に歸つた前の人を押し退けるやうにして前の方を覗くと、一人の身装のキチンとした二十五六の美しい奥さん風の女が掛けてゐて、その左手の無名指にダイヤだらうと思はれる見事な指輪がキラ／＼光つてゐるのだ。惣太の眼はすつかり奥さんの手に吸ひつけられて終つた。あの見事な光る指輪！ あれを助五郎爺の所へ持つて行つてやつたら、奴はどんなに喜ぶだらう。あんな光つた指輪が欲しい計に俺はこの二三日瘦せる程苦勞してゐるのだ。あゝ欲しいなあ、助五郎を喜ばしてやりてえなあ。さう思つて、惣太は丸で子供が玩具やの店に立つた時のや

うな無邪氣な貪婪な眼を光らして、飽く事なく指輪を見入つた。

そのうちに前に立つてゐた人が少し移動したので、ものゝ十秒程前の婦人が見えなくなつた。惣太は急いで自分も腰を少しづらして、再び前を覗くと、彼はあつ！ と聲を擧げたのである。

奥さんの指に指輪がないのだ！

彼は急いで奥さんの兩側を見た。右側は職人風の男、左側はでつぷり肥つた紳士體の男である。彼は咄嗟に叫んだ。

「車掌さん、誰も下しちやいけねえぜ。掏摸があるんだ。掏摸が！ もう仕事をしやがつたん

だ。きつとズラかるに違えねえから。」

乗客は驚いて惣太を見た。

惣太は何と思つてこんな事を叫んだか。彼自身は御承知の如く夜盗である。云はゞ同類同様の掏摸をどうして彼は發く事が出来るか。彼は別に深い考へがあつた譯ではない。彼は目前に一人の弱い犠牲者を見て憤慨したのと、掏摸が賤しむべき職業であると云ふ彼の考へと、——盗人はさうではない——それから彼が非常に執着してゐた指輪の紛失が彼を昂奮させたのと、さう云つた色々の原因が錯綜して、彼の叫びになつたのだ。

だが車掌には惣太の心理の動きなど分らう筈がない。然し、かう呶鳴られると彼には職業的責

任觀と、人間の好奇心とが相次いで起らざるを得ない。車掌は今しも栗鼠のやうに車掌臺から降りようとした怪しい男の腕をムツと掴んだ。

「いけません、飛降りちや。」

掴まへられた男は一生懸命にもがいたが、そこへ忽ち脱兎の如く物太が飛んで来て、あつと云ふ間もなく、ポカリとその男を撲りつけた。

「ち、畜生め、太い野郎だ、さあ指輪を出せ。」

物太が果して異常な推理力を以て、この男を犯人として撲りつけたかどうかは甚だ疑問である。女の指輪が短時間に紛失したのは彼女の兩側に席を占めた二人のうちの一人が巧にすり盗つたので、その盗つた指輪は前に立つてゐた仲間に逸早く渡した。そこで彼は指輪を以て飛降りようとした、それがこの男である。とかう云ふ経路を物太は早くも見破つたのだらうか。が理論は兎に角、物太に撲りつけられた男は泣面をかきながら、ピカリと光る指輪を物太の前へ出した事は事實である。

「濟みません。」

彼は低聲で云つて、物太が指輪を取る際に、身を躍らして飛降りた。車掌が周章て紐を引いて停車させやうとすると、物太は押し止めた。

「まあ、好いぢやねえか、指輪は返つたのだ。許してやれよ。」

物太が指輪を不器用につまんで中へ這入ると、乗客一同は凱旋將軍を迎へるやうに一齊に彼を見た。中には手を叩くものもあつた。

物太はすつかり照れて、指輪を奥さんの前へ差出して、口籠もりながら、

「さあ、仕舞つときねえ。氣をつけなくちやいけねえよ。」

今迄の出来事に吃驚して、大きな眼をグリグリさせてゐた美しい奥さんは、立上つて丁寧にお辭儀をした。

「有難う存じます。あなたがお出ななければ飛んだ事になるのでございました。これは夫の遺品なのでございます。何ともお禮の申上げやうがございませぬ。」

乗客は口々に物太の手腕を賞め、奥さんの幸運を祝福した。奥さんの隣の肥つた紳士だけは黙つて苦笑ひをしてゐた。

物太は眼のやり場もない程困り抜いてゐた。丁度電車が停留場で止つたので、彼はコソ／＼と降りようとした。奥さんは驚いて

「あゝ、モシ／＼、鳥渡お待ち下さい。」

と云つたが、物太は素知らぬ顔で降りて行く。奥さんも急いで彼の後を追つた。さうして彼に

追ひすがりさま、袂を掴んだ。

「あの、甚だ失禮でございますが、お禮にあがりたう存じますし、どうぞ、お所とお名前を——」
「冗談云つちやいけねえ、惣太は眞剣に云つた。」來られて耐るもんか。お前さんのものがお前さんに返つたのだ。お禮も蜂の頭もねえや。」

「でも、それではあんまり——」

「嫌だつて事よ。そんなにお禮がしたきや、えーその、彼は一生懸命に孤兒院とか救世軍とかを考へ出さうとしたが、その、どつかへ寄附でもするさ。」

「立派なお心がけですこと。」女は感心した。

「感心しちやいけねえ。」惣太はいよく照れる。

「では無理とは申しませぬ。私はかう云ふ者でございます。所も書いてございます。何か御用の節は御遠慮なく申聞け下さいませ。」

彼女は小型の名刺を差出した。

「さうかい、ぢやまあ、貰つとかう。だけど何だぜ、行きやしないよ。」
惣太は名刺を受取ると、スタ／＼と後をも見ずに歩き出した。

あてもなくブラ／＼と一廻りした末、惣太は下宿に向つた。ゴミ／＼した場末の横丁を曲つて下宿近く來ると、向ふから仲間の一人がやつて來た。彼は常から惣太に好意を持つてゐる一人だつた。

「かう惣太、彼は惣太を見ると呼止めた。どうしたんだい。助爺がひどく怒つてたぜ。」

「え？ 助爺が、俺知らねえな。助爺が怒る譯がねえ。惣太は驚いて答へた。」

「さうかい。ぢや好いけれども、何だぜ、確に怒るには怒つてゐたから氣をつけて行きねえ。」

「有難うよ、だけど、どうも怒られる覺えはねえなあ。」

惣太は友達に別れると、す／＼宅に歸つて、

「爺さん、歸つたよ。」と聲をかけて、そのまゝト／＼と古めかしいものがゴタ／＼並べてある

店先から二階へ上らうとすると、

「惣公、鳥渡待ちねえ。」助爺が平生と違つた聲で呼止めた。

「來たな、さう思ひながら惣太は「あいよ。」と梯子にかけた足を下して、薄暗い奥の一間を覗き込んだ。爺さんの外に見馴れない男が坐つてゐる。

「まあ、こつちへ這入んねえ。」

惣太は少々氣味悪く思ひながら中へ這入ると、居合した男がだしぬけに、

「惣太、さつきは御苦勞だつたなあ。」無表情な顔で云つた。

「えつ。」

惣太が驚いてその男を見ると、彼はさつき電車の中で、美しい奥さんの隣に席を占めてゐたのでつぶり肥えた紳士體の男だつた。

「惣太、お前はこの方を知らねえのかい。」

助五郎はボカンとしてゐる惣太に、一語々々念を押すやうに云つた。

「知らねえ。」惣太は相變らずぶつきら棒に答へる。

「何知らねえ、助爺はあきれたと云ふ風に、鐵次親分だよ。冗談ぢやねえ。」

鐵次と云ふのは音に聞えた拘摸の親分だつた。ハ、ン、之が有名な拘摸か、と感心してゐる耳許に助爺の甲高い聲が響いた。

「やい、惣太、手前は何だつて親分の仕事の邪魔をしたんだ。」

「別にその。」惣太は口籠りながら「別に譯があるんぢやねえんだ。親分つて事を知らねえし、それに一體拘摸なんてものは……」

「ほざくなつ！」鐵次親分は呶鳴つた。「青二才の癖をしやがつて、拘摸かどうしたつてえんだ。」別にそのどうもしねえ。」

「何を云つてやがるんだ。一體手前が電車の中で女の指輪を、女湯でも覗いてゐるやうなだらしのねえ眼をしやがつて、一生懸命に見詰るもんだから、女は薄氣味悪がつて、そつと指輪を指から外したんぢやねえか。そして帶の間に挟んだのを、以前から機會を的つてゐた俺が電車の揺れる拍子に手早く抜いたのだ。云は、手前が手傳つたんぢやねえか。それを辰の野郎に渡したのを何だつて變な眞似をしやがつたんだ。尤も辰の野郎も随分頓馬だ。手前見たいな瘦せ小僧に締め上げられるたあ。」

「親分はお前、鐵次の勢ひが激しいので、助五郎は幾分執りなすやうに云つた。「俺がお前にも頼んで置いた通り、光る指輪が欲しいとお頼みして置いたので、折角骨を折つて下すつたんぢやねえか。」

惣太はもうさつきから喧嘩と極めてゐた。いつもに似ず急に手を出さなかつたのは、拘摸にせよ、兎に角親分と云はれて仲間の先輩だし、それに助爺に迷惑がかゝると思つて、ちつと堪へてゐたのだつた。所が今聞けば鐵次も助爺に指輪を頼まれてゐたんだと云ふ。惣太も助爺の恩を思つて一生懸命に指輪を探してゐたんだが、さうだつたのか、こいつはどうも俺がよくねえ。

「どうも濟みません。」惣太は詫つた。

「何を云やがんでえ。」鐵次は未だ蟲が治まらない。「手前見たいな蟲見たいな奴でも、周章者の愛

「嬌者と云ふので、俺の方ぢや顔を見知つてゐてやつたのだ。だから今日だつて手前と知ればこそ、氣を許してゐたのだ。それに土壇場であんな眞似をされちや、俺の顔が立たねえ。一體どうして呉れるのだ。」

「どうも濟みません。」

「濟みませんぢや事は濟まねえ。人を馬鹿にしやがつて、」

「ぢやどうすれば好いんだ、豚の化物め。」惣太はたうとう本性を現はした。

「な、何だと。」親分は拳固を固めて立上がつた。

「まあ、まあ、親分、助五郎は驚いて鐵次を宥めながら、「惣太、血迷ふな。」と惣太を睨みつけた。

「ちつとも血迷やしねえ。悪いと思へばこそ詫つてゐるのぢやねえか。ちえつ、面白くもねえ。何だらう、指輪を持つてくりや文句はねえだらう。晩まで待つてくんねえ。遅くつても十二時迄にはあのピカ／＼光る奴を持つて来るからね、あばよ。」

惣太は眞赤になつて怒つてゐる鐵次を尻目にかけて、そこを飛出した。二三間行きかけると何と思つたか引返した。

「いけねえ、いけねえ。ちつぽけな名刺だけれど、變にむづかしい字で讀めねえや、仕方だね

え、助爺に教はらう。」

そつと戻つて店先から覗くと、鐵次は未だふん／＼して、

「あんな奴は生かして置けねえ。見ろ。」と呶鳴つてゐた。

「爺さん／＼鳥渡耳をぢやねえ、眼を貸してくんねえ。例の女の宅だが、名刺に書いてあるんだが讀んで呉れねえか。」

助五郎は澁々出て來た。

「ちよつ、しよりのねえ奴だな、親分を怒らして終つて、——麴町だよ、番町さ、齋藤龍子つていんだ。成程、手前には讀めねえ筈だ。」

麴町番町邊は夜も十一時を過ぎると、すつかり寢靜まつてゐた。空はすつかり晴れて、無数の星が美しくキラ／＼してゐる。

惣太は例によつて策戦も何もない、晝間見つけて置いた、土堀を巡らしたかなり大きい家の勝手口の前にどたりと止まつた。

いつもの惣太なら、直に裏口を押し破るか、いきなり堀を乗越すのだが、今日は悲しい哉。晝間見た所ではこの家に可成大きい犬があるのだ。犬の大嫌いな惣太は普通の理由ではこんな犬の

るる宅へは這入らないのだが、今日は騎虎の勢ひそんな事は云つて居られぬ。で、いつもと違つてそつと様子を見ながら、裏木戸に手をかけた。所が天の助けと云ふのだらう、木戸は手堪へもなくスーと開いた。

犬に吠えつかれはしないかとビク／＼もので、ギリ／＼庭の方へ行くと、どこかでウー／＼と云ふ微かな犬の呻り聲がする。惣太は忽ち傍にあつた松の樹にしがみついて、不器用な足取りでよぢ登つた。さうして今にもあの狼のやうなむく犬が飛んで来て、尻の邊へ飛びつかれるものと観念してゐた。

所が一向犬らしいものはやつて来ない。只どこかで微かなウー／＼と云ふ唸聲が聞えるだけである。

「しめ、しめ、惣太は思つたのである。緊いであるらしいぞ。あの犬は。」

惣太は樹からボンと飛降りると、庭の中に這入り、縁側の雨戸を知らなくコヂ開けて、家の中へ忍び込んだ。

晝間の鑑定では少くとも書生女中合せて四五人はゐると睨んだ家が、夜とは云ひながらしんと静まり返つて、人氣のない空家のやうである。流石の惣太も鳥渡薄氣味が悪い。奥の方から薄明りが差すので、一生懸命に音を立てないやうに用心しながら——惣太としては

蓋し之まででない念入りだつた。——這ふやうにして燈火の方に近づくと、それは可成廣い一室で疊敷ではあつたが、中の調度品はすっかり洋式だつた。無論、中には誰も居なかつた。眩しいやうな電燈が輝いて、フワ／＼とした椅子が二つ人待顔に相對してゐた。室の隅には大きなピアノが置かれてゐた。

惣太は人のゐないのを見澄ますとノツソリ中へ這入つた。さうして丹念に四邊を見廻したが、例の指輪がこんな所にあるとは思へなかつた。

惣太は暫くボンヤリ突立つてゐた。

「あら、やつぱし本當だつたんだわ。」

突然、背後で艶めかしい聲がしたので、惣太は飛上つて振向いた。美しい奥さんがニコ／＼しながら立つてゐた。

「あらつ！」奥さんは惣太を見ると、冷靜な態度を失ひながら、「まあ、あなたでしたの。晝間の——」

「奥さん、静かにして貰ひたいので」惣太は敵意のなささうな奥さんの態度に稍安心しながら、「少しお願えがあるんで、」

「指輪が欲しいのでせう。」奥さんは平然として答へた。

「——」惣太は圖星をさゝれて、あつけに取られた。
 「驚かなくても好いわ。」奥さんはニコ／＼しながら、
 「ちやんと警察から知らせがあつたのよ。」
 「えつ、警察から？」

「さうなの、今日夕方ね、刑事つて云ふ人が来て、私のダイヤの指輪を盗りに今晚盗人が来るから御用心なさいつて、それから警察から電話がかゝつて、警戒に巡査を上げると云つたけれどもそれは斷つたの。そしてね、書生も女中も皆暇をやつて、裏の木戸の鍵を外して、犬も轡をはめて繋いで置いたの。私、盗人を待つてゐたのよ。だけど、眞逆あなただとは思はなかつたわ。」

「ど、どう云ふ譯だね。」惣太はすつかり面喰らつた。
 「指輪が上げたいからだわ。あなた、本當にあの指輪が欲しいんでせうね。」

「うん、不承不承、惣太は答へた。」
 「でも變ぢやありませんか。晝間どうして私に返したの。」

「晝間の時は欲しくなかつたんで——」
 「妙な人ね。そして私がお禮すると云ふのに振向きもしないで行つたりして。それにあなたは私が名刺を上げた時、「行きやしないぜ」つて云つたぢやないの。行きやしない所か、早速やつて來

たぢやないこと。」

「それがその。」惣太は穴にでも這入りたいやうに縮みながら、「變な羽目でね、來なくちやならねえ事になつちやつたんだ。晝間、あゝ云つたのは嘘ぢやねえんだ。あの時は全く來る積りなんかなかつたんだよ。」

「ホ、ホ、面白方ね。眞顔になつて辯解してるわ。指輪が欲しければ玄關から大威張で這入つて來ればいゝのに。私は誰にだつてこんな指輪は上げるんだわ。」

女はちやんと手に持つてゐた小さな箱からキラリと光る指輪を取り出した。

「そりや然し、お前さんも變だぜ。」漸く元氣が出て來た惣太は云つた。「お前さんはそれを亡くなつた亭主の遺品だと云つて、大層有難がつてゐたぢやないか。あれは嘘かい。」

「いゝえ、嘘ぢやありません。」

「ぢや、俺に呉れようつてのは變だぜ。」惣太は勝誇つたやうに云つた。

「變ぢやないわ。」奥さんは吐き出すやうに云ふ。

「でも俺が返してやつた時には嬉しさうだつたぜ。」

「そりや、人中で眞逆取返して貰つたのを苦い顔も出來ないぢやありませんか。お前さんに上げると云ふ譯にも行かないし。」

「ぢや今は本當に呉れるんだね。」
 「え、上げるわ。」女は指輪を差出した。
 「變だな。」さう云ひながら惣太は指輪を受取つた。
 「ねえ、泥棒さん。」女は何を感じたか、沁々云ふ。
 「え、」惣太は釣込まれて返辭をした。
 「あら、御免なさいよ。私うつかりして。あなたは何と云ふ方？」
 「惣太さ。」
 「さう、ぢや、惣太さん。」
 「何でえ。」
 「私はね、嬉しいのですよ。今晚は、女は聲を潤ませた。「ねえ惣太さん、私はもと藝者だつたの。」
 「こいつはいけねえ。」さう思つて惣太は首を縮めた。
 「でね、この家の御主人に落籍されたの。五六年前の事よ。私は未だやつと廿歳だつたわ。御主人は年も若いし、男振りもよし、それに優しく、お金はあるし係累はなし、私來た時から、ずつと天國にゐるやうだつたわ。」

「おや、」惣太は心の中で救を呼んでゐた。
 「所がね、三年前に、さう全二年しか添つてゐなかつたわ。御主人は風邪がもとで肺炎になつて、ポツクリ死んぢやつたの。」彼女はポタリと涙を落した。「さうしてね、その臨終の枕許で、私にお前は若いからいづれ再縁するだらうと云ふので、いゝえ、私は一生獨りで暮しますと云つたら、嬉しさうにしてね、取り出したのがその指輪なの。さうしてね、お前が一生獨りである事はむつかしいだらう。だがさう云つて呉れるのは嬉しい。それで遺品にこの指輪を上げるから、私だと思つて大切にしてお呉れ。さうしてその指輪のあらん限り、私と一緒にゐる積りで、獨りで暮してお呉れ。もしその指輪を落したり、なくしたり、盗られたりしたら、其時はお前は自由だ。どうなり勝手にしてお呉れ。」と云つて私の手にその指輪をはめて呉れたんですの。私は當座、夫の事を思ひ出しては泣いて計りませんでしたわ。そして今だつて私思ひ出しては懐かしく思つてゐるのですが。」彼女は恥かしさうに口籠りながらつけ足した。「何だか、その指輪と別れたくないりましたの。」
 「成程ねえ。」惣太は少し解つたやうな氣がした。
 「ですから、今日電車の中で指輪を盗られた時にはホツとしましたわ。私、盗られるのを知つてゐたんですの。そしたら、思ひがけなくあなたが取り返して下さるんですものねえ。あ、まだ

自由になれないのかと嘆息してゐましたわ。」

「な、なるほど。」惣太は何の氣なしにした事が、思ひがけない影響を人に與へてゐるのに驚きながら、「ぢやまあ、この指輪は貰つときませうぜ。」

女は淋しさうにうなづいた。

十二時鳥渡前惣太が指輪を握りながら、我家の前へ立つと、ひそく話が聞えるので、思はず聞耳を立てた。

「惣太の野郎今頃はジタバタしてやがるだらうよ。」鐵次の聲だ。

「ど、どうして。」助五郎爺の聲だ。「辰、教へてやれよ。」

「助爺さん、俺親分の云ひつけでね、留の野郎を刑事にしてさ、女の家へ今晚盗人が来るから用心しろつて云はしたのさ。それから俺は俺で警察からだ云つて、巡査を警戒にやらうかと、へん、誠にやかに電話をかけたもんだ。幸ひに斷られたが、頼めば頼んだで又謀り事をめぐらして、巡査を出す手筈だつたのよ。」

「そ、そいつあ、餘り酷いぢやねえか。」助爺は驚いてゐる。

「何を、あの野郎は俺をこつ酷い眼に遣はせやがつて、おまけに親分にまで楯をつきあがつた。あんな野郎はちつたあ懲らしめてやらなきやあね。」

ガラツと格子を開けて惣太は飛込んだ。さうしてあつけに取られてゐる鐵次と辰の二人を尻目

にかけながら、キラリと光る指輪を助爺さんの前に差出した。

「爺さん、巡査を二人許り投げ飛ばしてね、盗つて来たよ。へん、親分だと、鐵次の方を向きながら、「親分てえなあ、さう云ふ卑怯な事をするものなのか。笑はせやがらあ。俺の腕はどんなもんだい。態見ろ。」

だが、勝ち誇つた惣太は急に聲を落して、次の數語を加へた。

「だが、爺さん、女なんてものは分らねえものだなあ。」

(終り)

女^シ
エ^ル
を^シ
エ[・]
ラ[・]
フ^ア
ア^ン
ム^ム
せ